
白と黒の神話

榛奈 伶奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白と黒の神話

【Nコード】

N1539C

【作者名】

榛奈 伶奈

【あらすじ】

平和な王国を揺るがすような事件。人々から愛されている王女アルデイスが忽然とその姿を消してしまっていた。犯人からは何の要求もなく、王女の生死も一切が不明。そのことに心を痛めた国王は、王女の話相手であるセシリアにその探索を命じていた。セシリアは無事に王女を見つけることができるのか？さまざまな謎と思惑が入り乱れていく

〔一〕

穏やかな光が回廊に溢れている。平和な王国であることで知られているグローリア。そこは、その王城の一角にある回廊である。朝の爽やかな空気と小鳥の囀る声。それらをかき消すような不似合いな音が、回廊に響いているのだった。

「セシリア様は？」

「こちらにはいらっしやらないわ。どちらにいらっしやったのかしら」

この王宮に仕えている侍女たちだろう。お揃いのお仕着せを身につけている少女たち。彼女たちは焦ったような表情を浮かべながらあたりをみている。そんな中、回廊に立つ人影をみつけた彼女たちは、ホッとしたような様子にもなっているのだった。

「セシリア様、大変でございます」

侍女のその声にふりむいた影。栗色の髪をきちんとまとめ、榛色の瞳には理知的な光が浮かんでいる。しかし、その身にまとっているドレスに剣帯を巻き、細身の剣を佩いている姿は不思議としかいようがない。だが、それは侍女たちには当たり前のことなのだろう。彼女たちは自分たちの発見したことを報告しなければならぬという思いにかられているようだった。

「一体、何があったというの。アルデイス様の侍女ともあるう者がはしたない」

セシリアは侍女たちがあたふたしている様子を咎めるような表情を浮かべている。彼女にしてみれば、侍女たちが回廊を走り回るのが気に入らないのだろう。形のいいその眉が不機嫌そうに寄せられている。それを見た侍女は、すっかり慌てているのだった。

「申し訳ありません。実は……アルデイス様のお姿がみあたらないのです」

「何ですって！」

侍女の報告にセシリアは柳眉を逆立てている。そして、侍女を押しつけるようにすると、ある部屋を一目散に目指しているのだった。その姿はいつものセシリアからは考えられるものではない。彼女のそんな姿を目にした侍女たちは一様に目を丸くしているのだった。

「アルデイス様！」

何度か部屋の扉を叩いてみても返事はかえってこない。それは、侍女たちの言葉を裏付けるものだろう。そのことにセシリアは意を決したように部屋の扉をあけているのだった。

その彼女の目に映ったのは、誰もいない部屋。しかし、特に荒らされたというような気配はない。いつもと同じように朝食の準備がされたテーブル。それはセシリアの見慣れたものである。だが、ここにいるはずの部屋の主の姿だけがないのだった。

「アルデイス様……」

それを見たセシリアは、まるでわけがわからない、という表情を浮かべている。しかし、こうしてもいられないと思ったのだろう。彼女はその場にいた侍女に問いかけているのだった。

「このことを他の者にも話した？」

「いえ、そのようなことはしておりません。まずは、セシリア様にご報告しなければと思いましたが……」

侍女のその言葉に、セシリアはひとまず安心したようだった。彼女は部屋の中を見回しながら侍女たちに指示を与えている。

「いつもと同じようにしているように」

「で、でも、セシリア様。それは不可能ではありませんか？」

セシリアの指示に驚いたような侍女の声。それに対して、彼女はきっぱりと言い切っていた。

「それくらいわかってるわ。でも、ここであなた方が浮ついていると、いらぬ噂をよんでしまうわ。それくらいわかるでしょう」

「それはそうですが……」

「本日のご予定はすべて断るように。それをきいて見舞い客も来るだろうけど、それも断るように。難しいことを言っているのはわか

っている。でも、そうしないといけないの」

セシリアのその気迫に侍女はおされたようになっていた。それでも、彼女の言葉に従わなければいけないと思うのだろう。ちよつと青ざめた顔色ながらも、お互いの顔をみながらうなずいている。それを見たセシリアは少しは安心したようだった。

「とにかく、陛下にお目にかかつてきます。後のことはそれからね」
それだけを言ったセシリアは、静かに部屋の扉を閉めていた。彼女は、この事態をどのように国王に説明しようかと懸命に考えているのだった。

そして――。

セシリアからこのことを知らされたウィルヘルムは、すっかり困惑した表情を浮かべているのだった。ここグロリアの国王として君臨している彼にとって、アルデイスは掌中の珠ともいえる愛娘である。先日、十九の誕生日を盛大に祝ったばかりの彼女は、国一番の美女ということでも知られているのだった。

「セシリア、そなたの言葉を疑うわけではない。しかし、本当にアルデイスはおらぬのか」

「はい、陛下」

セシリアのその返事にウィルヘルムはどうすればいいのかと悩んでしまったようだった。彼にはアルデイスが姿を消したということがどうにも信じられないことだったのだ。それでも、セシリアのことを信頼も信用もしている彼は、その言葉を疑っているわけではない。

「そうか……ところで、このことを知る者は他にはおるのか」

「おらぬはずです。アルデイス様の侍女は私に報告しただけだと言っております。当然、侍女たちには口止めをしております。彼女たちが口外せぬ限り、外部にもれることはございません」

「それならば、まだ少しは安心だな」

セシリアの言葉にウィルヘルムは大きく息をはいていた。その彼の顔色はまだどことなく悪いままである。だが、それも仕方がない

ことだろうとセシリアは思っている。なんといつても、王宮から王女が姿を消すという前代未聞のことが起こったのだ。平気でいられる方がおかしいと彼女は思っているのだった。そんな中、ウィルヘルムはセシリアに自分の側に来るようにと手招きしているのだった。

「セシリア、一度しか言わぬ。アルデイスを捜し出せ」

「陛下……それは、アルデイス様が王宮にあられないと思われてのお言葉ですか」

ウィルヘルムの言葉に含めている意味を察したセシリアは、驚いたようにそう呟いている。そんなセシリアに、彼は静かに言葉を續けているのだった。

「そなたのことだ。儂に報告する前に王宮中を捜しているのだろう」

「それはそうでございますが……」

ウィルヘルムの言葉にセシリアはどう答えようかと悩んでいるようだった。そんな彼女の顔をみながら、ウィルヘルムは言葉を續けている。

「ならば、アルデイスはいないと思わねばならぬだろう。なぜなら、宮殿内にアルデイスの姿があるのならば、このような報告は不要だからな」

ウィルヘルムのその言葉にセシリアは返す言葉もない。そんな彼女にウィルヘルムは絶対ともいうべき命をくだしていた。

「セシリア、金も人手も糸目はつけぬ。アルデイスを捜し出せ」

「かしこまりました」

セシリアにはそう返事をするしかできないのだろう彼の命に従うことを決めた彼女は深々と一礼すると、ウィルヘルムの前から下がっているのだった。

その日から、セシリアはアルデイスの行方を捜し続けた。しかし、どこにも彼女の居場所を指し示す手掛かりはない。城に所属する魔導師にも相談した彼女である。しかし、彼らからの返事がかんばしくないことに、セシリアはどうすればいいのかわからなくなったようだった。だが、だからといって何もしないでいるというこ

とが時間の無駄だということとはわかってる。彼女は自分から動かないといけないということにも気がついてるのだった。

「まったく、魔導師どもも頼りがいのない。こういう時こそ、力をみせるべきだろうに」

都の大通りをセシリアは魔導師たちへの不満を呟きながら歩いているのだった。今の彼女は城内にいる時とは違い、男物の衣装を身につけている。その髪が背中あたりまでということもあってか、ちよつと見た印象では特別に性別を感じさせるものではないようだった。

「セシリア様よ」

「本当、いづお姿を拝見しても素敵よね」

女たちの感嘆する声があたりに流れている。しかし、セシリアはそのようなことを気にしていない。彼女は通りからちよつと入ったところにある一軒の酒場に足をいれているのだった。そろそろ、客も入っているとみえてざわついている店内。その中で店主らしき人物と話している相手をみつけると、つかつかと近寄っているのだった。

「親父さん。雇ってくれてもいいでしょう」

「そりゃ、お前さんのような黒魔導師はほしいけどね」

「じゃあ、いいじゃない。あたしは仕事がなくて困ってるんだし」

自分たちの話に夢中になっているのか、セシリアが近寄ったのにも二人は気がついていない。そのうちの一人の肩をセシリアはポンと叩いているのだった。

「あなたがミステリーナね。ちよつといいかしら」

「急に何を言ってるのよ。あたしは、こっちの親父と話してるの」
夢中になっていた話の腰をおられたことで不機嫌になっている相手。しかし、店主の方は声をかけてきたのがセシリアだということに気がついたのだろう。彼は、すっかり驚いた表情を浮かべていた。

「お、おい。この方がどなたかわかっているのか？ セシリア様だぞ」

しかし、相手はおどおどした様子で声をかける店主の様子など気にしていないようだった。セシリアにミステイリーナと呼ばれた相手は、改めてジロジロとセシリアをみているのだった。

「セシリア？ ああ、あの『ハートヴィルのじゃじゃ馬』ね」

ミステイリーナのその言葉に、店主の顔色は一気に青ざめてしまっていた。

「何を言うんだ、ミステイリーナ。お前との話はもう終わりだからな。セシリア様、申し訳ありません。こいつはみてのとりの奴でして、礼儀も何も知らないんです」

自分のことではないのにあたふたと謝罪をする店主。もつとも、セシリアはそれに格別の反応をみせてはいない。一方のミステイリーナは思わず慌てたような声をあげているのだった。

「どういうわけよ。なんで、そんなこと言うのよ」

ミステイリーナのその声に主人は返事をしようとはしない。彼はこのままミステイリーナと関わっていれば、セシリアの機嫌を損ねかねないと思ったのだろう。逃げるようにそそくさと奥の厨房に入っている。その姿にミステイリーナは思わず舌打ちをしているのだった。

「まったく……どうして、こうなっちゃうのよ」

上手くいっていると思った交渉。その相手に途中で逃げられたことに、ミステイリーナは思わず肩を落としていた。そんな彼女の様子など気にしないような顔でセシリアは声をかけているのだった。

「あなたがミステイリーナなんでしょう？」

セシリアのその声に、ミステイリーナはどうしてこうなってしまったのか思い出していた。もう少しで仕事を手に入れられたのに、という思いが彼女の中にはあったのだろう。ミステイリーナはセシリアにくっついてかかっているのだった。

「一体、あなたって何様なの。あたしは仕事をしなきゃいけないの。それを邪魔する権利はあんたにはないはずだわ」

ミステイリーナは腰に手をあて、足をトントンと踏み鳴らしなが

らセシリアを睨みつけていた。そんな彼女の顔をセシリアは呆れたようにみているのだった。

「権利はあると思うわよ」

「何ですって！ 貴族だからってそんなことできるはずないじゃない！」

セシリアが貴族の令嬢だということはミステリーナも知っている。しかし、たとえそうであるからといって、彼女の言うことに素直にうなずくこともできなかったのだ。そんなミステリーナにセシリアはうんざりしたような声をかけている。

「ギルドには顔を出していないのね」

「毎日、行く必要ないもの。それに、あたしは自分の仕事は自分の力で手に入れるの」

「そうなんだ」

セシリアのその声には冷ややかな感じも含まれている。まるでバカにされたように感じたのだろう。ミステリーナはますますカチンときたようだった。酒場の喧騒もあいまって、彼女の声のトーンは一層あがっているようだった。

「あんたは何が言いたいのよ。あたしがギルドに顔を出してないのがあんたに関係あるっていうの？」

「そうね。大いにあるといえるわね」

思わせぶりなセシリアの言葉。それにミステリーナは少し興味をひかれたようだった。

「じゃあ、教えてもらおうじゃないの。あたしがギルドに顔を出すのとあんたとの関係」

言葉こそたずねるようなものであるが、その口調は相変わらず棘があるもののように感じられる。それに気がついたセシリアは一瞬、ムツとしながらも仕方がないというような顔をしているのだった。

「あなたがギルドにさえ行っていれば簡単だったのよ」

「ふーん。で、そのわけは何なのよ」

お互いに冷ややかさしか感じさせない口調。ざわついた空気が流

れている酒場で、二人のいる一角だけがシンとなっているようだった。そんな中、セシリアは奥の手ともいえる一言を口にしている。「それじゃ、ギルドから召喚状が出ているのも知らないのね」

セシリアのその言葉にミスティリーナは声も出ないようだった。ギルドからの召喚状。それはギルドを通じての仕事、もしくは懲戒を意味している。どちらにしても無視することなどできないものである。しかし、自分はそれをみていなかったとミスティリーナは思っているのだった。

「召喚状なんてみてないわよ。嘘つかないで」

「嘘じゃないわ。ギルドがあなたに召喚状を出したっていうから、ずっと待っていたのよ。それなのに、いつまで待っても来ないじゃない」

どうやらセシリアはギルドで一日中、ミスティリーナを待っていたのだらう。話している間にそのことを思い出してきたのか、彼女の声のトーンはだんだんと上がり、手厳しさも加わってきているのだった。

「ギルドもすっかり呆れていたわ。多分、ここにいるだらうって教えてもらったわけ。そうしたら、あなたって……」

自分がここに来た時、ミスティリーナは店主を相手に話し込んでいたのだ。そのことを思い出した時、セシリアの怒りは頂点に達したのだらう。彼女はキツとミスティリーナを睨みつけているのだった。

「気楽にここの店主と話をしているじゃないの！ 本当に何を考えているの。ギルドからの召喚状をなくしたっていうの」

柳眉を逆立て、ミスティリーナに詰め寄るセシリア。しかし、ミスティリーナの方も負けてはいないようだった。セシリアの顔を正面から睨んだ彼女も負けじと言い返している。

「あんたは一日ギルドにいたって言うけど、それはあんたの勝手。あたしには関係ない」

「そこまで言うの。じゃあ、こっちにも考えがあるわ。あなたがギ

ルドからの召喚状をなくしたって言ってあげる」

「あんたにそんなこと言う権利ないじゃない。わかったわよ。そこまで言うんなら宿にいらつしゃいよ。召喚状があるかどうか、一緒に確かめようじゃないの」

セシリアの言葉と態度にすっかり腹を立てているミスティリーナはそう言っていた。そして、セシリア自身もそれに異論のあるはずがない。二人はどことなく険悪な雰囲気のまま、ミスティリーナが常宿にしているウエリオの宿に足を運んでいるのだった。

「リーナ、すまない。お前に渡しそびれていたのがあったんだ」

宿についた二人の耳に、そんな声が飛び込んできている。その声の主であるウエリオは封筒をミスティリーナに手渡しているのだった。

「忘れていたって……これが何だかわからなかったの？」

ウエリオから渡されたものが、ギルドからの召喚状だということに気がついたミスティリーナの声は裏返っている。そんな彼女にウエリオは悪びれた様子をみせていなかった。

「忘れたとは言ったが、なくしたんじゃないんだからな。とにかく、それはお前に渡したからな」

そう言うなり、ウエリオはさつさと奥に入っていく。その後ろ姿を呆然とみおくれたミスティリーナは、すっかりバツの悪そうな顔をしているのだった。

「召喚状、あった……ごめん」

「わかってくれたのならいいのよ。で、どうするつもり」

セシリアの声にミスティリーナは封筒に目をやっていた。封をしてある蠟の色がオレンジ色である。これなら心配することはないと彼女は思っているのだった。オレンジ色の封蠟は仕事の依頼である懲戒の意味をもつ黒の封蠟でないことに安心したミスティリーナはセシリアに声をかけていた。

「あんたの話をきかせてもらっわ。よかったら、あたしの部屋にこない」

先ほどまでとはまるで違う様子のミスティリーナ。それに不思議な顔をしながらも、セシリアはうなずいている。二人は黙りこくつたまま、宿の中に入っているのだった。

「そこらへんにかけてちょうだい。もつとも、客が来るなんてことないから、何もなければいいわね」

ミスティリーナのその声にセシリアは適当な椅子に腰をかけている。そしてミスティリーナはギルドからの召喚状を丁寧に読み直しているのだった。しかし、それには仕事依頼の召喚状ならば書いてあるはずの依頼内容がない。書いてあるのは、依頼主であるセシリアの名前だけである。こうなったら、本人にたずねるのが一番手っ取り早いだろうとミスティリーナは思っているのだった。

「あんたの依頼っていうのが何なのか、きいてもいい？」

「うん……どういえばいいのかしら……」

先ほどまでの勢いが嘘のようにセシリアは大人しくなっている。

彼女はと言えばいいのかと考え込んでいるようだった。そんな彼女にミスティリーナは苛々したような声をかけている。

「言えないことなの？　じゃあ、それほど重大なことでもないのね。あれほど大騒ぎしたのにね」

ミスティリーナのその言葉にもセシリアはなかなか返事をするこゝとができない。そんな彼女の様子にミスティリーナは呆れたような表情を浮かべているのだった。

「あんたが依頼主だっていうのは、これみたらわかる。でも、依頼内容をきくのはあたしの権利だわ。そうでしょう？」

「それはわかってるけど……」

どこか歯切れの悪いセシリアの様子。それをみている間に、今度はミスティリーナの我慢の限界がきたようだった。

「話せないのならかまわないわ。この話はここで終わり。あたしは受けないし、そのことでギルドから文句を言われる筋合いもない」

そう言うなり、ミスティリーナはプイツと横を向いている。彼女のそんな態度にセシリアはすっかり慌てたようだった。

「待つてよ、わかったわ。実は、聖王女を捜しているのよ」

「聖王女！」

セシリアの言葉にビックリしたミスティリーナは大声をあげている。そんなことならば、たしかに依頼内容は書けないだろうという表情が浮かんでいる。一方、セシリアは口にしたということで、逆に話しやすくなったのかもしれないかった。

「聖王女とも呼ばれているアルデイス様のお姿が急に消えてしまったの。私はお側仕えをしていることもあつて、捜すようにと陛下からのご命令を受けたの。アルデイス様をみつけることができれば、あなたの望みはなんでも叶えるわ。だから、力を貸して」

セシリアの言葉に思わずゴクリと喉を鳴らしたミスティリーナ。彼女はセシリアが最後に言った一言に興味がわいたようだった。ミスティリーナはセシリアの顔をじつとみながら、確かめるように呟いている。

「望みはなんでも叶えるつて？」

「ええ。地位でも名誉でも何でもよ。あなたが望むのなら、一生不自由のない暮らしができるようにもしてあげる」

セシリアのその言葉に、ミスティリーナの目はキラリと光ったようだった。先ほどまでのどこか投げやりな態度が一変している。

「一生不自由のない生活？ 本当に？」

「も、もちろんよ……」

ミスティリーナの気迫におされたようになっていくセシリア。そしてミスティリーナは、これ以上のものはないという極上の笑顔を浮かべているのだった。

「依頼を引き受けるわ」

「えっ？」

あまりにも唐突に感じられる返事に、セシリアは目を丸くしていた。しかし、ミスティリーナはそんな彼女の様子を気にするところなどない。彼女はセシリアが言った『一生不自由のない生活』という言葉に夢中になっているのだった。

「あんたが困ってるんだし、聖王女をあたしたちで捜すって面白いじゃない」

その返事はあくまでも建前。本音は物質的なものであるのだが、それは黙っていた方がいいとミスティリーナは感じているようだった。なんといいっても、セシリアは生活の苦勞などしていない貴族の令嬢である。自分と同じような考えでいるはずがない、というのがミスティリーナの出した結論だったのだ。しかし、セシリアはそんなこととは思ってもいない。彼女はミスティリーナが承諾してくれたことを無条件に喜んでいるのだった。

「本当に承知してくれるの、ミスティリーナ」

「そうよ。あ、あたしのことはリーナでいいから。知り合いはみんな、そう呼ぶんだし」

すっかり喜んでいるセシリアの顔をみながらクスリと笑ったミスティリーナはそう言っていた。

「わかったわ。じゃあ、リーナね。それなら、私のこともリアって呼んでちょうだい」

セシリアのその言葉に思わずミスティリーナは目を白黒させていた。あまりにも警戒心というものがなさすぎるのだ。そんな彼女にセシリアは気にすることはない、というように手をヒラヒラふっているのだった。

「私の噂はきいているでしょう。だから、そんなに気にすることないわ。それよりも、あなたのことをいろいろと教えてほしいわ。どうかしら」

「あんたがそう言うならいいことにしとく。うん、あたしはあんたのことは噂できいてもあんたはそうじゃないもんね。あんたさえよかったら、ここで話そうか」

ミスティリーナの言葉にセシリアは笑ってうなずいている。そこには、酒場で出会った時の喧嘩腰な姿はどこにもない。もっとも、それはミスティリーナにもいえることだった。二人は同じ年頃の女同士という気安さも手伝ってか、飽きることなく話を続けているの

だった。

そして、翌朝――。

どことなく眠そうな目をこすりながら、部屋の窓をあけているミステイリーナの姿があった。その後ろにはセシリアの姿もみえる。二人は一晩中、お喋りを続けていたのだった。

「よく話したわね。もう、朝になっているわ」

「本当。でも、これであたしのこともわかってもらえたかな」

そう言いながらセシリアの方をみているミステイリーナ。一晩中、話したことで二人の中には心安さというものもうまれていたのだろう。それを証明するようにセシリアがミステイリーナにかける声は穏やかさが感じられる。

「ねえ、夕べも話したけれど、一緒にお城に来てくれない？」

「あたしが行って、場違いになるかもね。だけど、一度は行ってみたいと思っていたのよね」

そう言うなりミステイリーナは黒魔導師の着るローブに手をのばしている。それを見たセシリアはすっかり慌ててしまっている。

「リーナ、あなたってそれ以外の服はないの」

「当たり前じゃない。あたしは黒魔導師よ。それに何か問題あるの」
「大ありだわ」

そう言うなり、セシリアは大きくため息をついている。しかし、このことで押問答をして時間を無駄にしたくないようだった。

「仕方ないわね。まあ、この時間ならお抱えの魔導師とは鉢合わせしないか。そのかわり、侍女たちが変な目でみるかもだけど辛抱してよね」

「それくらい慣れてるわ。じゃあ、行きましょうか」

セシリアの心配などものもしないように、ミステイリーナはコロコロと笑っている。ウエリオに出かけて来るからと気軽に声をかけた彼女はセシリアと並んで歩いていた。男装の令嬢と黒魔導師という、ちよつと変わった組み合わせの二人は周りの視線など気にすることもないうちに、城への道をたどっているのだった。

(二)

セシリアが案内したアルデイスの部屋。さすがに一国の王女の部屋であることは間違いないとミステイリーナは思っているのだった。レースのカーテンを揺らす風。燦々と日の光りがさしこんでいる室内。部屋のあちこちには繊細な彫刻や絵画が飾られている。もっとも、ミステイリーナにしてみれば、そんな装飾品はただ眺めるだけのものだったろう。彼女は部屋の主がいないにもかかわらず、きちんと整理されいつでも生活できるようになっている部屋というものに驚いているようだった。

「やっぱり、お姫様の部屋よね……」

部屋においてあるものはどれも贅の限りを尽くした最高のものである。そのことに目敏く気がついたミステイリーナは思わずそう呟いていた。部屋の中には彼女の他にはセシリアだけである。なぜなら、アルデイスの姿がみえないということが噂となって囁かれようとしている。そこへセシリアが黒魔導師を伴ってやってきたのだ。侍女たちは好奇の目でミステイリーナを見ているし、アルデイスの部屋に彼女をいれるのを嫌がった。だが、セシリアの言葉には逆らえない。そして、彼女はしばらくの間、誰も来ないようにと命じているのだった。

「リーナ、何かわかるかしら」

彼女ならば何かわかるかもしれないと期待しているようなセシリアの声。それをきいた彼女は、セシリアの顔をマジマジとみているのだった。

「ねえ、リア。この部屋に隠し通路とかってないの」

ミステイリーナのその言葉に、セシリアはハツとしたようだった。どうして、そのことを思いつかなかったのだろうというような表情が浮かんでいる。

「あるわ。私っただろっていたんだろ。そこは一番に調べるべ

きよね」

そう言いながらセシリアはためらうことなく書棚の一つに近寄っていた。それを力任せに引いた彼女の前に、人が通れそうな穴がポツカリと口をあけているのだった。

「やっぱりお城ね。こういうものがあるんだ」

穴の中を覗き込むようにして、ミステイリーナがそう呟いている。そこはきちんと手入れがされているのだろう。薄暗くはあるが階段があるのがわかる。そしてセシリアは燭台を持つと、ミステイリーナを促すようにして、中へと入っているのだった。

「私も入るのは初めてなの。ここって、外に繋がる通路だってきいたことあるわ」

そう言いながら階段を下りていくセシリア。どこかに空気取りのための穴があいているのだろう。彼女の持つ燭台の火がゆらゆらと揺れている。ミステイリーナもどこか緊張した様子で言葉を発しうともしていない。ちよつと不安定ともいえる足場を確かめるように歩いている二人。やがて、これといった収穫もないままに隠し通路の出口にまで到着しているのだった。

「ここから外に出られるんだ」

そう言つて振り向いたミステイリーナの目には城の塔が映っている。ということは、ここは城内ではないということだろう。そのことを彼女はセシリアに確かめているのだった。

「ええ、ここは城内じゃないわ。でも、何もなかったわね」

何か手掛かりがあるのでと期待していたセシリアの口調が力のないものになつている。そんな彼女を慰めるようにミステイリーナは明るい声を出しているのだった。

「今度は反対側からみてみれば？ 一度じゃわからないものよ」

ミステイリーナのその言葉に、ちよつと元氣を取り戻したようなセシリアがいる。二人は見落としたものがないかと氣をつけながら、来た道を引き返しているのだった。そんな二人の前に、ちよつとした部屋が姿をあらわしている。

「ねえ、リア。これって隠し部屋よね」

「どう考えてもそうよね」

通路だけだと思っていた場所にある部屋。先ほど通った時は気がつかなかったのに、と思いながらもセシリアは部屋を覗いているのだった。

そこにはテーブルと椅子がある。まるで、お茶会でもしていたような様子。それを見た時、セシリアはあることに気がついたようだった。

「あ、あのバカ王子！」

セシリアのその勢いは『怒髪天をつく』という表現がピッタリだろう。彼女の思いもいなかった一面を目の当たりにしたミスティリーナは目を白黒させていた。

「リ、リア。落ち着こうよ。どうしたっていうのよ」

まるでわけのわからないミスティリーナは、そう言うしかできない。彼女のどこかオロオロしたような声に、セシリアも自分が一人でいるのではないと思いついたようだった。

「ご、ごめん。あんまり、腹が立ったから……」

「あんたの顔みたら、それはわかる。でも、できたらあたしにもわかるようにしてくれない？」

ミスティリーナのその言葉にセシリアはうなずいている。

「わかったわ。歩きながらいいでしょう」

そう言うと、セシリアは階段を上がりながら話をしているのだった。

「リーナがこの国の生まれじゃないことを忘れていたのよ」

どこか疲れたような声でそう言っているセシリア。その声をきいたミスティリーナは彼女の言いたいことが、なんとなくわかるような感じがしているのだった。

「なんとなくわかる気がするセシリアがさっき言ったバカ王子って、お姫様の兄さんか弟でしょう」

自分が話さないうちからそう言うてくるミスティリーナの勘の良

さ。そのことにセシリアは内心、舌を巻いていた。

「そうよ。アルデイス様の兄君。アルフリート様っておっしゃるんだけど、問題がある方なのよ」

そう言うなり、セシリアは再びため息をついている。この分だと自分が何も言わない方が話しやすいと思ったのだろう。ミスティリーナは口をはさもうとはしていなかった。そんなミスティリーナの気配りにセシリアは感謝したように話している。

「大きな声では言えないことだけど、アルフリート様がアルデイス様にベツタリなのは、宮廷内でも有名なことなの」

「ベツタリっていうことは、その王子様、シスコン？」

黙っていようと思っていたミスティリーナだが、セシリアの言葉に我慢ができなかったようだった。自分でそう言うてから慌てて口を押さえているが、そのことをセシリアは咎めようとはしていない。それよりも、それを強調するような言葉が彼女の口からもれている。「そうなのよ。その、シスコンなの！ おまけに、アルデイス様の結婚話が気に入らないって公言してるし」

苛々したような口調のセシリア。話しているうちに、ますますその思いが強くなったのだろう。彼女の口調はだんだんと辛辣になってきている。

「ホントにあのバカ。何を考えているのかしら」

階段を上がりながら、なおもブツブツ言っているセシリア。そんな彼女にミスティリーナは自分の疑問をぶつけているのだった。

「っていうことは、お姫様は結婚が決まっていたの？」

「正式じゃないわ。そういう話があったのよ。でも、それは当たり前のことでしょう」

「お姫様だもんね。でも、シスコン兄貴にしてみたら、妹をとられるって思っのかな」

セシリアの言葉にどことなく納得したようなミスティリーナ。二人はお互いに顔を見合わせながら、階段を上がっているのだった。「リアがバカ王子って言ったわけがわかったような気がする。でも、

「そうだからって……」

「このことは誰もが知ってるわけじゃないわよ。私だって、隠し通路は知っていたけど隠し部屋までとは思わなかったわ」

「そっか。それもそうよね。誰もが知ってたら、役に立たないもんね」

「そうよ。だから、ここを使おうなんて考えるのは、あのバカぐらいよ」

「誰がバカだって」

話しているうちに、二人は隠し通路から出ているようだった。そして、その二人を出迎えたのがどことなく不機嫌そうな若い男の声。もっとも、セシリアはそんなことを気にしていないようだった。その声の主は彼女も不機嫌さを隠そうとはしていない。

「バカをバカと言うのがいけませんか？」

「で、そのバカは誰だって？」

「十分に心当たりはあられますでしょう。でも、お目にかかれてよかったです。アルフリート様におたずねしたいことがありましたから」

セシリアのその声に、ミスティリーナはこれがシスコン兄貴かとマジマジとみつめている。しかし、当のアルフリートはそんなことは気にもしていない。むしろ、彼はセシリアたちが出てきた場所に気がついた時、慌てたような表情を浮かべていた。

「き、ききたいことって何だろうな」

セシリアが聞きたいことの内容は見当がついているだろうに、すっとばけた顔をしているアルフリート。そんな彼の様子に、セシリアは苛立ちを感じているようだった。

「アルフリート様、この奥にあるものが何かはご存知ですわね」

「こたえる必要はないだろう。それよりも、そっちの見たことない奴は誰だい？」

セシリアの質問にはこたえようとせず、逆にたずねかえしてくるアルフリート。そんな彼の様子に舌打ちしているセシリアだが、

答えないわけにはいかない。なんといつても彼の方が地位も身分も上なのだ。仕方がないというような表情で、セシリアは口を開いている。

「彼女はミスティリーナといいます。アルフリートもご承知の件を解決するため、力を貸してもらっております」

「そうなんだ。黒魔導師のようだけれども、セシリアが決めたならいいか。で、何かわかったのかい？」

先ほどまでとは違う、どこかエラそうな彼の態度にセシリアの我慢も限界がきたのだろう。彼女はグイツとアルフリートに詰め寄ると、それまでの慇懃な態度をかなぐりすてていた。

「その質問は、そっくりお返ししますわ。私もこの部屋に隠し通路があるのは存じておりました。しかし、隠し部屋まであるとは存じておりませんでした。でも、アルフリート様でしたら、当然、ご存知でしたでしょうね」

「隠し部屋？ どうだったかな」

ひょうひょうとした雰囲気すら与えそうなアルフリートの言葉。

それを耳にしたセシリアは、彼が何かを隠していると感じたようだった。そして、このままでは埒があかないと判断もしたのだろう。

彼女はアルフリートをキツと睨みつけていた。

「しらばつくれるのもほどにしてください。あそこに隠し部屋があることは、王族ならば知っておくべきことでしょう！」

セシリアの態度が豹変したことに、アルフリートもミスティリーナもすっかり驚いてしまっていた。

「セシリア。お、落ち着こうな……」

彼女の気迫に押されたのか、おどした態度のアルフリート。しかし、そんな彼にセシリアは容赦などするつもりはないようだった。

「アルフリート様がアルデイス様の縁談にいい顔をなさっていらっしやらないことは承知しております」

遠慮というものも感じられないようにいい続けるセシリア。一方、

アルフリートはそうやって言われっ放しになりそうな形勢をなんとかして盛り返そうとしているようだった。

「だって、反対もするだろう。誰が可愛い妹をあんなヤツにやらないといけないんだ！」

「それはアルフリート様だけのお考えです。陛下のご意向、アルデイス様のご意思はどうだったのですか」

セシリアは、この結婚話を反対していたのはアルフリートだけだということを知っている。だからこそ、辛辣な言葉になるのだが、言われている本人は気にすることもない。彼は彼なりの論理を展開しているといえるのだった。

「父上は政略的なことも考えておられるんだろう。それだったら、アルデイスがそれに逆らえるはずがないだろう」

「陛下が国のためにと考えられたことに反対なさるわけですか。それが王太子としての行動ですか」

半ばうんざりした表情でセシリアはそう言っている。しかし、アルフリートには関係ないようだった。

「政略が大切なのはわかる。でも、それとこれは話が違っだろう。あいつがアルデイスに惚れてるのか？」

「王族の婚姻は国を繋ぐ最高の絆となりえます。それをつぶそうとなさるからには、きちんと確かめていらっやいますよね」

「そんなこと、する必要ない！ 僕がそう感じているんだ。間違っているはずないだろう！」

「……シスコン……」

アルフリートの身勝手ともいえる言葉の数々。それを聞いていたミステイリーナはボソツと呟いていた。そんな彼女の声が聞こえたのか、アルフリートは反論している。

「シスコンじゃないさ。妹思いといってほしいね」

「それがシスコンなんじゃない」

アルフリートの言葉に呆れたような声を出しているミステイリーナ。そんな彼女に同調するように、セシリアも言葉を続けていた。

「ミステイリーナの言うとおりです。そして、アルフリート様のなさったことは、陛下のご意思に反することではありませんか？ アルデイス様をそのかして、隠れていらっしゃるようにおっしゃったのでしょうか。どうして、そのようなことをなさったのか教えていただきたいですわ」

アルフリートの性格をセシリアはよく知っている。だからこそ、大人しくしていたら自分の知りたいことなど聞き出せないと思ったのだろう。王太子であるアルフリートに対して、乱暴ともいえる言葉の数々だが、効果の方は間違いないといえるのだった。

「そそのかしたって人聞きの悪いことを言うんじゃない」

セシリアの言葉が的を射ていたことを証明する声。そして、苦虫をつぶしたようなアルフリートの顔。それを見たセシリアは、自分の考えが的外れでないと確信したのだろう。アルフリートを追及する声に、ますます力が加わっているのだった。

「やっぱりでしたのね。でしたら、説明してください。アルデイス様はどちらに行かれたのですか？」

「なんだって！ アルデイスは隠し部屋にいないのかい？」

セシリアの言葉にアルフリートは真っ青になっていた。彼は慌てて隠し部屋に入っている。しかし、そこに誰もいないという事実、彼は呆然としてしまったのだった。

「う、うそだろう……」

「アルフリート様、説明していただけますか？」

予測もしていなかったことを目にして呆然としているアルフリート。そんな彼に追い討ちをかけるようなセシリアの声。この事態になって、さしもの彼も自分の知っていることは白状するしかない観念したようだった。

「僕がアルデイスに隠れているように言っただのは間違いないさ」

「どうして、そんなことを？」

そつたずねるセシリアだが、大体の理由はわかっている。そして、それを考えると苛々するのだろう。どこか棘のある口調で、彼女は

話の続きを促しているのだった。

「アルデイス自身も不安だったみたいなんだ」

「この結婚が政略結婚だって思ったから？　かもね。女の子ならそれが当たり前かな？」

お姫様とはいつでも普通の女の子なんだ。そう思ったミスティリーナはポツンとそう呟いている。彼女のその声に、アルフリートは力を得たようだった。

「だから、アルデイスに言ったんだよ。父上が本当にお前の幸せのことを考えているなら、お前が姿を消せば必死で捜すだろうし、ちゃんと気持ちもきいてくれるだろうって」

「その口車にアルデイス様はのってしまわれたわけですね」

大体の事情がわかったセシリアの口調は冷ややかとしか言いようがない。そんな彼女の様子にビクビクしながらも、アルフリートは話し続けるしかないようだった。

「でも、それもそろそろやめるつもりだったんだ。周りも騒ぎ始めているし。で、アルデイスにそのことを言いにきたら、お前たちがいたわけだ……」

アルフリートのその言葉に、セシリアは何も言えないようだった。盛大についたため息が、彼女のやるせなさを物語っているのだろう。「では、アルフリート様は本当にご存知ないのですね」

事実を確認するようなセシリアの言葉にアルフリートはうなずくしかない。それをみたセシリアはどうすればいいだろうと悩んでしまっていた。その時、その場にやってきた相手の姿をみたセシリアはホッとしたような表情を浮かべているのだった。

「ジャスティン、ちょうどいいところに」

「セシリア、どうかしたのか」

その相手の格好は、きちんと着ていればそれなりの地位だと一目でわかる軍服。しかし、それをだらしなく着崩し、どことなくくたびれたような印象も与えている。もっとも、セシリアはそのことを気にせずに話している。しかし、ミスティリーナにとってはそうで

はない。一体、この相手は誰なのだろうというような顔で彼女はその相手をみているのだった。

「このシスコン王子から事情をきいておいていただけます？」

「事情つて、例のことか？」

「そうよ。あなたのことだから、陛下から話はきいているでしょう。私、このバカ王子の相手をしていたら、気がおかしくなりそうだから」

セシリアのその言葉にジャスティンは思わず苦笑いを浮かべている。その彼は彼女と一緒にいるミスティリーナが黒魔導師の姿をしているのに驚いてしまっていた。

「そりゃ、お前の頼みならきいてやるがな。それよりも、そっちの奴は黒魔導師だろう。何を考えてる」

「お抱えの連中よりも頼りになるわ。それよりも何かわかったことありまして？」

ジャスティンの役目が情報収集であることを知っているセシリアはそう尋ねている。おそらく彼ならば、誰よりも情報を持っているだろうという期待がセシリアにはあったのだった。

「いや、今のところは何もない」

彼のその返事にガツクリしたセシリアだが、それではいけないと気を取り直してもいるようだった。

「仕方ありませんわね。でしたら、何かわかったことがありましたら、ウエリオの宿まで。しばらくはそちらにいますから。リーナ、行きましょう」

それだけ言うと、セシリアはその場から立ち去ろうとしていた。そんな彼女を止めようとしたジャスティンだが、彼女の雰囲気があるのを許そうとはしていない。そして、彼自身もセシリアの言葉の端々から、アルデイス失踪の鍵を握っているのがアルフリートだということに気がついたのだろう。彼を見る目にはどこことなく冷たいものもある。

「アルフリート様、話をきかせていただきましょうか」

ジャスティンのその声にアルフリートはなかなか返事ができない。彼はセシリアに『バカ王子』と言われたショックが抜けきっていないようだった。そんな彼の様子をジャスティンはため息をつきながらながめるしかないのであった。

アルデイス失踪の原因がおぼろげではあってもわかったことは幸いだろう。しかし、その原因となったのが彼女の兄であるアルフリートだということに、セシリアはこれからどうしようかと考えてしまっていた。ミスティリーナが常宿にしているウエリオの宿の一室をとったセシリアだが、その口からはため息しか出てこないようだった。

「リア、これからどうするの」

みかねたようなミスティリーナの声にもセシリアは返事をすることができない。それでも、いつまでもこれではいけないという気持ちもあるのだろう。彼女は何かを吹っ切ったような顔でミスティリーナをみているのだった。

「心配かけたわね。ちよつと、つきあつてほしいんだけどかまわない？」

「いいわよ。だって、あんたはあたしの雇主なんだし」

ミスティリーナのその声にセシリアはどことなく感謝しているような表情を浮かべているのだった。そうして二人が出かけた先。それは、華やかなグローリアの都には似合わないような建物だった。誰も住んでいないような古びたそこ。その建物の扉をあけたセシリアは、ミシミシ音をたてそうな階段をミスティリーナと一緒に上が

っているのだった。

「ねえ、リア。こんなところに人が住んでいるの？」

どう考えても人が住んでいないような建物。それなのに、セシリアの返事はない。彼女の顔には心配することはない、というような表情が浮かんでいるだけ。

「わかったわよ。一緒に行くわよ。でも、この階段、怖いわね」

お化け屋敷といっても過言ではないような建物。そこに入るのはおっかなびっくりな面もあるのだろう。内心、行くと云うんじやなかったと激しく後悔しているミステリーナだった。しかし、セシリアはそんなことは気にもしないという風にある部屋の扉を叩いている。彼女にとっては、アルデイスの行方を一刻でも早く知りたいという思いしかなかったのだろう。

「グラン・マ、いるんでしょ」

「その声はリアだね。入っておいで」

セシリアの声に応えるように中から聞こえてくる声。それを耳にしたセシリアはミステリーナを促すと部屋に入っていた。その部屋も建物と同じであちこちがかなり傷んでいるようにみえる。そしてセシリアは、部屋にある大きな揺椅子にちんまりと座っている老婆に近寄っているのだった。

「グラン・マ、教えてほしいことがあるのよ」

「相変わらずせわしい子だね。とにかく、そこにおかけ」

グラン・マと呼ばれた老婆はセシリアをたしなめるようにそう言っている。そう言いながら二人に椅子を指し示すその手は枯枝のように細いものであり、彼女がかなりの高齢であることを物語っているのだった。

「あまり、のんびりできないのよね」

椅子に腰掛けながらセシリアはそう言っている。しかし、グラン・マはそんな彼女の様子にも態度を変えることはないようだった。

「あんたの知りたいことはわかってるよ。でも、焦ったからどうなるってものでもないだろう」

「私はまだ何も言っていないわよ」

自分の焦りをみすかされたようなグラン・マの言葉に、セシリアはちよつとムツとしたような顔になっている。しかし、グラン・マはそんなことを気になどしていないようだった。

「あたしは占いのババだよ。忘れたのかい？」

「それはそうだろうけれど……」

グラン・マの言葉に、セシリアは力なくこたえている。その時、グラン・マはミステリーナの存在にも気がついたのだろう。改めて彼女の顔をジツとみているのだった。

「それはそうと珍しい連れだね。あんたは火のお嬢さんだろう」

「えっ？」

急に声をかけられたことで、ミステリーナの声は裏返っている。

「火のお嬢さんって、あたしのこと？」

おどおどした様子でそう言っているミステリーナ。そんな彼女にグラン・マは当たり前というような顔をしている。

「ここには、あんた以外の者はいないだろう。あたしは、リアのことは前から知っているからね」

「そりゃ、あたしの使う魔法は火だけだね」

初めて会った相手のことがわかるということにミステリーナは啞然とした顔をしている。そんな中、セシリアの苛ついたような声が響いていた。

「それがわかるのは相変わらずだと思うけど、私の話もきいてよ」

「あんたが焦っているのはわかってるよ」

「わかってるならどうして……」

思わずそう呟いているセシリア。そんな彼女にグラン・マはゆつたりとした口調でこたえている。

「でも、焦っちゃいけない。そうしたら、手に入るものも入らなくなるよ」

そう言つとグラン・マはのんびりと揺椅子を揺らしている。それを見たセシリアは自分が苛立つ気持ちを押さえることができないよ

うだった。

「グラン・マしか頼りにできないのよ。どうして、そんな風にしか言えないのよ」

「だって、今回のことは聖王女が絡んでいるんだろう」

ポツリとそう言うグラン・マの声に、セシリアもミスティリーナも何も言えないようだった。

「だから、次の新月の日においで。それまでに占っておいであげるよ」

そう言うとは話そこまでといわんばかりに軽く目をつぶっているグラン・マ。こうなったら、何も教えてもらえないことをセシリアは知っている。彼女はミスティリーナを促すと、静かに部屋から出ていつているのだった。二人が出ていったのを感じたのか、グラン・マはゆっくり目をあけている。

「リア。あんたはあたしがどういう存在か知っても、今と同じにしてくれるんだろうか……」

賑やかに喋りながら出て行った二人。その二人はグラン・マがそのようなことを思っているとは考えもしていなかったのだった。

そして、グラン・マと約束した新月の日。セシリアとミスティリーナは、また彼女の家を訪れているのだった。

「グラン・マ、約束は覚えているんでしょう」

この数日間、セシリア自身も手をこまねいていたわけではない。彼女なりにできる限りのことはやっている。しかし、その成果まるでないことにセシリアは苛ついているようだった。

彼女が捜しているアルデイスが目立つ相手であることは間違いない。その彼女が心配すら感じさせずに姿をけている。そして、セシリアが期待していたジャスティンのもつ情報網、城のおかかえ魔導師も何の手掛かりもつかめていない。つまり、セシリアにとって、はグラン・マという相手が、最後の希望の光でもあるのだった。

「約束は覚えているよ。まあ、その椅子におかけ」

「早く教えてちょうだい。いつもなら役に立つジャスティンの情報

網にも何の反応もないのよ」

グラン・マにそう言っているセシリアの様子は、意気消沈というのが一番相応しいだろう。もっとも、彼女と一緒にいるミスティリーナはそれほど焦った様子はみせていない。それは、彼女がセシリアに雇われているということも原因だろう。そんな対照的ともいえそうな二人の様子をみながら、グラン・マはゆっくりと口を開いている。

「リアにしてみたら、何を勿体ぶってっていう思いがあるんだろうね」

「そうよ。私がどれほど心配しているか、グラン・マもよく知っているでしょう」

できるだけ穏やかな口調で、とは思っていてもそうはできないのだろう。セシリアの声には焦りの色がにじんでいる。そんな彼女をみながら、グラン・マは占いの結果を話しているのだった。

「あんたをがっかりさせる結果しか言えないんだよ。結論から先に言うと『わからない』っていうしかできないね」

「どうしてよ。いつもなら、ちゃんと答えをくれるじゃない!」

思いもしなかった言葉を耳にしたことで、セシリアは思わず大声を出してグラン・マに詰め寄っている。そんな彼女にミスティリーナはポツリと声をかけているのだった。

「リア、落ち着こうよ。おそらく、聖王女という存在が大きすぎて占いきることができないんだと思うから」

「そうなの?」

セシリアよりも占いのことを知っているミスティリーナの言葉。それを聞いたセシリアの表情はかすかに明るくなっている。そして、グラン・マもその言葉に賛同するように大きくうなずいているのだった。

「さすがは火のお嬢さんだね。そのとおりだよ。聖王女という占うにはあまりにも大きな存在が絡んでいるからだよ。道はいろいろと示されている。でも、そのどれもが正解であり不正解。グローリア

の聖王女という要因が入ったとたん、結果は大きく変わってしまう」
グラン・マの言葉は、セシリアが望んでいる明快なものではない。しかし、その言葉は信用できるものだ。彼女は感じている。そうである以上、彼女はいつもと同じようにグラン・マの意見をきくしかないのだった。そんな彼女の様子がわかつているのかいないのか、グラン・マは占いの結果を告げている。

「あちらこちらに痕跡はみえるよ。うん、それは全部、聖王女の白い光だ。でも、その光を消しかねない影も一緒にみえる」

「その影って何なの？」

グラン・マの言葉に興味をもったらしいミステリーナがたずねる声。しかし、それに返事はかえらない。グラン・マは託宣を与えられたかのように言葉を続けている。

「白い光を求める小さな光が幾つもあるね。それがお前さんたちだ」
「えっ、あたしも？」

グラン・マの言葉にビククリしたように目を白黒させているミステリーナ。よもや、自分もとは思っていなかったのだろう。呆然とした顔でグラン・マをみつめている。

「そうだよ、あんたもその中の一人。だからこそ、リアと出会ったんだよ、火のお嬢さん」

「ねえ、その呼び方やめてほしいんだけど。あたしはミステリーナ。知り合いはリーナって呼ぶから」

「そうかい？　じゃあ、そう呼ばせてもらおうよ」

グラン・マのその言葉にミステリーナはやっと安心したような表情を浮かべていた。

「これでスッキリする。火のお嬢さんってあたしには絶対、似合わない呼び名だもの」

そう言つとミステリーナはおかしそうに笑っている。そんな彼女の顔をグラン・マはじっとみつめているのだった。

「リーナ、ババからの忠告を受ける気はあるかい？」

「何なの？」

ミステイリーナはグラン・マが何を言い出すのだろうかと怪訝そうな顔をしている。そんな彼女を安心させるようにゆったりとした口調でグラン・マは話しているのだった。

「あんたが火をつかうのはわかっていて。でも、それ以外はつかえるかい？」

「グラン・マ、どういう意味なの？」

ミステイリーナが返事をする前に、思わずセシリアがそう言っていた。何か不安なことがあるのだろうかというような色がその顔には浮かんでいる。

「こんなことを言うとか心配になるのはわかっている。でも、知っておく必要のあることだよ」

「わかっているわ、グラン・マ。でも、リーナは魔法だけじゃないの。格闘技もできるってギルドからきかされたわ」

「格闘技ができるのかい。それなら、少しは安心できないでもないね」

「グラン・マ、何をどこまで知っているの？ 最初の言い方だと何もわからないって感じだったのに」

グラン・マの言葉にどことなく矛盾を感じたようなセシリア。彼女はグラン・マが何かを隠しているのではと疑っているようだった。もっとも、当のグラン・マはセシリアに軽くあしらわれるような相手ではない。彼女はちょっと肩をすくめながら、セシリアの疑問にこたえていた。

「あたしは全部を知っているわけじゃないんだよ」

「だったら、どうして」

自分の知りたいことは自分の力で獲得しなければいけない、とセシリアは感じたようだった。彼女は、のらりくらりと逃げるグラン・マの言葉尻をつかまえようと必死になっている。

「さっきの言い方だと、リーナが火の魔法しか使えないのが不安みたいだったわ。どうして、そう言うのよ」

「何度も言ってるけど、今回のことはあたしにも全部みえているわ

けじゃない」

先ほどと同じ言葉をグラン・マはセシリアに言っている。

「なんといつても、聖王女という存在は大きすぎるからね。そして、彼女をめぐる影が大きいことも間違いない」

「それは、さつきも聞いたわ」

何度も同じことを聞かされて、セシリアは少々うんざりしている。だからこそ、返事も投げやりなものになっている。しかし、グラン・マはそれを気にすることなく言葉を続けているのだった。

「だからこそ、巡り合う相手を大切におし。最初は関係のない出会いに思えても、決してそんなことはない。リア、あんたを中心にして人々は集まってきているのさ」

自分の態度を気にもせずに淡々と語られるグラン・マの言葉。その意味がわかった時、セシリアはどこか感慨深げな表情を浮かべているのだった。そして、思わず自分と一緒にいるミスティリーナの顔を改めてみてもいる。

「ということは、私がリーナと一緒にいるのも必然というわけね」

「そうだよ。あんたたち二人は見えない糸で繋がっている。その繋がりを無視することはできないよ」

その言葉に今度はミスティリーナが反応したようだった。気の強そうなその目の色が、ますますその度合いを強くしているようにみえる。

「じゃあ、あたしとリアがパーティーを組むことは決まっていたの？ ついこの間まで、お互いのことを知りもしなかったのに？」

信じられないというようなミスティリーナの声。しかし、グラン・マは動じるところがないようだった。

「それが運命の不思議なところさ。聖王女というこの世に二つとない存在を軸にして、あんたたちは繋がったんだよ。これからもそうだよ。その時は、迷ったりしちやいけない」

「まだ仲間が増えるの？」

ミスティリーナの声に、グラン・マはうなずいている。

「あたしが全部みえていないことは間違いない。でも、これは確信をもって言える。もつとも、聖王女をめぐる影がとてつもなく大きいことも間違いないがね」

グラン・マのその言葉にため息をついているセシリア。彼女は言葉の端々から、アルデイスをみつけることが簡単なことではないと改めて感じたのだろう。しかし、それは最初からわかっていたこと。今は、先のことを考えないといけないと思っている。

「じゃあ、これからもしリーナみたいに協力してくれる人がみつかるの？」

「最初は味方のようにみえてなくてもね。あんたを中心に集まるんだよ、リア。辛いこともあるかもしれない。でも、集まった仲間を信じれば、道は必ず拓けるものさ」

セシリアにそう言うのと、話は終わりといわんばかりにグラン・マは軽く目をつぶっている。そんな彼女に、ミステリーナは自分の疑問をぶつけているのだった。

「それはそうと、あたしが火の魔法しか使えないのが不安だって言わなかった？」

自分の魔法には自信をもっているのだろう。グラン・マに対して『どうして、そう言うのか』と言いたげな表情を浮かべている。ミステリーナの声にゆっくりと目をあけたグラン・マ。彼女はミステリーナのそんな挑発的な態度にも顔色一つ変えようとはしていなかった。

「何回も言うけれど、聖王女をめぐる影は尋常じゃなく大きいんだよ。水晶玉を真っ黒にしまうくらいにね。それは、聖王女が聖王女である以上、仕方がない」

「だから、それとこれとがどうやったら結びつくのよ」

なかなか本題に入らないようなグラン・マの言葉に、ミステリーナは苛々しはじめている。

「だから、火の魔法が効かない相手がいるかもしれないだろう」

そんなこともわからないのかい、といわんばかりのグラン・マの

口調。それを耳にした時、ミスティリーナはようやく納得したようだった。先ほどのまでの苛々した表情がずっとその影をひそめている。「言われてみたらそうだね。今まで、考えてもいなかったけど」

ミスティリーナのこの言葉にグラン・マは穏やかな表情でこたえていた。

「無理をすることはないよ。自分が使える属性は自分が一番よくわかるからね」

グラン・マのその言葉にうなずいているミスティリーナ。そして、セシリアは何かがあったようなわからないような不思議そうな顔をしているのだった。

「ウエリオの宿にお戻り。今頃は、あんたたちの帰りを待っている奴がいるはずだからね」

「それは予言なの？ わかったわ。どうやら、これ以上は教えてくれないみたいだし宿に戻るわ。でも、また困ったことができたら来てもいいでしょう」

セシリアのその声にグラン・マは静かにうなずいている。それを見た彼女はミスティリーナを促すと、ウエリオの宿に戻っているのだった。

〔三〕

まっすぐに伸びている少しさびれた街道。そこを旅している二人の人物。一人はその独特のローブ姿から黒魔導師ということが一目でわかる。しかし、その連れの方はどうにも判断に苦しむところがあった。剣を腰につるし、マントを羽織った姿は男といえる。しかし、髪を後ろでひとまとめにしている姿。細いという印象を与える線。それらを見ると女にもみえる。

だが、街道をいく旅人はこの二人の他には誰もいない。やがて、街道沿いにある大きな木をみつけた二人は、そこで休憩を取ることにしたようだった。

「リア、ルディアだったつけ。じゃあ、もう一息かな」

「そうね。ここで馬を休ませて、残りは一気に行きましょうか」

「やつぱり、馬だと楽だね。今まであまり乗ったことないから、どうなるかと思ったけど」

相手のその言葉に、セシリアは笑い出していた。そう、この二人はセシリアとミステイリーナ。グローリアの都にいるはずの二人がこんな田舎道にいるのには理由がある。

新月の日。ウェリオの宿に戻った二人を待っていたのは、どこことなく焦った表情を浮かべたジャスティンだった。そして、彼の知らせを受けてセシリアはルディアに行くことを決めたのだった。

「でも、本当に大丈夫なの？」

木の根元に腰をおろしたミステイリーナは、セシリアにそうたずねている。

「大丈夫よ。それに、やっと手掛かりがつかめるかもなのよ」

「リアがそう言うなら、あたしに反対する権利はないよね」

ポツリとそう言ったミステイリーナは、フツとため息をついているようだった。彼女がそう言ってくれるのは、自分のことを心配しているからだということをセシリアは理解している。その理由とい

うものも歴然としている。なぜなら、女だけで旅をするのは無謀ともいえることだからである。救いはミスティリーナが黒魔導師だと一目でわかる姿であること。そして、セシリアが男装しているということ。この二つのおかげで、奇異の目で見られることはあってもこれといった問題もなくここまで来ているのだった。しかし、彼女たちが目指しているルディアは自由国境と呼ばれる場所である。そこはこの国にも属さない代わりに、何かあっても守ってくれるものがないということである。普段であれば、そんな場所に行くことなど考えもしない。しかし、今回は事情があつたのだ。

ウェリオの宿で二人を待っていたジャスティンは、ルディアで会いたいといってきた人物がいると知らせてきたのだ。その相手の名前をきくなり、苦虫をつぶしたような顔になっているセシリア。しかし、彼女は断るという選択をしなかった。セシリアは承知したということジャスティンに伝えると、ミスティリーナとともにルディアへの道をたどっているのだった。

「それはそうと、会いたがつている相手って？ あたしには教えてくれないんだから」

「ごめんなさい、まだ教えてなかったわね。でも、リーナを仲間外れにするつもりはないのよ」

ちよつとふくれた表情を浮かべているミスティリーナ。その彼女にどう説明すればいいかとセシリアは悩んでいるようだった。しかし、いつまでも黙っているわけにもいかないのだろう。ルディアに着くまでに話さなければいけないとセシリアは思ったようだった。

「リーナはヴェネーレって知ってるでしょ」

「知ってるわ。それがどうかしたの？」

セシリアの口から西の大国の名が出たことに、ミスティリーナは首をかしげていた。彼女はわけがわからないという表情を浮かべて、セシリアの顔をみていた。

「そのヴェネーレのカルロス王子が会いたいつて言ってきたのよ」

「どうして、そんな人がリアに会いたいつて言うの？」

グローリアの貴族令嬢とヴェネーレの王子の関係がわからないミステリーナ。彼女は目を白黒させてセシリアにたずねていた。「ビックリして当たり前よね。私だって、まさかと思ったもの」ため息とともに語られるセシリアのその言葉にミステリーナはコクコクとうなずいている。

「で、カルロス王子はアルデイス様との縁談が進んでいたのよ」「じゃあ、シスコンが言ってたあいってその王子様のこと？」

セシリアの言葉に度肝をぬかれたミステリーナはそう叫んでいる。それに対してセシリアは軽くうなずくだけだった。その時、ミステリーナはアルフリートのことを思い出したのだろう。ますます声のトーンが上がっているようだった。

「じゃあ、リアがその王子様と会ったってまずくない？」「アルフリート様の耳に入ったらね」

セシリアのその言葉にうなずきかけたミステリーナ。しかし、彼女はここがどこかということを思い出したのだろう。その表情が少し明るくなったようだった。

「でも、ここなら都から離れているし大丈夫かな。ジャスティンってお喋りなの？」

「それなら大丈夫。彼だって、アルフリート様のシスコンぶりには呆れているんだし」

「それなら安心ね。でも、何なんだろうね」

ミステリーナの思いはセシリアも同じだったのだろう。それでも、あまりゆつくりできないとも思っている。彼女はそろそろ出発しようというように立ち上がっている。

「お喋りもいいけど、あんまりゆつくりしてると夜になるわ」

「それはイヤよ。今夜はちゃんとした屋根のあるところで休みたいもの」

そう言ったミステリーナは思い出したようにセシリアの顔をマジマジとみている。

「だけど、リアがここまでやれるとは思わなかったわ」

王女の話相手というからには、高位の貴族に連なるはず。それにも関わらずここまでの旅を嫌がらなかったセシリアの様子。それは大したものだと素直に賞賛する声がその口からもれている。

「あら、私の噂はきいているんでしょう。初めて会った時、知っているみたいだし」

「たしかにね。でも、じゃじゃ馬だっていつでもお嬢さんだからね。ここまでタフだとは思わなかっただけ」

そう言っただけで立ち上がったミスティリーナだが、急に何かを思い出したのだろう。セシリアの顔をジッとみている。

「それはそうと、大事なことを忘れていたじゃない！」

「リーナ、どうかしたの？」

急に大声を出したミスティリーナの顔をセシリアはビックリしたようにみている。

「何か忘れていたことあった？」

「そうよ、大事なこと！ ルディアで会ったというけど大丈夫なの？ 相手は王子様なんでしょう。話を立ち聞きされないようにしなきゃ」

まくしたてるように喋るミスティリーナ。そんな彼女の勢いにセシリアはポカンとしてしまっている。やはり、彼女は世間知らずのお嬢様なのだったと思ったミスティリーナは、思わず頭をかかえたようだった。しかし、セシリアはそんなことに気もついていないのだろう。それでも、何かを思い出したような声をだしている。

「あ、リーナ。宿はとっているって連絡あったわ。ルディアって宿らしい宿が一軒しかないらしいから、向こうに行けばわかるって」

「そんな大事なこともっと早くに教えてよね」

やはり、セシリアはお嬢様だとミスティリーナは再認識している。こうなったら、自分が気をつけておかねば、と肝に命じているようだった。

「それなら、少しでも早く到着しないとね」

気になることはまだあるが、それはルディアに到着してからだと

思っているミスティリーナ。二人はそろそろ日も傾こうとしている道をルディアに向けて急いでいるのだった。

一方、セシリアとミスティリーナがたどっていた道とは反対側の街道。ルディアの西の入口近くに、こちらも目立つ二人連れがいるのだった。どちらも青年といった感じだが、まとっている色と表情が正反対である。一人は黒づくめでどこか人をくつたような表情。もう一人は白づくめで神経質そうな表情を浮かべているのだった。

「ウィア、そんな辛気臭い顔するもんじゃない」

「これが私の顔です。気に入らないなら、黙っていてください」

あくまでも慇懃な態度ではあるが、口調はそうではない。彼はただ何か気になるのか、盛大なため息をついていた。

「前々から考えなしの御方だとは存じていましたよ。しかし、ここまでだとは……」

「ウィア、何が言いたい」

このままでは、皮肉の山に埋もれてしまうと思ったのだろう。しかし、ウィアは反論してくる相手を冷ややかにみている。

「そのままですよ。待ち合わせ場所も決めていないのでしょう」

「その心配ならいい。お前の名前で宿はとってあるし、連絡しであるから」

「は？ 私の名前？ 人の名前を勝手に使ったというわけですか」

いかにもうんざりといった表情のウィア。こうなったら、下手にでるしなかいと思ったのだろう。相手はひたすら低姿勢をくずそうとしていない。

「お前に相談しなかったのは悪かったよ。反省しているから勘弁してくれ」

その言葉にも素っ気ない顔をしているウィア。彼はあくまでも冷やかな表情をくずそうとはしていない。

「そうですか。そう思っていらっしゃるのですたら、少しは学習してください。王子の不始末の尻拭いはゴメンですからね」

「う……」

ウイアのその声に相手は一瞬、言葉につまっていた。彼に王子と呼ばれていたのはカルロス。つまり、セシリアをルディアに呼び出した当人でもあるのだった。

「なあ、ウイア。もう、あいつはルディアについているかな」

「村に入ればわかるでしょう。人の名前で宿をおさえた人がいるんですから」

「それは嫌味か」

ウイアの言葉に思わず反抗心が顔を出したのだろう。先ほどまではガラリと態度が変わっていた。

「その言い方はないだろう。宿をおさえておくのは常識じゃないか」

「それはそうです。でも、あまり勝手なこととはしないでくださいよ。もつとも、あまりにも目に余るようなら、即刻、ヴェネーレに強制送還ですから」

「ウイア……人を脅すのもほどにしとけよ！それに、今さら国にもどれるはずないだろう」

「だったら、人の言うことをちゃんと聞いて下さい。もうすぐ日も暮れます。今夜はちゃんとした屋根の下で休みたいですからね」

ウイアにそこまで言われると、カルロスもうなずくしかないのだろう。慥然とした表情のままだが、先ほどよりは落ち着いたようにもみえる。

「わかったよ。大人しくしてればいいんだろう」

ブスツとした表情でそう呟いているカルロス。その彼は自分たちが来た方向とは反対からやってくる影をみついていた。

「ウイア、あつちから来るのは？」

その声にウイアもそちらを向いている。やがて、やってくる影が誰なのかわかったのだろう。その表情は明るいものになっているのだった。

「どうやら到着されたようですね」

彼の言葉にこたえるかのように影は徐々に大きくなっている。そして、それはカルロスとウイアの前でピタリと止まっているのだった。

た。

「お待たせしてしまいしたか」

村の入口で自分たちを待つようにしているのが誰かわかったセシリアは慌てたようにそう言っている。しかし、ウィアは気にするともないようだった。

「気になさることはありません。こちらも来たところですからね」
ウィアのその言葉にセシリアはホッとしたような顔をしている。

そんな彼女の顔をみたカルロスは、サツサと村に入ろうと言わんばかりの顔をしているのだった。

そして、カルロスが手配した宿の一室で顔を合わせている四人。お互いに自己紹介をすませても、その表情はどことなくぎこちないものがある。ミスティリーナにしてみれば、この場にいるので知っているのはセシリア一人なのだから仕方もないだろう。しかし、他の三人も遠慮がちな部分があるようだった。そんな中でもセシリアはカルロスが自分を呼び出した理由を知りたくて仕方がない。だが、どのように話を切り出せばいいのかわかっていない様子だった。そんな彼女の様子にカルロスとウィアも気がついていて。しかし、何も言おうとはしない。そのことから彼女は自分から口火を切らなければいけないと気がついていてのだった。

「カルロス様。どうして、ここに来いとおっしゃいましたか」

「ちよつと、お前にみてもらいたいものがあるんだ」

いかにも思わせぶりな言葉。その様子に、何が言いたいのか、といわんばかりにセシリアの細い眉がひそめられている。

「お前なら、みたらすぐにわかると思うんだ」

「一体、なんだっていうのよ。言いたいことは、はっきり言いなさいよ！」

話をきいているうちに、セシリアよりもミスティリーナの方が苛立ってきたのだろう。もっとも、その思いはセシリア自身にもあったのだろう。何も言わないが彼女の顔に浮かんでいる表情はそのことを雄弁に物語っている。そんな二人の様子をみたカルロスは、ウ

イアに手を伸ばしているのだった。

「ウィア、例のヤツを」

「まったく、何をそんなに勿体ぶるんですか。セシリア殿の気持ち
がわからないはずないでしょう」

ブツブツと言いながら、ウィアはあるものをテーブルの上におい
ている。それをみた瞬間、セシリアは何も言えなくなっていた。

「こ、これは……」

「リア、どうかしたの」

セシリアの様子がおかしいと感じたミスティリーナの声。しかし、
セシリアはそれに応えることができない。彼女の視線はテーブルの
上から離れることができないようだった。

「リア、本当にどうしたっていうのよ」

ミスティリーナの声だけが部屋の中に響いている。カルロスとウ
イアはセシリアが何も言えない理由をおぼろげではあってもわかっ
ている。だからこそ、声をかけようとはしていない。

「カルロス様、これをどこで……」

しぼりだすというのがピッタリのセシリアの声。それはいつもの
彼女のものではない。まるで老婆のような囁れたような声。

「リア、急にどうしたっていうのよ」

セシリアをそこまで変えてしまうものは何なのだろう。ミスティ
リーナには疑問だけがふくらんでいる。そして、彼女はセシリアの
肩越しにテーブルの上をのぞいているのだった。

「す、すごい……これ、本物なの？」

彼女がそう呟いたのも無理はない。そこにあるのは大粒の見事な
真珠。真珠は真球に近いほど価値のあるという。そして、それは真
球にしかみえない上に、キズ一つみつけれないのだ。乳白色の柔
らかい色のそれがどれほどの価値をもつものか。

「本物よ、リーナ。そして、これはアルデイス様のもの」

「えっ？」

ポツリと聞こえてきた声に、ミスティリーナは驚いていた。彼女

がそう言うからには、これがアルデイスの持ち物であることは間違いない。しかし、それならばどうしてこれがここにあるのか、という疑問がミステイリーナの中には浮かんだようだった。そして、それはセシリアにしても同じことである。彼女は思わずウィアに詰め寄っているのだった。

「どうして、あなたがこれを持っていたの？　これはアルデイス様のものよ。それはあなたも知っていることだし、カルロス様もご存知のことだわ」

「もちろん知っているさ。これは、俺がアルデイスに贈ったものだから」

そう返事をしたカルロスもテーブルの上の真珠をじっとみつめて
いるだけ。

金の金具をつけた耳飾り。だが、そうであるならば二個で一对のはずなのに、その場には一個だけ。耳飾りは己の対がないことで心細げに光っているといえるのだった。そして、それをみながらセシリアはカルロスに問いかけている。

「カルロス様はどこでこれを？」

「出入りの商人が持ってきたんだよ」

「何ですって！」

思いもしなかったことを言われて、声を荒げているセシリア。

「キリキリするんじゃない。そいつも、どこかのもぐりから手に入れたんだよ」

「そうなんですか？」

カルロスの言葉に問いただすようになってるセシリア。彼女のそんな様子にカルロスは苦笑を浮かべるしかないようだった。

「そうだよ。そいつにこの真珠を手配させたからな。だから、不思議に思っ
て俺のところ
に持ってきたってわけだ」

カルロスのその言葉にセシリアは何も言うことができない。そんな彼女にウィアが問いかけているのだった。

「では、セシリア殿。失礼を承知でおたずねいたします。アルディ

ス姫はお変わりありませんか」

「そ、それは……」

それは今のセシリアが一番されたくない質問だったろう。だが、隠しきることでもできない。なぜなら、セシリアはアルデイスの話相手であり、守護役でもある。その彼女がアルデイスのそばを離れるはずがないのは当然のこと。つまり、彼女がここにいるという事実がアルデイスに異変があったということを公言しているともいえるのだ。しかし、それを言葉にするのにはためらいがある。そんなセシリアの様子をみたカルロスは、自分から声をかけているのだった。

「お前が自分からは言いにくいのはわかっているよ」

「カルロス様……」

「だから、是か否の返事だけでいい。アルデイスはいないんだな」感情を押し殺したようなカルロスの声。彼にしてもこのことを口にするのが辛いのだろうか。そんなことをセシリアは感じている。そして、彼女ができる返事は一つしかない。

「……はい……」

「……そうか……」

セシリアの返事にそう呟いているカルロス。その彼に今度はセシリアが問いかけているのだった。

「では、今度は私の知りたいことに答えてください」

セシリアのその声に何だろうというような顔をしているカルロス。その彼にセシリアは気になっていることをぶつけている。

「どうして、ここですか？ たしかに人目は気になりませんが、ここは自由国境です」

ルディアという土地の性格を知っているセシリアは、そのことが気になっているようだった。ここは何があってもおかしくない場所。治安がいいとはお世辞にもいえない。そんなところに呼び出した真意が知りたいのだろう。そんなセシリアの視線を感じたウィアはカルロスのかわりにしぶしぶながらこたえているのだった。

「先ほど、王子が言われましたでしょう。出入りの商人が、もぐりからそれを手にいれたと」

「それはきいたわ。でも、それが関係あるの？」

「そいつがこれを手に入れたのがこのあたりだったんですよ」

勿体ぶったところで何も変わらないとわかっているのだろう。ウィアはあっさりと同明かしをしていた。そんな彼の言葉にカルロスが苦虫をつぶしたような顔になっているのだった。

「ウィア、そこまで教える必要はないだろう」

「王子は黙っていなさい。セシリア殿は知る権利があります。それもわからないんですか」

ウィアの言葉にカルロスは何も言い返せない。というより、彼はセシリアの言葉が相当ショックだったのだろう。先ほどまでのセシリアがしていたように、じつと耳飾りをみつめていた。

「じゃあ、そいつはこの近くでそれを手に入れたわけ？ ひょっとしたら、お姫様はこの村にいるわけ？」

「それはないと思うわ。だって、アルデイス様は目立つものに、アルデイス様がいるのなら、陛下に連絡して褒美をもらうか、脅迫するかどちらかでしょうね」

「そうかもね。こんな村にいる連中が考えることだもんね」

自由国境というものをよく知っているミスティリーナの言葉には遠慮というものがない。そして、そのことはウィアも感じているのだろう。彼も彼女の言葉にうなずいている。

「わかります。こんなところにまともな連中がいるはずないですからね。では、そちらの国王陛下には何も？」

「ええ、今回のそちらからのが初めて。もっとも、これはうちの王子には絶対に聞かせられないけど」

「そっちの兄貴が筋金入りのシスコンだっていうのは知っていたがな」

カルロスのその声にセシリアはため息をつきながらこたえている。「あのバカがこのことを知れば、カルロス様を誘拐犯だと言い出し

かねないのは目にみえています」

そう言うセシリアは、どこかやるせなさを感じている。しかし、アルフリートのシスコンというのは有名なものである。カルロスとウィアも顔色一つ変えようとはしていなかった。そうはいつても、この状況で何もしいないわけにはいかないことをセシリアは知っている。彼女はミスティリーナの方をみているのだった。

「リーナ、このあたりで人を隠せるような場所ってある？」

「はつきりとは覚えてないけど……ルディアの北にそんなのがあるって聞いたことがある」

ミスティリーナのその言葉にセシリアも何かを思い出したようだった。

「そつえば、随分と前の砦があつたはずだわ。そうね。そこなら可能かもしれない。もとは砦だから、雨露はしのげるし……」

「それなら、今すぐに行つてみるか？」

セシリアの言葉にカルロスは思わずとびついている。しかし、そんな無謀ともいえる提案は、ウィアによってあっさり却下されていた。

「何を言っているんです。時間を考えてください。今から動くなんてことはバカのことです」

ウィアのその言葉にカルロスは不満そうな顔をしている。しかし、彼の言うことは道理になつてゐる。結局、カルロスはウィアの言葉に従うしかないようだった。

「わかつたよ。お前のいうことをきくよ。そのかわり、明日は朝一番で動くからな」

「わかつていますよ。なんといつても、勝手のわからない土地ですからね」

ウィアのその言葉にミスティリーナもうなずいている。

「そつだよ。動くのは早い方がいいと思うよ。あ、リアはどう思う？ 勝手に決めちゃつてゐるみたいだけど」

セシリアが何も言おうとしないことにミスティリーナは不安を覚

えたのだろう。心配そうに彼女の顔をみている。

「かまわないわよ。私は反対するつもりもないし」

彼女がそう言ったことで明日の予定は決まったといえるのだろう。四人は思い思いに休んで、翌日にそなえているのだった。そんな中、セシリアとミステイリーナは同じ部屋でのんびりと話しているのだった。

「リア、さっきのウィアっていう奴、リンドベルグの一族ね」

「そうだけど、どうかした？」

ミステイリーナの言葉にセシリアは首をかしげながらそう言っている。それにミステイリーナは考え込むような声でこたえていた。

「うん。あの一族って優秀な白魔導師が多いことで有名な一族なのよね。だから、ちよつとビックリしたわけ」

「あいつってそんなスゴイ一族の出身なの。でも、あのとおりの性格だけだね」

それは先ほどのカルロスとのやりとりをみていたミステイリーナにも感じられたことなのだろう。セシリアの言葉に彼女は思わず笑い出していた。

「それもいいんじゃない。白魔導師っていつでも人間だし」

ミステイリーナのその言葉にクスリと笑ったセシリアは枕元の蠟燭を吹き消しているのだった。

そして、翌日――。

四人はスッキリとした顔をつきあわせている。彼らは部屋で簡単な朝食をすませると、夜には帰る、と告げて宿を出ているのだった。その足で四人は念のためとばかりに、村の中の様子をさぐっているといえる。

「お姫様の気配みたいなものを感じる？」

こういうことは白魔導師であるウィアの方が得意だと判断したミステイリーナは、彼にそう問いかけている。それに彼はちよつと考えたような顔をしながらも、すぐに首を横にふっているのだった。

「特には感じませんね」

「ウィアがそういうなら間違いないか。あたしはそういうのは得意じゃないのよ」

「ウィア、本当に何もないのか？」

カルロスの食って掛かるような口調。そんな彼に呆れたような顔をしているウィア。

「私の力を疑っているんですか？」

うんざりしたようなその声。それにセシリアの声がかぶさっている。

「どうやら、ここにアルデイス様はいらっしゃらないのでしょうか。それなら、予定通りに動きましょう」

「そうだね。ここで時間つぶすのも勿体ないし」

「よろしいですよ。ここで拗ねている人は気にしないでくださいね」
自分の隣りでふくれた顔をしているカルロスを横目でみながら、ウィアはそう言っている。

「子供より質の悪い人ですからね。気にせず、出発しましょう」

その言葉にセシリアたちは移動を始めている。村自体は小さいこともあって、すぐに抜けられるのだが、空にかすかに雲が広がるのを見たセシリアは眉をひそめているようだった。

「雨になるのかしら」

「そのようですね。急ぎましょうか」

最初のうちこそ、そんな軽口もたたく余裕もあったろう。しかし、道を進んでいくうちに、そんなところは姿を消している。そうやって、一時間くらい馬を進めた時である。四人の前には、今にも崩れそうな砦が姿をあらわしていた。しかし、どうみても人がいるようにはみえない。

「おい、本当にここなのか？」

そう言ってミステイリーナに詰め寄るカルロス。しかし、彼女はあっさりと切り返している。

「そうよ。でも、絶対って保証がないのはわかっていたでしょう？」
ミステイリーナの思いはウィアにも感じられたのだろう。彼はた

め息をつきながら、カルロスの首根っこをつかまえている。

「アルデイス姫のことが絡むとダメですからね。もうちょっと、そういうところをあちらに見せていれば、ここまで苦労しなかったんじゃないませんか？」

「えっと……それとこれとは、話が違くんじゃない？」

思わずそう呟いているミステイリーナ。そしてセシリアもそんな主従を呆れたような顔でみているのだった。

〔四〕

「中に入ってみましょう」

セシリアの声が響いている。たしかに、廃墟にしかみえないが、中には何か手掛かりがあるかもしれない。そう思つて、四人は中に入っているのだった。

「リア、この分だと誰もいそうにないね」

外見からもそう感じていたが、中に入るとますますその観が強くなったのだらう。ミステリーナはそう呟いている。

「ですね。一時的にいたということは考えられますが、今もというのは無理ですね」

「ええ。ここにまだアルデイス様がいるのなら、見張りが一人もいないということが不自然よね」

セシリアとウィアのそんな言葉にカルロスもうなずいている。しかし、その目は何か手掛かりがないかとあたりを見渡しているのだった。その目に何か光るものがみえたのだらう。思わずそれに飛び付くようにしている。

「どうかしましたか、王子」

カルロスの行動にビックリしたようなウィアの声。だが彼はそれに返事もせず、自分が気になったものを確かめているのだった。

「セシリア、ちょっと来い」

「どうかなさいましたか」

エラそうな態度で自分を呼び付けるカルロスの行動にセシリアはムツとしている。しかし、彼の口調の真摯な様子に気がついたのだらう。彼女はカルロスのそばに近寄っているのだった。

「カルロス様……」

彼がみつけたものを見たセシリアは声を出すことができなくなっていた。なぜならそれは、アルデイスの耳飾りに間違いないのだ。つまり、カルロスが持っていたものとの対になるもの。ということ

は、ここにアルデイスがいたのだろう、という思いでセシリアはあたりを慌ただしげにながめている。

「これがあつたつてことは、アルデイスがここにいたのは間違いないな」

カルロスがポツリと呟く声。しかし、ミスティリーナはその言葉を聞き逃してはいないようだった。

「でも、この感じじゃ誰もいないでしょう」

「それくらいわかっている」

カルロスの声は苛々したような響きも含んでいる。その彼をなだめるような口調でウィアは意見しているのだった。

「でしたら、別の方法を考えませんか。ここに姫君がおられたのは間違いないでしょう」

「そうよ。これがあつたのが証拠だわ。でも、ここにはいらっしやらない」

セシリアの焦ったような声が壁にあたりエコーが返ってきている。そんな彼女をなだめるようなウィアの声が響いている。

「では、一度もどりませんか。宿で考えた方がいいでしょう」

ウィアのその言葉に反対する者がいるはずもない。これ以上ここにいることは無駄だと誰もが感じていたのだ。そして、ルディアに戻ろうとした時、ウィアの顔色がことなく悪いことにカルロスは気がついていた。

「ウィア、どうしたんだ」

「別に、何でもありません」

彼の問いかけに、いつもと同じ調子でこたえているウィア。しかし、それが空威張りなのはカルロスにはわかっている。彼はそばにいるセシリアたちを気にしながらもウィアに耳打ちしているのだ。た。

「意地をはるのはよせ。お前の性格ぐらいわかっているんだからな」
「王子にはかありませんね」

カルロスの言葉に苦笑を浮かべているウィア。だが、これが黙っ

ているわけにはいかないことだということも彼にはわかっていた。
だった。

「気がつきませんか。何だか、重苦しい気配がしているような気がして仕方がないんですよ」

「そうか？ 俺はそういう風には思わないぞ」

そう言いながらカルロスは首をかしげている。そんな彼をみながら、ウィアは言葉を続けていた。

「でも、私の予感が外れたことがないのはご存知でしょう」

「そりゃ、わかってるさ。ということは、何かがありそうなのかな？」

「はつきり言えればいいんですが、まだそこまでの確証がないというのが本音ですね」

そう言いながら、ウィアはミスティリーナから目を離そうとはしていない。彼は自分が感じていることを彼女も感じているのではないかと期待している。そして、それは間違いではないのだろう。ミスティリーナがふいに彼に問いかけているのだった。

「何か変な感じがしない？」

「どうかしましたか」

平然という言葉がピツタリ表情でウィアはそうこたえている。彼のそんな様子に、何かを隠していると思ったミスティリーナは眉をひそめているのだった。

「ウィア、何か気がついてるのね。あんたは白魔導師だもん。あたしが見落としているようなほんの些細なことでもみえているんじゃない？」

その言葉に苦笑いをしたウィアは、隠しておくことはないと言わばかりに話し始めていた。

「気がついてくれてよかったですよ。このまま、気がつかないんじゃないかと不安になりかかっていましたから」

「っていうことは、何かがあるの？」

「あの空の色をみたら、嫌な予感しかしませんね」

そう言って、ウエアが指差す先をみたミスティリーナは言葉を失っている。そこには、墨を流したように真っ黒な雲が広がるようにしているのだった。

「リア、気をつけて。何かがおきそうだから」

ミスティリーナの警告するような声。それを聞いたセシリアは何があってもいいように身構えている。そんな中、急に視界をさえぎる真っ白な霧が広がり始めているのだった。

「どうしたの、この霧は！」

突然のことに驚くセシリア。そして、ウエアの声も緊迫している。「気をつけてください。この霧に宿っている気配がわかりませんか」その声にハツとしたようになるミスティリーナ。何かを探るかのようにその目は閉じられている。そうしている間にも霧はますます濃くなり、あたりは乳白色に閉じ込められている。

「ウエア、一体どうなっているんだ」

「騒がないでください。この霧は会いたくないものたちの気配しか宿していませんからね。リーナ、わかりますか」

「あんたの言いたいことはなんとなくわかる。嫌なやつらの気配だけじゃない。でも、ここなら遠慮なしに魔法が使えるからマシかな？」

「ですね。でも、私に期待はしないでくださいよ。私は白魔導師ですが聖職者ではないですよ」

二人の声から何が来るのか予測のついたカルロスは、真剣な表情になっている。

「ウエア、アンデッドか？ それなら、お前の魔法でもしんどいだろうな」

「そうはつきり言わないでください。しかし、今は黒魔導師がいますからね」

「わかってるわよ、思いつきりやってやろうじゃない。そのかわり、ウエアには援護を頼むからね」

「それは当然でしょう。こっちだって、死にたくないですからね。」

とにかく、用心することです」

ウィアのその言葉が合図になったかのように、霧は徐々にその姿を消している。

そして、中から姿をあらわしたものをみた時、一同は声をなくしているのだった。

「あれは……デュラハン？」

セシリアの絶望的な声が響いている。それも当然のことだろう。彼らの前にあらわれたのは、馬にまたがった騎士のすがた。ただ、その胴体についているはずの頭は腕に抱えられている。

アンデッドの中でも上級と認識されるそれは、見るものに恐怖しか与えない。そのデュラハンが率いるのはスケルトンと呼ばれる骸骨の兵士と屍体に仮初の命を宿らせたグール。ここにこのようなアンデッドの一団があらわれた理由は謎である。しかし、このままでは殺されるだけというのも明白な事実だった。

「まったく、よくもここまで揃ったことだな」

挑発的ともとれるカルロスの口調。それにデュラハンは動じる様子もみせてはいない。

「これは我なりの歓迎だからな。本来であれば、ここまではせぬ。しかし、盟主様より直々のお言葉をいただいたからな」

「盟主つて誰なの」

恐怖を隠したようなセシリアの声。しかし、デュラハンは気にもしていない。

「今、知る必要はない。お前たちはここで仲間となるのだから」

「お断りね。誰がアンデッドなんかになるものですか」

そう言い切るなり、ミスティーナは一気に魔法を発動させようとしている。

「偉大なる焰よ。すべてを清める力あるものよ。我に仇なす不浄のものを焼き払いたまえ。フレイム・ボム！」

彼女の声に呼応してあらわれる多数の火の玉。それらはアンデッドの集団を焼き払おうとしている。だが、数が多いためにその威力

は減少している。そのことに思わず舌打ちいた彼女はセシリアとカルロスの剣に目をやっていた。

「二人とも、早く剣を出して！」

ミスティリーナがやるうとしていることがわからない二人。だが、彼女の気迫には逆らうことができないようでもある。

「我は望み、我は願う。灼熱の炎で鍛えられしもの。それに宿り、力を見せよ。エンチャント！」

「何をしたの、リーナ」

思わず問いかけるセシリア。そんな彼女に振り向きざまに返事をするミスティリーナ。

「あんたたちの剣に炎を宿らせたから。下級の連中なら大丈夫。あたしはあのデュラハンを何とかする！」

そう言うなり、再び魔法詠唱のために意識を集中しているミスティリーナ。そして、彼女の言葉に力をえたセシリアとカルロスは、アンデッドの中に飛び込むとしていた。

「セシリア、グールは俺が相手をしてやるよ」

彼女のことを気遣うような声。それを耳にしたセシリアは、信じられないというような表情を浮かべていた。

「そんな顔をするな。とにかく、この場を切り抜けないと」

「そうですね。たしかに、グールの相手はしたくないですね」

そんな二人の姿をみながら、ウィアも魔法を唱えている。

「癒しの風。柔らかなそれは人を安らがせるもの。穏やかなそれは力を与えるもの。すべての人に癒しを。ホーリー・ウインド」

彼の詠唱が終わるなり、温かな光が全員の体を包んでいる。

「遠慮なくどうぞ。体力回復の魔法をかけています」

「わかった」

ウィアの言葉にうなずいたカルロス。彼はセシリアと顔をみあわせると、互いに息を合わせて切り込んでいく。そんな二人の剣先が触れる度に炎をまとうアンデッド。そして、ミスティリーナは新たな魔法を発動させようとしている。

「すべてを浄化する偉大なる炎。今こそ、その力みせる時。わが望み叶えるため、その姿みせたまえ。浄化の炎、形をみせよ。すべてを燃やし、新たなものを作り出せ。フレイム・ランス」

詠唱が終わると同時に姿をみせる炎の槍。その狙いをデュラハンにつけた彼女はためらうこと無く攻撃に転じている。

地面を揺るがすような轟音。巻き上がる白煙。それらはミスティリーナの魔法が威力を発揮したといえるもの。いかに上級とはいえ、アンデッドであるからには炎は最大の弱点といえる。この一撃がデュラハンに与えるダメージはかなりのものであるはずだった。

「……どうなの……」

自分の魔法の力は信用している。しかし、結果をみるまでは油断できない。そう思っているミスティリーナの声には、期待と不安が混じりあっていた。やがて、煙は消え視界が再び戻ってきている。

「う、うそ……」

自分たちの前に広がる光景を目にしたセシリアはそう呟くしかできない。たしかに、目の前にアンデッドはほとんどいない。しかし、圧倒的な存在感を与えるものがある。

「人間もバカにしたものではありませんね。そちらのお嬢さんの力をみくびっていましたよ」

黒い塊のようなものから聞こえてくる低い声。それは、先ほどまで馬上にいたデュラハンのものに間違いない。馬はミスティリーナの魔法で消滅したのだが、自分だけは助かっているのだった。

そのデュラハンの声を聞いたとたん、ミスティリーナは連続で攻撃魔法を使ったことと、セシリアとカルロスの剣に炎を付加したことでの疲労を一気に感じたようだった。相手を睨みつけることはできても、ほとんど立ってられない状態になっている。

「盟主様は仲間にといいことでした。しかし、それでは私の気持ちがおさまりません。その魂もなにもかもきれいに消してあげましょう」

そう言うなり、ニヤリと笑っているデュラハン。腕にかかえられ

ている首が楽しげに喋るその姿は恐怖しか感じられない。セシリアたちの方にゆつくりと進んできているデュラハン。その動きに合わせるかのように、彼らはジリッジリッと後ろに下がっている。

「さあ、誰からにしましょうか。いえ、やはりこは、私にこれだけの屈辱を与えてくれたそちらの方からでしょうね」

デュラハンの視線は真っ直ぐミステリーナに向けられている。

「最大の敬意をもって、殺してさしあげますよ」

腕にかかえられた首は舌なめずりをしながら、楽しそうにそう言っている。

「一撃でというような勿体ないことはしませんよ。私に逆らい、屈辱を与えたことを後悔させてあげますとも。それぞれに力は十分にありそうですからね。心ゆくまで楽しませてもらいますよ」

先ほどのぶつかりあい、ミステリーナたちの力を把握したらしいデュラハンは楽しげにそう言っている。そして、肩で息をしているミステリーナの姿を満足そうな顔でみているのだった。

「もっとも、そちらのお嬢さんはボロボロのようですがね。でも、他の方はどうでしょうか？ 私は楽しいのが好きなんですよ。それと、人間が苦しむ姿をみるのがね」

そう言うなり、腰の大剣を引き抜いているデュラハン。それを受け止めようとするカルロス表情が歪んでいる。

「そう、その顔ですよ。それが見たかったですよ。人間なんて、我々からみれば虫けらにすぎない。いや、虫けら以下ですからね。もっとも、あなたたちはそれに気がついていませんがね」

勝ち誇ったような声と表情。そして、そのデュラハンの剣が振り下ろされようとした瞬間、新たな声がその場に響いているのだった。

「そのあたりにしておけ、ハインツ」

その声を聞いたとたん、デュラハンの表情が強張っている。あたりを不安にかられたようにキョロキョロみている彼の前に、銀髪的美青年としか表現しようのない相手が姿をあらわしていた。その姿に思わずみとれているセシリアたち。しかし、デュラハンの方はそ

うではない。彼は相手の姿をみたたん、この場から姿を消そうとしている。それを面白そうな表情でみている青年。

「ハインツ、そんなに慌てなくてもいいだろう。それとも、言いつけを守らなかったことを後悔しているのかい？」

その声は姿に相應しい涼やかなもの。しかし、それがまた恐怖を誘うともいわんばかりの表情を浮かべているデュラハン。

「あなた様がこちらにおみえになるとは思ってもおりませんでしたので……」

「そうだね。来るつもりなんてなかったんだよ。でも、あれは止めなきゃいけないだろう」

「し、しかし……」

青年の言葉に反論しているデュラハン。そんなデュラハンを青年は冷ややかな顔でみている。

「こいつらは殺すなど言われていたんだろう」

そう言つて、彼はセシリアたちの方をみている。

「あんたつて何者よ！」

ミステイリーナの叫び声が響いている。彼が出てこなければ、自分たちの命はなかっただろう。だが、そうだからといって彼が味方であるとは到底思えない。

「ずいぶんと元気なお嬢さんだ。さっきまで肩で息をしていたのにね」

「黙りなさい。きいているのはこっちよ！」

ミステイリーナのその声に反応したハインツを視線だけで止めている青年。

「ハインツ、大人しくしておおき。まだ、消滅したくはないだろう？」

「……」

彼の言葉に黙りこくったデュラハン。この青年はセシリアたちを助けるつもりか、そうではないのか。彼の態度をみているとどちらともとれる。

彼が姿をあらわした時の様子。デュラハンの態度の豹変。それらは彼がセシリアたちの味方ではないことの証明だろう。しかし、それだけではないような印象もないことはない。

「もう一度きくわ。あなたは何者なの？」

セシリアの声に相手はちよつと肩をすくめている。そして、仕方がないというように口を開いていた。

「僕はシュルツ。そのデュラハンは知り合いでハインツという。あのとおり血の気の多いヤツだから、失礼なところもあつたかもしれないけどね」

「つまり、貴様もアンデッドの仲間か」

カルロスの声に、シュルツと名乗った青年は思いつきり嫌そうな顔をしている。

「アンデッドと僕を一緒にしないでくれたまえ。僕はカイザー・ヴァンパイアだよ。下級なやつらと同列にしないでほしいね」

そう言つて、カルロスに詰め寄るシュルツ。その気迫はどこか凄みを感じさせる。それに押されるように後ずさるカルロス。しかし、シュルツはその彼を追い詰めることをしない。それを不思議そうな顔でみているデュラハン。

「どうして、その無礼者をそのままにしておかれるのですか」

「この坊やたちには頑張ってもらわないといけない用事ができたんだよ」

シュルツの言葉にわけがわからないという顔をしているデュラハン。その彼のみならずセシリアたちまでもが驚くようなことをシュルツは口にしていた。

「ハインツ、聖王女はあの子のところに到着していない。彼女は我々が手をだせる状態ではなくなつたんだよ」

その言葉はその場にいた誰にも衝撃を与えている。

「あ、あなたたちが！」

あまりのことに、セシリアは唇をキツと噛み締めシュルツたちを睨んでいる。

「シュルツ様、どういうわけですか」

すっかり混乱した様子のデュラハンの声。

シュルツの言葉の端々から、彼がアルデイスの行方の鍵を握っているのは間違いない。しかし、そのことを聞き出せる可能性は限り無く低いとセシリアは感じているようだった。そんな彼女の思いがわかるのか、シュルツは極上ともいえる笑顔を浮かべて話しているのだった。

「もう一度いうけれども、聖王女は我々が手を出せる状態ではなくなっただよ」

「そのようなことをこいつらの前でおっしゃる意図がわかりません」なぜ、人間の前でこのような重要ともいえることを話すのだという表情をデュラハンは浮かべている。それをまるで気にもしないように話し続けているシュルツ。

「彼女は自分を封じたんだよ。そうになると、我々では手が出せない」しかし、盟主様やその兄君でもあられる貴方様でしたら……」

デュラハンの言葉にシュルツはとりつくしまもない、という表情でいる。

「保証はないね。それに、僕はそんなことをするのが役目じゃないんだ。わかつているだろう」

「それはそうですが……」

「役目って何なのよ」

まるで話の内容がわからないことに苛ついたミスティーナがそう言っている。

「知る必要はないよ。まあ、次に会った時にでも教えてあげようかな」

「俺は会いたくはないんだがな」

不機嫌きわまりない顔と声のカルロス。そんな彼をシュルツは冷やかかともいえる表情でみている。

「強がりはいいけど、僕がこなかったら間違いなく死んでいたんだよ。命の恩人に対する言葉とは思えないね」

「たしかにそうでしょう。しかし、我々にはあなたという人がわかりませんから」

シュルツの表情に張り合うようなウィアの冷えきった声。それに対して何か言いたげな様子のデウラハン。しかし、シュルツがそれを押さえつけている。

「ハインツ、これ以上の醜態をさらす前に戻れ。もつとも、ジェリータがどう言うかはわからないけどね」

そう言いながら浮かべているのは微笑であるはずなのに、どこか背筋の寒くなるものも感じられる。しかし、シュルツの言葉にデウラハンが逆らえるはずがなかった。彼は最後にセシリアたちをねめつけるとその場から姿を消している。それを止めることはセシリアたちにできるはずがない。

「邪魔者はいなくなっただね。少しは詳しい話ができるかな？」

デウラハンが姿を消したことで彼自身も気持ち切り替わったのだろう。シュルツの声の調子は先ほどとは違ったものがある。しかし、それを信用してもいいのかわからない。そんな中、ミステイリーナはセシリアの顔をじっとみていた。この場の決定権はセシリアにあると感じていたのだろう。それにはグラン・マが告げた予言のせいもあるのだろう。彼女は敵のようにみえても味方になる者があるとはつきりと告げたのだ。そして、そのことを知らないカルロスだが、ここで自分が何かをいえる立場でないことを感じている。そんな彼の様子にウィアはわざと大袈裟な安堵の息をもらしている。

「お前、そこまであからさまにするか」

「いえ、王子に理性があつたことを感謝しているんです」

ちよつと離れた場所ではそばそと話している主従の姿。それにシュルツは目もくれようとはしていない。

「君たちが知りたいことはわかつていいるさ。聖王女の行方だろう」
セシリアたちの胸の内をみすかしたような言葉。そして彼はこの場がどこかの屋敷でもあるかのような顔で話し続けている。

「でも、それは教えてあげたいけど、教えられない」

「あなたは私たちの敵なの？ それとも味方なの？ 本当にアルデイス様の行方を知っているの？」

自分たちをからかっているようなシュルツの言葉にセシリアは苛ついている。そんな彼女の様子をどこか面白そうにみているシュルツ。

「見方次第だよ。僕は君たちにとっては敵かもしれない。しかし、別の見方では協力者になれる。聖王女の行方に関しては……」

シュルツはそこまで言うと思わせぶりに言葉を切っていた。それに我慢ができなくなったカルロスがかみついていく。

「アルデイスの行方を知っているんだらう。それに、盟主とやらは何者だ。貴様の妹とかいつていたな」

彼の勢いはウィアが押さえられるものではない。何があっても自分の知りたいことを知ろうとしているカルロス。それを知っているのがヴァンパイアと呼ばれる存在であっても関係ない。カルロスのそんな力強い意思のある表情にシュルツは感嘆の声をあげていくのだった。

「僕のことをわかっていて、そこまで強引にたずねるのかい。ある意味、立派としかいえないね」

「王子、言葉には気をつけてください。相手はヴァンパイアです」
ウィアのそんな声も彼の耳には入っていない。

「答えるつもりはないのか」

「本当に感服するよ。人間の分際で我々になうはずがないことはわかってるだろうに」

先ほどまでの表情とは違う、見下ろすような顔。それにカルロスは気がついていないようだった。

「教えるつもりはないのか」

「そんなことは言っていない」

どこか楽しんでいるようなシュルツの声。それがカルロスの怒りを一層あおっている。彼はウィアの制止もふりきって、シュルツに

詰め寄っていた。

「お前は何なんだ。アンデッドどもの仲間なのは間違いないだろう。でも、それだけじゃないな」

カルロスの言葉にシュルツは肩をすくめている。その仕草は彼を小馬鹿にしているようにもみえる。

「たしかに、こっちは何も知らないだろう。でも、それはそっちが何も教えないからだろう」

「君もおかしなことを言うね。何でも教えてもらえると本気で思っているのかい？」

カルロスをからかって楽しんでいるようなシュルツ。これ以上、カルロスに相手をさせておくとか何を言うかわからないとワイアは焦り始めていた。こうなったら最終手段とばかりに、彼はカルロスの耳にボソツと一言呟いている。

「王子、そのあたりにしておきなさい。ここで揉め事をおこしたら強制送還ですよ」

「ワイア……お前、人を脅すのか」

「見苦しいことをしてほしくないからです。後はセシリア殿にお任せしなさい」

そう言うなり、ワイアは抵抗するカルロスの首根っこをつかまえている。そんな二人のやり取りをみていたシュルツは面白がっているような表情を浮かべていた。

「人間というものはみていて飽きないね。だからこそ、可能性もあるんだがね」

カルロスをからかっていた時とはまるで違う口調。そのままの口調で、彼は言葉を続けていた。

「その元気なお兄さんに免じて、教えられることは教えてあげるよ」

「本当なの？」

急に態度が変わったことに驚きを隠せないセシリア。彼女と一緒にいたミスティリーナも同じような表情を浮かべている。

「疑い深いね。まあ、その方が安全だけだね」

軽いため息をついているシュルツ。

「ハインツに命を下した盟主。それが僕の妹であるのは間違いない」

「じゃあ、あんたはあたしたちの敵じゃない」

ミステイリーナのそんな言葉を否定するかのようにシュルツは軽く首をふっている。

「信じられないかもしれない。でも、僕は君たちの敵じゃない」

シュルツのその言葉にミステイリーナは不思議そうな顔をしている。

「信じられない。だって、あんたはヴァンパイアなんでしょう」

ミステイリーナの声にシュルツはあっさりとうなずいている。自分が公言していることを否定するのが無駄だということを彼自身が知っている。

「僕はヴァンパイアだ。でも、君たちに危害を加えるつもりはない」

「それって今だけでしよう。さっきもデュラハンに言ってたじゃない。一体、あたしたちに何をさせようというのよ」

シュルツの手の上で踊らされた方が情報が手に入ると判断したミステイリーナ。だからこそ、彼が何を考えているのか知ろうとするように問いかけている。

「聞いていないようで、聞いていたんだね。そうだよ、君たちに頑張ってもらわないといけない」

そう言ったシュルツはセシリアの顔をじっとみている。

「あの子はどうしても聖王女が欲しいんだよ」

「あの子って？」

シュルツのいつているのが『盟主』という存在だろうことはわかっている。それでも、セシリアは確かめずにはいられない。そんな彼女を正面からみたシュルツは淡々と語り続けている。

「君は気がついてるんだろう。ハインツがいつていた盟主だよ。」

あの子は聖王女を手に入れようと懸命になっていた。だから、彼女が無防備になったあの瞬間を見逃さなかったんだ」

「あの瞬間？」

それは、アルデイスがアルフリートにそそのかされて隠れていた時だろうか。そんな不安がセシリアの内にはある。そして、それを裏付けるようなシュルツの声。

「いつもの彼女は大切に守られていた。それでも、あの子は聖王女がその加護から離れる時があるかもしれないと思っていたんだ。そして、その時はきた」

シュルツの言葉をセシリアたちは息をするのも忘れたように聞き入っていた。その場を支配しているのはシュルツ。彼の声だけが静かに響いている。

「聖王女が無防備になったことを知ったあの子は、彼女を手に入れようとしたんだ。そして、それは半分成功した。そうだね。聖王女はグローリアの王城にはいない」

セシリアの顔をみて、そう言い切るシュルツ。それに彼女はうなずくことしかできない。それでも疑問は残っているのか、彼女はそれをシュルツにぶつけていた。

「でも、どうしてそんなことを知っていたの」

「聖王女の世話役に盟主の息のかかった者がいたんだよ」

「まさか……アルデイス様の世話役は、身元も何もきちんとした者ばかりよ！」

思いもしなかったことを聞いたセシリアの叫び声。それを無視するかのように、シュルツは自分の知っていることを話している。

「嘘じゃないさ。なにより、聖王女はいなくなっているんだろ。それが何よりの証明さ。とにかく、時間もないから手早くすませようか。聖王女を移動させる時に立ち寄ったのがあそこの遺跡。そこで予定外のことがおこったんだよ」

そう言いながらシュルツはセシリアたちが出てきた廃墟を指差している。

「彼女は自分の身を守るために、己を聖水晶の中に封じ込めた。そして、アンデッドはそれに手をだすことはできない」

「つまり、あんたは自分たちではどうともできないことをあたしたちにさせようというわけね」

シュルツの話から大体の事情を察したミスティリーナがそう言っている。それに対して、シュルツは笑っているだけである。それは、彼自身の思惑は別のところにあると知っているかのようである。

「気になるなら調べてごらん。もっとも、君たちがどこまで調べられるかはわからないけどね」

そう言うなり、その場から姿を消しているシュルツ。後に残されたセシリアたちは、謎がまた増えたことに困惑の表情を隠すことができなかった。

〔五〕

「リア、これからどうする？」

シュルツの告げた言葉はセシリアにとって衝撃的すぎたのだろう。彼女はミステイリーナに返事をする事ができない。そんな彼女の様子をみたミステイリーナはあたりの様子を確かめているのだった。先ほどまで墨を流したように真っ黒だった空は、本来の明るさを取り戻している。どうやら、日が暮れるまでにはまだ時間があるようだった。これなら、もう少しここにおいても大丈夫だろうと思った彼女はカルロスとウイアに声をかけていた。

「リアがちょっと動けそうにないの。もうちょっと、ここにもいい？」

「かまいませんよ。こつちも動くことのできない人がいますから」
ウイアの言葉にミステイリーナはビククリしたような顔をしている。思わず彼の方を見ると、カルロスがセシリアと同じように呆然としてしまっていた。ミステイリーナにしてみれば、セシリアがそうなるのはわかる。しかし、カルロスまでがそうなるのはどうしてもだろうという思いを彼女は抱いているのだった。

「ウイア、ちょっときいてもいい？」

気になることは解決しないといけないというミステイリーナの様子。しかし、彼女が何をききたいのかウイアには見当もつかない。それでも、カルロスの今の状態ならばここに足止めだと判断したウイアはミステイリーナの顔をジッとみているのだった。

「なんででしょうか」

「気になったのよね。そつちの王子様、ここのお姫様のことをどう思っていたんだろうって」

そう言いながら、ミステイリーナはカルロスの様子をじっとみつめている。ひよっとしたら、彼はアルデイスのことを好きなのだろうかという考えがフツと彼女の中に芽生えたのだった。

「ひょつとして、お姫様のこと本気で好きなわけ？」

ミステイリーナの問いかけに、ウィアはビツクリしたような顔をしている。そんな彼の様子をみながら、彼女は話し続けていた。

「リアからきいたのよ。その王子様との結婚話があるって。それって、あたしからみたら政略結婚にしかみえないわけ。でも、さつきからみてたらそれだけじゃないような気がしたのよ」

「知っていましたか。そうです。わが国からグローリアに申し込みはしています」

「でも、難しいでしょ。あたしも会ったけど、あのシスコンぶりって尋常じゃないもの」

ミステイリーナのその言葉にウィアは思わず笑い出している。

「彼に会ったんですね」

その問いかけにミステイリーナは肩をすくめながらうなずいている。

「カルロス様もいい勝負ですよ」

そう言いながらカルロスの様子を横目でみたウィアは、ため息をつきながら言葉を続けていた。

「誰があんな形でアンデッドやヴァンパイアにかみつくんです」

その言葉に思わず納得した顔をしているミステイリーナ。

「たしかに普通じゃないわよね。自分が邪を祓える聖職者でも、あんな風にはつかからないわね」

「あの馬鹿はアルデイス姫のことが絡むと、見境がなくなるんですよ」

自分の仕える王子を馬鹿扱いしているウィア。そんな彼の様子をミステイリーナはポカンとした顔でみているだけ。

「今回だって、私に内緒で動き始めたんです。あの真珠はご自分からの贈り物だったので、すっかりのぼせてしまったんです」

「そうなんだ……苦労してるんだ」

彼の言葉から、カルロスに振り回されている日々であることを感じたミステイリーナ。思わず同情するような声がもれている。

「でも、これだけは知っておいてほしいのですが……」

一気にそこまで喋ったウィアがフツと言葉を切っている。それにミステイリーナは首をかしげているが、ウィアはそれを気にしないかのように喋り続けている。

「たしかに、馬鹿なところもありますが、本気だったことを」

ウィアのその言葉に、ミステイリーナはついに大声を出していた。「ほ、本気って…… ホントにお姫様のことが好きなんだ!」

そう言うなり、ミステイリーナは鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしている。そんな彼女にウィアは言葉を続けていた。

「どこで知り合ったのかはわからないですがね。とにかく、あの馬鹿がアルデイス姫にとことん惚れ込んでいるのは間違いないんです。今回の暴走だって、そうですからね。聖王女のこと絡んだら、後先みえないんですよ。本当に困った人です」

そう言うなり、ウィアは大きくため息をついているそこに別の声も聞こえてくる。

「俺がアルデイスを好きなのがおかしいのか？ 俺はあいつを守りたい。あいつの笑顔がみたい。それが、そんなにおかしいことなのか？」

「一人の男性としては、おかしいことではありませんね」 ウィアのその言葉にカルロスは思わずかみついていた。

「だったら、もうちょっと言い様があるんじゃないのか」

カルロスの声にウィアは肩をすくめている。それをみたカルロスはますますいきりたっていた。

「こっちは筋を通してはいるはずだ。向こうが返事をよこさないんだろっ」

カルロスの言葉にウィアは大袈裟にため息をついている。この主従の間では、何度もこの種の会話がなされているのだとミステイリーナは感じていた。ほっておいたら、いつまでも話し続けるのは目に見えている。この話はそろそろ打ち切った方がいいだろうとミステイリーナは思っているのだった。

「そろそろ、宿に戻らない？　ここで話しても何の解決にもならないでしょう」

「そうですね。アンデッドたちと一戦交えた場所に長居はしたくありませんね」

ウィアの言葉にミスティリーナも同意するようにうなずいている。
「リア。そろそろ宿に戻ろうって」

ミスティリーナのその言葉に、セシリアはハツとしたような顔をしている。

「そ、そうね。いつまでも、ここにはいられないわね。心配かけて、ごめんなさい」

「気にしないでいいから。やっぱり、あんたにはショックだったろうしさ」

ミスティリーナのその言葉にセシリアはうなずいている。

「とにかく戻りましょうか。あまり遅くなると何があるかわからないし……」

「そう。その方がいいって。相談しなきゃいけないこともあるだろうし、宿に戻ろうよ。ウィアも言ってるけど、ここにはあまり長居したくないのよね」

ミスティリーナのその言葉にうなずいたセシリア。彼女とて、アンデッドと一戦を交えた場所に長居することが危険なことは承知している。自分さえシユルツの言葉にショックを受けていなければ、もっと早くにそうしていたはずなのだ。そのことにミスティリーナがふれないのは、自分に対する気遣いだとセシリアはわかっている。それならば、それに報いるためにも一刻も早い移動が望ましいといえるのだっだろう。

宿に戻った四人は簡単な夕食を取りながら、これからのことを相談している。様々な事実がわかったため、これは必要不可欠なことだったのだ。ウィアは部屋の結界をはり直し、ミスティリーナは燭台に火をいれている。ゆらゆらと揺れる蠟燭の光に照らされた四人の顔。お互いに言いたいことはあるのだろうが、なかなか口を開く

ことができない。ただ、ジツと炎をみつめた状態で座っている。しかし、それでは何も始まらないということとは誰もがわかっている。

ついにウィアがため息をつきながら、重い口を開いているのだった。「私の一族が白魔法を生業にしているのはご存知ですよね」

彼の言葉にその場の誰もがうなずいている。それをみたウィアは、言葉を選ぶようにゆつくりと話しているのだった。

「カイザー・ヴァンパイアというのは、きいたことがあります。もう存在しないと思われる種族です。アンデッドの中でも最上位に位置し、その能力の高さは敵う者がいないと……」

ウィアの声にセシリアたちは何も言えないようだった。デュラハンが彼をみるなり態度を変えたあたりから、なんとなく感じていたこと。しかし、それを口にすることで真実にしたくなかったともいえる。だが、ウィアの言葉はそれが事実だと思い知らされるものでもある。そして、セシリアたちのそんな思いをわかつていても、彼はこれだけは言わないといけないと思っているのだった。

「カイザー・ヴァンパイアですが、もっと重要な問題があります」「それって、聖水晶のこと？」

そう問いかけるミスティリーナに彼はかすかにうなずいている。

「そうです。うちの一族には少しですが、聖水晶のことを記したものがあ

るんです」「さすがはリンドベルグの一族ね。で、それがどうかしたわけ？」

ウィアが何を言いたいのかわからないミスティリーナはそう言っている。その彼女の顔をみながら彼は思いきって自分の知っていることを口に出しているのだった。

「聖水晶とはある種の結界だと思ってください。しかし、これは最悪の形でもあります」

「結界？　でも、アルデイス様はそんなことはできないわ」

セシリアの声にミスティリーナはうなずいている。そして二人だけでなく、カルロスもおかしな顔でウィアの顔をみている。それぞ

れのそんな反応をみながら、ウィアは言葉を続けていた。

「アルデイス姫は聖王女と呼ばれていましたよね。それは姫君がある種の力を持つていることを意味しています。たしか、大神殿からも迎え入れたいという申し入れがあったはずですよ。それは、姫君のその能力のせいでもあります」

「つまり、お姫様は自分では気がついていないだけで、聖教皇と同じような力があるってわけ？」

アルデイスは結界をはることができない。それは彼女が王女であつて魔導師ではないからだ。いかに魔法を使える素質があつても、訓練もせずにはできるものではない。そして、ミステリーナのそんな言葉を肯定するような素振りをウィアはみせている。

「信じられない」

思わず、そう叫んでいるミステリーナ。しかし、だからといって事態が変わるはずもない。ミステリーナの様子にため息をつきながら、ウィアは自分の知っていることを淡々と話し続けるしかないようだった。

「聖水晶は、その術者を封じるものだということをきいています」

「それって、自分で自分を閉じ込めるわけ？ そんなことする意味があるの？」

ウィアの言葉にミステリーナはキョトンとした表情を浮かべていた。セシリアも何も言うことはないが、同じことを感じているような表情を浮かべている。そんな二人をみても、ウィアは態度を変えることはないようだった。

「おそらく、無意識のうちに発動したのでしょう。ご自分の命にかかわるような事態から逃げるために……」

「ありえるわね。でも、そうなると本当に厄介よね。じゃあ、誰がそこから解放する方法を知っているのかしら」

ウィアの言葉に納得したような顔のミステリーナだが、疑問もあるのだらう。首をかしげながらウィアにそつたずねている。しかし、彼の返事もかんばしいものではない。

「そのあたりのことはわからないんです。聖教皇でしたら知ってい

るかですが、会える保証はどこにもありませんし」

「これだけ大ごとになってもなの。だから、神殿って大層なのよ」

ミスティリーナは思わず愚痴をこぼしている。そんな彼女の様子にウィアは苦笑を浮かべているのだった。

「聖教皇に会う必要はないと思いますよ」

「本当？」

ウィアの言葉にミスティリーナの表情が一気に明るくなっている。そんな彼女の豹変ぶりに笑いながらウィアはこたえているのだった。「グローリア王家には代々伝えられている秘文書があります。それには聖水晶のことも記されているはずですよ」

「どうしてそんなに自信をもって言えるわけ？ 秘文書はたしかにあるけれども、内容は私も知らないのよ」

セシリアの言葉にウィアは肩をすくめている。

「リンドベルグの力を馬鹿にしてはいけませんよ。いろいろな情報が長のもとには確実に入るのですから」

「それに間違いないか。リア、どうする？」

リンドベルグという一族のことを知っているミスティリーナの言葉に、セシリアもようやく納得したようだった。疲れたようにため息をつきながら、彼女は口を開いている。

「一度、王都に帰りましょう。ここにいてもできることはないだろうし……」

「セシリア、俺も行くからな」

ウィアたちの話を黙ってきいていただけのカルロスがポツリとそう言っている。それを聞いた瞬間、セシリアが思いつきり嫌そうな顔をするのを彼は無視することに決めたようだった。

「今さら国に帰るのはアホらしいからな」

「この意地っ張りが」

呆れたようにウィアがそう呟いている。しかし、当のカルロスは聞こえないふりをしている。この調子では、承知しなくても勝手についてくるのだろう。来て欲しくない相手ではあるが、勝手に来ら

れた時の方が問題は大きくなる。了承するしかないとセシリアは思っているのだった。

「どうなっても知りませんからね」

半分、投げやりな調子でそう言っているセシリア。そんな彼女の顔をミステリーナはどこか同情をこめたような目でみているのだった。彼女のそんな視線はセシリアにもわかつているのだろう。しかし、そのことに触れることなくこれからの予定を口に出している。

「では、明日の朝一番にここを出発しましょう。ここでいくら話しても何も決まらないだろうし」

セシリアのその声に反対する者はその場にはいるはずもない。

そして、翌朝――。

一行はグローリアの王都への道をたどっているのだった。しかし、いくら急いだからといって、一日で到着できる距離ではない。そして、国王と早急に会えるように手配する必要があると考えたセシリアは、王都への中継地点でもある休憩所を使うことにしていたのだった。

「リア、ここは？」

自分が今までに使ったことのある宿場とはまるで違う雰囲気になっていたミステリーナが興味深そうにたずねている。

「ここは国王陛下や貴族たちが地方に行く時に休憩したり、宿泊したりするところよ。ここなら、陛下にすぐ連絡もとれるし」

セシリアはそう言っているが、それだけではないことをミステリーナは感じている。あたりをみた彼女は近くにカルロスとウィアがいないことを確かめると、セシリアに耳打ちしているのだった。

「それだけじゃないでしょう。あいつらがいるからでしょう」

ミステリーナの言葉にセシリアは目を大きく見開いていた。それでも、その言葉に間違いはないのだろう。彼女の口から出る言葉は肯定のものである。

「そうよ。私だって、できれば使いたくないわよ。でも、仕方ないじゃない」

そう言った時、カルロスたちの姿を目にしたセシリアはさつと口をつぐんでいた。そのことにウィアは気がついたようだが、あえて何も言おうとはしない。休憩所で働いている人々はセシリアが一緒にいることで黙って彼らを受け入れている。今のウィアにはそのことに文句を言いたそうなカルロスをおさえておくことの方が大切なことだったのだ。

やがて夕食もすませ、明日も早いということでそれぞれが用意された部屋に引き取った後、セシリアは眠れない様子で休憩所のテラスに出ているのだった。

「眠れないのか」

自分の背後から聞こえる声に、セシリアは驚いたように振り返っていた。休んでいるものと思っていたカルロスがそこにはいるのだ。一体、何を考えているのだろうか、と言いたげなセシリアの視線を彼は気になどしていないようだった。

「お前にしたらショックなことをきかされたわけだ。お前ほどじゃないが、俺にしてもそうだがな」

「……………」

カルロスの言葉にセシリアは応えようとしない。そんな彼女に、彼は真剣な顔で声をかけていた。

「信じてもらえないかな？　俺は本気で好きなんだけどな」

「えっ？」

その言葉は誰に対してのものなのだろうか。

彼の口ぶりは目の前の相手に対するもの。しかし、彼はアルデイスのことを好きだと公言しているのではなかったか。それでも、面と向かってそう言われたらドキドキするのは間違いない。かすかな月明りの中でもはつきりとわかるくらいセシリアは頬を赤くしていた。

「心配するな。お前を口説いているわけじゃないからな」

「な、何を！」

「たまにはそんな顔をするのもいいだろう？　そうやっているところ

るは、いつものお前とはまるで違うからな。女らしいし、色っぽいと思うぞ」

そう言うなり、カルロスは悪戯っ子のような表情を浮かべている。それをみたセシリアは、自分がかかわれているのだということにようやく気がついていた。

「カルロス様、冗談はほどほどにしてください」

「でも、気分が変わっただろう。あんまり、辛気臭い顔をしていると見ている方がしんどい」

「だ、だからって……」

理由はどうあれ、それならもつと言葉を選んでほしいというのがセシリアの本音だろう。そして、カルロスの言葉に一瞬でもときめいてしまった自分に呆れてもいるのだった。

「お心遣い、感謝しますわ。でも、私にこんなことを言ったことは知られないようにしてくださいませ」

「そうか？」

今度はカルロスがキョトンとする番だった。わけがわからないという顔をしている。

「アルフリート様の耳にこのことが入れば、心から喜ばれるでしょうね。あなたと私ということで、サツサと話をまとめてしまわれますわ」

セシリアの言葉にカルロスは苦笑を浮かべていた。アルフリートのシスコンが相当のものであることは知っていたが、ここまでだとは思っていなかったのだろう。しかし、彼ならばありえるというのも笑えない話である。

「お前の言うとおりだろうな。ついでに、それは勘弁してほしいな」肩をすくめながらそう言っているカルロス。そんな彼にセシリアが改めて問いかけているのだった。

「では、カルロス様はアルデイス様のことが本気でお好きなのですか？」

「冗談であるかもしれないが、自分を口説くようなことを口にする

カルロス。その彼の真意を知りたいと思うのは、セシリアにしてみれば当然のことだろう。

「本気だよ。それがいけないのか」

「いけないとは申しません。でも、アルデイス様にお会いになられたのは、数えるほどしかございませんでしょう」

「一目ぼれを信じないか？ 俺は初めてアルデイスに会った時から忘れることができないんだ」

セシリアをからかっていた時とは比較もできない真剣な顔。それをみた彼女は、それだけカルロスが必死なのだということを思い知らされたようだった。

「そのようなことがないとは申しません。私におっしゃった言葉よりは説得力もありますし」

セシリアの返事にカルロスは安堵の息をついたようだった。彼はじつと彼女の顔をみている。カルロスのそんな視線にセシリアは思わずドギマギする自分を感じているようだった。

「あの兄貴のシスコンは相変わらずか」

そんな声がポツリとセシリアの耳に入ってくる。それに対して彼女のできる返事は一つしかないといえるものだったろう。

「ええ、今回のそちらからのお言葉でますます」

その声に思わずゲンナリしたような表情をカルロスは浮かべているのだった。

「アルデイスを出せないのなら俺が婿に入るっていったんだがな」

「アルデイス様を溺愛なさっているアルフリート様には逆効果でしたわ」

そう言うなり、セシリアは大きくため息をついていた。そして、セシリアの溺愛という言葉にカルロスも同じようにため息をついているのだった。

「溺愛にシスコンね……あいつは妹しかみていないのか？」

呆れたような口調のカルロス。そんな彼に同情的な目を向けているセシリア。そんな彼女にカルロスは再び真剣な表情でたずねてい

るのだった。

「一つきいてもいいか？」

カルロスの聞きたいことはなんだろうというような表情がセシリアには浮かんでいる。そんな彼女の様子など気にもせず、カルロスは自分の知りたいことを口に出している。

「アルデイスは俺のことをどう思っている。兄貴の思惑は関係ない。アルデイスの気持ちを知りたいんだ」

「お嫌いではありませんでした」

セシリアの言葉にカルロスの顔色が一気に明るくなっていった。そんな彼をますます勇気づけるような言葉をセシリアは告げている。

「カルロス様のことがお嫌いでしたら、あの真珠をあそこまで大切にはなさいません」

カルロスが贈った真珠がアルデイスの宝物だったと告げるセシリア。それはアルデイスがカルロスに好意を抱いていたということを示唆している。そのことに気がついたカルロスはますます顔色が明るくなっていくようだった。

「セシリア、礼を言う」

改まった顔でセシリアをみているカルロス。その口調はどこか清々しさも感じさせるものである。そのことにセシリアは不思議そうな顔をしているのだった。

「私が何かしましたか？」

「アルデイスの気持ちが変わったからな。こうなったら、絶対にあいつをみつける。あいつの口からはつきり聞ければ、あのシスコンも文句は言えないだろう」

「でしょうね。でも、そのつもりでしたら王都までは大人しくしていただくませ」

「ウィアと同じことを言うんだな」

セシリアの口調にウィアのそれと同じものがあることをカルロスは感じている。そのことに苦虫をつぶしたような顔をしているが、今は大人しくしないとイケないのもわかっているのだろう。

「お前の言いたいことはわかった。そのかわり、あの兄貴に言いたいことを言うのはいいだろう。それもダメだというのか？」

カルロスの言葉にセシリアもうなずくしかない。思わず、ため息をつきながらセシリアは空を見上げていた。

その翌日、グローリアの王都に到着すると同時に、セシリアは国王への謁見を申し入れていた。

アルデイスのお気に入りであり、ハートヴィル侯爵令嬢という身分の彼女である。それがかなわないということがあはすもなかった。

「リア、あたしもなの？」

国王との謁見にそなえて正装しているセシリアのそばで、ミスティリーナはそうぼやいているのだった。

「当たり前じゃない。あなたも一緒だわ」

セシリアの言葉に『わかって欲しい』というような顔で返事をしているミスティリーナ。

「できればやめときたいのよ。だって、あたしは黒魔導師なの。お城の人ってそういうのは嫌いなんでしょう」

「そうは言ってないわよ」

「それに、あたしは礼儀作法も何も知らないの。恥かくのがわかっていないじゃない」

ミスティリーナの言葉にどことなく納得したようなセシリア。たしかに、気ままな生活をしていた彼女ならば、国王に会うことは緊張するものだろう。嫌がっているものを無理に同席させる必要もないだろうとセシリアは思っているのだった。

「わかったわ、リーナ。それよりも、カルロス様はどうなさいますか」

ミスティリーナがこの場に残るのだから、一緒にいてくれるのが

一番ありがたい。それでもカルロスの性格ならば、それをするはずがないのもわかっている。念のためという思いから問いかけたセシリアの声に、カルロスの不機嫌そうな返事が返ってきていた。

「当たり前のことをきくな。会う必要があるから来ているんだらうで、例の兄貴も同席するのか？」

「陛下にはカルロス様と一緒にだと申しております。それをお知りになった上で、アルフリート様を同席なさることはありませんでしょう」

セシリアの言葉にカルロスは『フン』と鼻で笑い、ウィアは安堵の息をもらしている。あまりにも対照的な二人だが、それも仕方のないことだらう。

「しかし、そうやってドレスを着ると、お前も色っぽいな」

セシリアの姿は正装ということもあり、髪はきちんと結い上げられ、色とりどりの宝石が身を飾っている。それらは彼女の雰囲気をもいつもとは大きく変えるものだった。

「そのお言葉はここだけにしてください。アルフリート様の耳に入ったらどうなるかは、よくわかりでしょうから」

「わかってるよ。ついでに、あの兄貴とはキツチリ話をつけるからな」

この調子では、国王との謁見が終わり次第、アルフリートを捜しかねない。そのことに軽いため息をついてみても、セシリアにそれをどうこうできるはずがなかったのだった。

「リーナ、ここの留守番お願いね」

「わかってる。リアも頑張っておいで」

その言葉に何を頑張るのかと笑っているセシリア。そうしている間にも国王との約束の時間は迫っている。セシリアはカルロスとウィアを促すと、謁見場へと向かっているのだった。そして、セシリアがあらかじめ事情を話していたため、その場で彼女たちを待っていたのは国王であるウィルヘルムだけ。それに安心したセシリアは手早く今までの経緯とカルロスが同席している理由を説明している

のだった。

「セシリア、いろいろ大変だったな。では、まだアルデイスの行方はしれないのか」

「はい。私の力がいたりませず、陛下には吉報をお届けできないのが申し訳ないと……」

「いや、そなたはよくやってくれている。それよりも、カルロス殿下がおみえの理由は」

セシリアの報告からカルロスと一緒にいる理由はわかっている。それでも、確認するかのような言葉。すると、それに呼応するようにカルロスが一步前に出ている。

「このような形で来訪させていただくのが失礼の極みであることは承知しております。しかし、そちらの姫君に贈ったものが戻ってまいりましたので、いてもたってもおられませんでした。そのため、ハートヴィル侯爵令嬢を仲立ちとさせていただきます、この場を設けていただきました」

すらすらと口をついて出る口上。それを聞きながらウィアは複雑な表情を浮かべている。今は大人しい。だが、大人しいからといって安心することはできない。いつ、暴走するかがわからないのがカルロスなのだ。そして、ここまで大人しいと、爆発した時のパワーは侮れないとウィアは心配しているのだった。

「それはそうと、先日の話の返事はいただけないのでしょうか」

カルロスのその言葉にウィアは顔面が蒼白になる思いだった。背中にイヤな汗がつたっているのがわかる。よりにもよって、このタイミングでこの話はないだろうという思いで呆れたような顔をしているウィア。その思いはセシリアも同じものだったろう。だが、彼女はウィルヘルムに頼まなければならないことがある。気を取り直すような顔をしながら、彼女は国王に向き合っていた。

「陛下、このような時にこのようなお願いは心苦しいのですが……」
「どうした、セシリア」

カルロスの言葉に返事をしあぐねていたウィルヘルムは、思わず

セシリアの問いかけにとびついていた。それに力を得たようにセシリアは言葉を続けている。

「調べなければならぬことがございます。地下の宝物庫への入室の許可を願います」

「地下の宝物庫だと！ 本気で言っておるのか」

思わず語気を荒げているウィルヘルム。しかし、セシリアはそれに臆するところはないようだった。彼女はまっすぐに国王の顔をみている。

「本気で申しております。許可をいただくわけにはまいりませんでしょうか」

一歩も引く様子をみせずに言葉を続けるセシリア。そんな彼女にウィルヘルムはため息をついていた。

「お前は簡単に言うがな」

「アルデイス様の御為です」

国王の言わんとしていることはセシリアも知っていること。今、自分が言っていることがどれほどの無茶かセシリアはわかっている。それでも、彼女はそれを通さなければいけないと思っているのだった。

「陛下！」

セシリアの訴えかける声。それに、国王からの返事はない。それを静かにみていたウィアが、ゆっくりと口を開いていた。

「国王陛下、つかぬことをおたずねいたします」

今まで黙っていたウィアの声に、全員の視線が集中している。

「今回、アルデイス姫がお姿を消されたのには、どなたかの入れ知恵があつたときいております」

ウィアが急にそのように言ったことにカルロスは驚いた顔をしている。これは、セシリアがウィアには教えておくべきだと判断したため、彼は知っているのだった。しかし、ウィアは誰からきいたか告げる事なく質問している。それに対してウィルヘルムはそれを隠そうと足掻いているようだった。

「い、一体何のことを……」

「隠されなくてもよろしいでしょう。私はリンドベルグの一族につながります。その気になれば、情報などいくらでも入りますよ」

ウィアの言葉にウィルヘルムは脂汗がますます酷くなっている。

しかし、それをウィアは気になどしていなかった。

「今、私が言ったことを一族の者が喋ればどうなりますでしょうね」表情こそ笑っているが、言葉の内容は物騒極まりない。それがわかってはいるが、セシリアもカルロスも止めることはしようともしていない。

「こちらの王家の信用はがた落ちでしょうね。王女が行方不明になったのを秘密にしている。これは仕方がないと同情していただけるでしょうが、もう一つは無理でしょうね。その原因をつくった者が身近にいるということは……」

「わ、わかった！ お前は何をしるというのだ」

脅迫まがいのウィアの言葉に国王はすっかり音をあげていた。降参とばかりに手をヒラヒラさせている。

「セシリア殿がおっしゃったことの許可を。それさえ認めてくださるなら、黙っておりますよ」

〔六〕

ウィルヘルムはウイアの言ったことをじっくりと考えている。そして、今の段階では宝物庫への入室許可だけでいいのだと判断したのであった。それならば、問題はまずないといえることである。

「セシリア、わかった」

「陛下、本当ですか？」

「嘘を言っただうなるといふのだ。鍵はこれ、入口は表の宝物庫の一番奥の棚。だが、何を調べたいといふのだ」

「聖水晶のことを調べたいと思っております」

ウィルヘルムの問いかけに静かな口調で応えるセシリア。彼女の言葉に彼はちよつと首をかしげているようだった。

「聖水晶？　だが、そのようなものは聖教皇の方が詳しいだろう」

国王の口から聖教皇のことがでたことにセシリアはホツとしている。彼女はこの機会を逃すまいとするかのように、自分のもう一つの依頼を口に出しているのだった。

「陛下、もう一つお願いが」

「何だ」

セシリアが何を言おうとしているのか見当がつかないウィルヘルムはそう言っている。それに対して、セシリアは臆するところもないようだった。

「聖教皇様にお目にかかりたいのです。陛下のお力でなんとかありませんか？」

「わかった。聖教皇に会えるように手配してやろう。他に何かあったかな？」

あえて、カルロスを無視するかのようにウィルヘルムはそう言っている。それに対してカルロスが何か言おうとしているのを強引に引き止めているウイア。

「わかつているんでしょう。強制送還されたいんですか」

「お前のその根性だけは見上げたものだな」

自分の耳元で脅し文句を囁くウィア。その彼の顔を睨みつけているカルロス。しかし、ウィアはそれを気にもしていない。もっともそれは国王とセシリアについても言えることだった。ボソボソ喋っている主従の姿を気にもせず、ウィルヘルムはセシリアに宝物庫の鍵を渡していた。

「セシリア、いつ入るつもりだ」

「明日の朝一番と考えております」

「わかった。ではそのように……」

国王の言葉が終わるか終わらないかのうちに、その場の扉が大きく開かれていた。そこに立っていたのはアルデイスの兄であり王子でもあるアルフリート。彼はその場にカルロスもいることに気がつく、顔を真っ赤にして怒鳴っているのだった。

「どうして、お前がここにいる！」

苛々したような顔と声。彼にしてみれば、この場にカルロスがいることは信じがたいことだったのだろう。しかし、彼の思いとは裏腹にカルロスは当然のような顔でそこにいる。

「アルフリート、見苦しい」

ウィルヘルムの一喝に返す言葉がないアルフリート。それでも、カルロスを睨むのをやめることはない。そして、その視線を受け止めているカルロスも一歩もひくつもりはないようだった。

「では陛下、私はこのあたりで失礼させていただきます」

二人が国王の前で喧嘩をはじめるのはよくないとセシリアは思っている。彼女はウィアに合図をすると、部屋から出ようとしていた。しかし、アルフリートはそんなセシリアの腕をグイッとつかんでいるのだった。

「どうして、こいつと一緒にいた」

「私がどなたと一緒にいても、アルフリート様に関係があるはずはございません」

そう言い切ると、自分をつかまえていた手をふりほどいているセ

シリア。そんな彼女の気丈さにウィルヘルムは舌をまいていた。しかし、アルフリートがそれで大人しくなるはずがない。

「セシリア、話はまだ終わっていない！」

「私と陛下の話は終わっております。そして、陛下の前でこれ以上見苦しいさまを晒されない方がよろしいでしょう」

国王には聞こえないように囁いているセシリア。そして、彼女はウィアにも耳打ちしている。

「カルロス様から目を離さないで。ここから出たとたんに、どこかで喧嘩なんて考えたくもないわ」

「本当です。もつとも、あれは似た者同士でしょうね」

「だから、アルデイス様をはさんであれだけの喧嘩ができるんですよ」

セシリアの言葉に黙ってうなずいているウィア。もつとも、当の二人は天敵をみるかのようにお互いを睨みつけている。その様子をため息をつきながらみているセシリアは、改めて国王に挨拶するとその場を離れていた。

セシリアのその動きに合わせるようにウィアも動いている。その彼がカルロスの首根っこをつかまえているのは間違いない。いくらなんでも他国の統治者の前でその身内との喧嘩が情けないものであるということとは明白な事実だからである。しかし、アルフリートはその行動が自分から逃げるものであるということを敏感に察していたのだらう。

「待て、逃げるつもりか」

「アルフリート、見苦しい」

その場から去ろうとするセシリアたちを引き止めようとするアルフリートの声。それに苦々しげなウィルヘルムの声がかぶさっている。そして、それを耳にしたアルフリートは、まず父王に言いたいことを言おうと決めたようだった。

「父上、以前から申しておりますが、あのような政略結婚がアルデイスのためになるとは思えません」

相変わらず、自分なりの論理を繰り広げているアルフリート。彼は自分の思っていることを主張するのに懸命になっっているのだった。「あいつがアルデイスを本気で思っているとは考えられません。今は大人しくしていたみたいです、それも芝居でしょう」

「どうして、そういう風に決めつける」

アルフリートの言葉にうんざりしたような表情のウィルヘルム。しかし、アルフリートはそれに気がついていない。もっとも、それはある意味で幸せといえることなのだろう。

「とにかく、私は反対です。本人が来たとしても認めるつもりはないです」

そう言うなりウィルヘルムの前から下がっているアルフリート。しかし、彼は自分の部屋にまっすぐに戻ろうとはしていなかった。彼はセシリアと一緒にいたカルロスとウィアのことが気になって仕方がないのだ。こういう形で来た二人が正規の客殿にいるはずがない。彼はセシリアが王宮で使っている部屋に一目散に向かっているのだった。

「セシリア、あいつはどこにいる」

「あいつって」

アルフリートのその声に不機嫌を丸出しのカルロスの声。彼にしてみればアルフリートは自分の恋路の邪魔者以外の何者でもない。そして、もともと水と油といってもいい関係の二人。一触即発は免れないのかとウィアはヒヤヒヤしているのだった。そんなウィアの思いに気がついていないアルフリートは自分の言いたいことを言っている。

「よく覚えておけ。アルデイスはお前にはやらない」

「そうかい。じゃあ、アルデイスが俺を選んだらどうする」

どうやら、そういうことを想定していなかったアルフリートは言葉に詰まっているが、カルロスを睨みつけるのはやめていない。

「ありえないと思うがな。そんな夢でもみておけ」

捨て台詞ともそれそうな一言。それを耳にしたセシリアたちも思

わずため息をついている。しかし、カルロスはそんなことはまるで気にしていないようだった。

そして、翌日の早朝。

セシリアたちは足早に宝物庫へと足を運んでいた。調べるのにどれだけの時間がかかるかわからない。それでも、手掛かりがあるようにと祈るような思いがセシリアとカルロスにはあるのだった。

警備の者には国王からの命が伝えられている。セシリアたちの姿を認めた彼らは入口をあけているのだった。

「凄い、いろいろあるのね」

思ったよりも中が広いことに驚いているミスティリーナ。その視線はあちらこちらとさまよっている。ここにあるものはどれもが興味をそえられるものばかり。しかし、今はそんな時ではないとミスティリーナは気持ちをきりかえたようだった。今は聖水晶のことを調べなければいけないのだ。そうやって、宝物庫の中を奥へと進んでいくセシリアたちの前に、一枚の肖像画が姿をあらわしていた。

そのの周りには他に何もおかれていない。だからこそ目を引くといえるのだろう。その肖像画をみたセシリアはモデルが誰かわかると微笑みを浮かべているのだった。

「どこにしまったと思っていたら……」

「どうしたんだ、セシリア」

彼女の言葉にひかれるように近寄ったカルロス。その彼は肖像画をみると、固まったようになっていたのだった。

「どうかなされましたか」

カルロスの様子が気になったらしいウィアが近寄っている。その彼もカルロスのみていたものを目にした時、同じようになってしまっているのだった。

「どうしたっていうのよ」

まるでわけがわからないため、苛々したような声のミステイリーナ。その彼女も肖像画を目にするなり、ポカンとした表情を浮かべているのだった。

「き、綺麗……」

そこに描かれていたのは、美少女という言葉が相応しい少女。柔らかな巻き毛の金の髪、穏やかな光の青い瞳。クリームのような白い肌に浮かんでいるえくぼと珊瑚のような唇。その耳を飾っているのは見事な真珠。

「これがお姫様なの？」

聖王女と呼ばれるアルデイスがこれほどの美少女なのかとビックリしたような顔のミステイリーナ。それにセシリアはうなずいているのだった。

「これじゃ、シスコンになるのもわかるかも」

ミステイリーナはポツリとそう言っている。肖像画からは美少女という言葉しか出てこない。これならば他人にとられるのを嫌がる気持ちもわからないではない。ミステイリーナは変なところでアルフリートの気持ちがあったのだった。

「これは、先日の誕生祝に絵師が描いたものよ。見てるのもいいけど、遅くなるわ。奥に行きましょう」

そう言うとセシリアは奥へと向かっている。その彼女に遅れまいとしているミステイリーナとウィア。しかし、カルロスはその場から動くことができないようだった。魅入られたようにアルデイスの肖像画をみつめている。

「王子、おいていきますよ」

呆れたようなウィアの声も聞こえていないのだろう。そんな彼の様子にウィアは肩をすくめている。

「そこまで本気なら、それを示さないといけませんよ」

「ウィア、何が言いたい」

ウィアの声に棘を感じたのだろう。カルロスはムツとした表情を浮かべている。

「わからなかつたらいいんです。私は先に行きますよ。セシリア殿も苛々しているでしょうし」

そう言うなり、ウィアはサッサと歩き始めている。それをみたカ
ルロスは慌てたようにその後を追っているのだった。

「来られないのかと思っていましたわ」

ようやく追いついたカルロスにセシリアの口調は冷たいものがある。それに反論している余裕がないことを承知しているウィアはカ
ルロスを押え付けている。そんな中、セシリアは国王の言った一番
奥の棚をあちこち調べているのだった。

「リア、わかる？」

彼女の様子を気にしたようなミスティリーナの声。そんな時、足
を滑らせかけたのかミスティリーナは棚にぶつかっていた。バラバ
ラと落ちる本の数々。その一角に鍵穴らしきものがあるのにセシリ
アは気がついていて。彼女は慌てたようにそこに鍵を差し込んでい
る。

するとギ、ギツという物と物がぶつかって軋む音がしたかと思う
と、人が一人入れるくらいの空間がポツカリとあいているのだった。
「これが地下の入口なの？」

恐る恐る覗き込みながらそう言っているミスティリーナ。それに
うなづくようにして中を覗き込んだセシリアは、躊躇することなく
入っていかうとしている。

「リア、明かりはいらないの」

明かりとなるものを何も持とうとせずに入っていこうとしている
セシリア。その行動に驚いたミスティリーナが声をかけているが、
セシリアは気にしていないようだった。

「明かりはいらないみたいよ。それよりも早く行きましょう」

気持ちの高ぶっているセシリアに促されるようにして地下へと入
っていくミスティリーナたち。そこは昼間ほどの明るさではないが、
ぼんやりとした明かりが通路を優しく照らしている。階段となつて
いるため、気をつけないといけないが、足元がまるで見えないわけ

ではない。

地下へと続く階段は誰が作ったのかわからないが、石を組んで作ったもの。そして、暗がりでも大丈夫なように等間隔で配置されている燭台。それらはゆらゆらと揺れてはいるが、消えるということはない。一体、どのような仕掛けになっているのかとも思うが、今はそれどころではない。やがて、目の前が白く輝く光にあふれている。そこは階段の終着点であり、高い天井の広間でもあるのだった。城の地下にこのようなものがあるとは思ってもいなかったセシリアは、ポカンとした顔をしている。地下であるのに広間は光であふれ、中央には天井近くまであるような像が立っている。

「あれは、創世神の像よね」

ここにどうしてあるのだろつかという思いも感じられるセシリアの声。そして、その像の前に一冊の本があるのをみつけた彼女は、慌ててそのそばに近寄っているのだった。それはかなり古びたものであり、秘文書というのが相応しいともいえるだろう。こんなに簡単にみつかるとは思ってもいなかったセシリアは、早速、手をのばそうとしているのだった。

『勝手に手を触れてはならぬ』

急に聞こえた声に驚いているセシリア。その声が聞こえたのは、彼女だけではないようだった。他の面々も不思議そうな顔であたりを見回している。そんな中、創世神の像の中から白い蛇のようなものが出てきたかと思うと、見る間に巨大な白竜となっているのだった。

『これは誰もが触れていいものではない』

再び広間に響く声なき声。それがどこから聞こえてくるのだろうかといぶかしんだセシリア。しかし、彼女は自分をじっと見ているような竜の視線も感じたのだろう。まっすぐにそちらをみているのだった。

「これに触れるには資格がいるのですか」

『そういうことになるかのお。というよりは、ここの番人である僕

が許可すれば問題ないのじゃがな』

先ほど聞こえた声と同じような響きであるのに、どこか人を食ったような口調。それにはセシリアのみならず、他の面々も哑然としているのだった。しかし、今はのんびり話をする心の余裕がセシリアにあるはずもない。彼女は白い竜に近寄っているのだった。

「どうか、その文書を拝見させてください。私にできることでしたら何でもいたします」

『何を知りたいのじゃ。その内容にもよるな』

「私の知りたいことは聖水晶についてです。もし……」

『聖水晶じゃと！』

セシリアの告げた聖水晶という言葉に白竜は驚いたような反応を示していた。慌てて瞳を閉じると、何かを探るかのようになっている。まるで眠っているようにも見えるが、時折、ピクピク動く尻尾でそうではないことがわかる。やがて、開かれた瞳に浮かんでいるのはどことなく焦った光。白竜はセシリアの顔をじっとみているのだった。

『聖王女の気配がないが、どうしたのだ』

「実は、先日よりアルディス様のお姿が消えてしまわれたのです」

『なんと！ このグローリアの城は僕の守護の結界があるから大丈夫だと油断した』

「あんたの結界ってそんなに力があるの？ あんたはこの番人とか言ってなかった？」

どうみても人を食ったような印象しか与えない白竜。その相手がどれだけの結界を創れるのかというミステリーナの声。それに対して、竜は尻尾をピクピク揺らし、顎の下をポリポリ掻きながらこたえていた。

『僕はかつては神竜と呼ばれておったからの。城を守護する結界も創造できずにどうするのじゃ』

白竜の言葉にセシリアたちは呆然としてしまっていた。どうみても、神竜というような荘厳な存在にはみえない。どちらかというと、

人をからかって楽しんでる悪戯っ子のようにもみえる。しかし、今はそれを追及する時ではないとセシリアは思っていた。

「あなたが神竜だろうが、ただの竜だろうが関係ありません。その文書を見せていただけるのか、ダメなのか。その返事がいただきたいです」

セシリアの形相は必死としかいいようのないもの。そして、彼女のそんな様子をみた白竜、もとい神竜は相変わらず顎をポリポリ掻きながら喋っているのだった。

『非常事態じゃというのは僕にもわかった。特別に見ることを許すことにしようかの』

「本当ですか？」

期待に満ちたセシリアの声が響いている。そんな彼女を焦らすようなことを神竜は口にはしているのだった。

『じゃが、お主たち全員ではないぞ。相性というものもあるからのふむ……』

そう言いながら、セシリアたちの顔をみている神竜。その視線がウイアの上でピタリと止まっているのだった。

『ふむ、お主なら大丈夫じゃろう』

神竜がそう言うなら、秘文書はフワフワ浮いてきたと思うとウイアの手の中に納まっている。そのことに不思議そうな顔をしているウイア。

「私に読めというのですか？」

『お主が一番、相性がいいようだからじゃ。お主、リンドベルグの息子じゃろう』

「わかりましたよ。読めばいいんでしょう」

神竜の言葉に、どこか投げやりにこたえているウイア。彼が秘文書をパラパラとめくっている時、そこには別の声も聞こえてきているのだった。

「みなさま、ご機嫌は如何かしら？」

「ア、アルデイス様！」

セシリアの声に思わずそちらを見ているミスティリーナたち。そこにいたのは、フワフワとした金の巻き毛と青い瞳。肖像画でみた少女そっくりの相手。彼女は極上ともいえそうな笑顔を浮かべてセシリアたちに近寄っている。

「どうかしたの？」

首をかしげて無邪気にたずねる仕草。セシリアにしてみれば、それはアルデイス以外の何者でもない。そんな中、ギリツと唇をかんでいたカルロスが問いかけていた。

「お前は誰だ。どうして、その顔と声だ」

カルロスの様子にウィアは不思議そうな顔をしている。そんな彼に何もいうことなく、カルロスは少女から目を離そうとはしていない。

「俺の前にその姿であらわれるな。アルデイスと同じ顔、同じ声。そんなもので騙されないからな」

低い、どこか凄みを感じさせるカルロスの声。それにセシリアはすっかり驚いてしまっていた。

「カルロス様、あのお姿がアルデイス様ではないと？」

セシリアの抗議するような声も無視するかのように、カルロスは少女をみている。いや、その視線は睨みつけているというものだろう。しかし、少女はまるで気にしていない。

「どうしてですか？ わたくしですわ。おわかりになりませんか？」

そう言って首をかしげる姿は可憐そのもの。しかし、カルロスの追及の手もやむことはない。

「お前がアルデイス？ そんなはずはない。姿がまるで違うからな」カルロスの言葉にセシリアが思わず驚いている。そんな彼女によく見ると言わんばかりの表情を浮かべているカルロス。

「あれがアルデイスか？ あいつはあんな顔で笑うか？ あいつはあんな冷たい顔をする奴じゃない」

その言葉に思わずハツとしたような顔をしているセシリア。言われてみれば、たしかに少女が浮かべている微笑は彼女が知っている

アルデイスのそれとは違うような気がする。

「お前が信じたくないのはわかる。だがな、それなら尚更ちゃんと見るべきだろう！」

叩き付けるようなカルロスの言葉。しかし、それでも動じようとしない少女。それならば、彼女は真正銘アルデイスなのか。しかし、カルロスの感覚はそうではないと告げている。そんなところに別の声が響いているのだった。「そろそろ芝居はおやめ。見苦しい」

その声に初めて少女の顔が一変していた。どことなく焦ったような、それでも余裕を感じさせるような表情。しかし、それも続いて聞こえる声に焦りの色を浮かべていた。

「まだ、やめないのかい？ 本当に見苦しいよ、ジェリータ」

その声の響きにセシリアたちは思わず反応していた。名前は聞いた覚えがなくとも、声には覚えがある。あれは、ルディア近くの荒野でアンデッドたちと遭遇した時に割って入ってきた声。セシリアたちがそう思った時を見計らったように、銀髪の青年が姿をあらわしていた。

「ここって、あんたの結界があつたのよね」

嫌味も感じさせる声でミスティーナは神竜に言っている。しかし、その神竜は乱入してきた相手の姿にすっかり驚いているようだった。

『お主はシュルツ。生きておつたのか！』

その声に振り向いた銀髪の青年。その顔はカイザー・ヴァンパイアと名乗ったシュルツに間違いない。

「その言い草はないでしょう。僕たちにだって、生きる権利はありますからね。もっとも、今は喧嘩をするために来たんじゃない。そこにいるお転婆を連れて帰るだけですよ」

そう言うなり、シュルツはツカツカと少女に近寄っている。

「ジェリータ、こんなことはおやめ。お前が苦しむだけだよ」

「お、お兄様……」

シュルツの言葉に後退りをしているジェリータ。だが、その表情

が急に自信にあふれたものになっている。

「いいえ、やめられませんか。たしかに、わたくしはお兄様よりは弱いかもしれない。でも、この場所ではわたくしの方がお兄様よりも有利ですわ」

そう言いながらキツとシユルツを睨みつけているジェリータ。

「お兄様もわかっていらっしやるはずですわ。どうして、わたくしたちがここまで苦しまなければなりませんの？ 原因はわかっていることですわ！」

そう言うなり腕を振り下ろすジェリータ。それに従うかのように突風が広間に吹き荒れている。風が轟音を上げて暴れまくる。広間のものがすべてその位置を変え、破壊されている。

「これがわたくしの力ですわ。おわかりになりましたでしょう」

「たしかにね。でも、これくらいなら僕は防げるよ。わからないのかい？」

そう言うなり、シユルツはジェリータに近付いている。

「悪戯がすぎたようだね。お帰り」

「お、お兄様……」

思わず、恐れるような表情を浮かべるジェリータ。そんな彼女の顔を軽くつつくシユルツ。次の瞬間、ジェリータはかき消すようにその場から姿を消してしまっているのだった。

〔七〕

ジェリータが姿を消した広間。そこは、まさしく嵐が過ぎ去った後だった。あちらこちらに破壊の爪痕が残っている。そんな中、シユルツは何事もなかったような顔をして立っていた。

「シユルツだったわね。助けてもらったことになるわけだから、お礼は言っておくわ」

ジェリータの引き起こした突風から自分たちを守ったのはシユルツの力。それがわかつているセシリアは複雑な顔をしているのだった。

「別に君たちを助けようとしたわけじゃない。でも、ありがたうってだけでいいよ」

軽く肩をすくめながらの言葉には、人を小馬鹿にしたようなところがある。そして、その彼の視線はセシリアたちの後ろにいる神竜に向けられていた。

「カロン、久しぶりだね」

『千年ぶりじゃぞ。久しぶりはないじゃろう。しかし、お主が生きていたとはな』

「僕たちの寿命を忘れたのかい。それに、人のことは言えないだろう」

『たしかにそうじゃな』

知り合いのように気楽に話しているシユルツと神竜。そのあたりのことを問い質したいとセシリアたちは思っている。しかし、今はそれよりもききたいことがあったのだ。

「おい、さっきの女は何だ」

シユルツがヴァンパイアだということを知っていてもそう詰め寄るカルロス。そんな彼を興味深そうにみているシユルツ。

「君があゝの二人を見分けることができたなんてね」

シユルツの言葉にセシリアは声も出せなかった。シユルツは『見

分ける』とはつきり言っている。つまり、あの少女はアルデイスではなかったのだ。

「私はアルデイス様ではないのに、そう思っていたの？」

半ば悲鳴のようなセシリアの声。それを肯定するようなシュルツの仕草。

「そうなるね。でも、それは仕方がないとか言い様がない。なんといっても、その坊やが見分けられたのが奇跡のようなものだからね」

見分けられなくて当然、といった顔で淡々とシュルツは喋っている。しかし、カルロスにしてみれば自分の質問にこたえていないという苛立ちがあるのだろう。表情には苛立ちの色が強く浮かんでいる。そんな彼をみて、いつでも押さえ付けられるようにとウィアは身構えている。

「俺のきいたことには答えていないな。あの女は何者だ。それとも、教えられないのか」

怒気をはらんだようなカルロスの低い声。それによろしく気がついたように、シュルツはカルロスの方を向いていた。

「そんなに怒らなくてもいいだろう。あの二人を見分けることのできたご褒美に教えてあげるよ」

その声に当然という顔をしているカルロス。そんな彼をみながら、シュルツはゆっくりと口を開いている。

「あの子はジェリータだよ。僕の妹で、盟主とも呼ばれている」

「やはり、そうか。では、もう一つ教えてもらおうか。どうして、そいつがアルデイスとそっくりだったんだ」

カルロスの質問はその場にいた誰もが知りたかったこと。どこか緊張した空気がその場に張り詰めている。

「それは仕方がないことだよ。あの二人は、そうならざるをえない」「どうしてなんだ！」

「そうです。わかるように教えて！」

シュルツの言葉にかぶさるように、カルロスとセシリアの声が響

いている。彼らにしてみれば、何よりも知りたいことをはぐらかされたような思いがあるのだろう。

「教えるつもりがあるなら、はっきりお願いします。こちらには血の気の多い方がいらっしやるので」

カルロスの姿を横目でみたウィアがそう言っている。それを聞いたシュルツは軽くため息をついている。

「回りくどい話し方はしていないよ。君たちが信じるかどうかだ」
そう言ってセシリアたちをみた表情は真剣そのものなものの。今までの態度とは異なるために、セシリアたちも緊張の色を隠せない。そんな彼女たちを前にして、シュルツはようやく核心を話し始めていた。

「そこにいる神竜。彼と僕とは昔なじみでね」

「そんな感じだったわね。で、あんたってホントに千年も生きているの？」

先ほどの神竜との話が気になっているミステリーナがそうたずねている。それに対してシュルツは楽しげに笑っているだけだった。
「ヴァンパイアに年をきくのかい？ 我々は不老不死だよ。魔導師なら、それくらいは常識だろう」

「そ、そうだったわね。じゃあ、千年前かなにか知らないけど、その時に何があったのよ」

「千年前に我々と人間の間で争いがあったのだよ」

「千年前、ということとは……聖戦ですか」

ちよつとうるたえたようなミステリーナ。そんな彼女を気にせず、淡々と語るシュルツ。そして、彼の言葉に思い当たることがあったのか、ウィアがポツリと呟いていた。そんな彼の様子に興味をひかれたようなシュルツ。

「知っていたんだね。そうだよ、その聖戦だ。その時、アンデッドを率いていたのはジェリータだった。覚えているよね、カロン」

シュルツの口調は穏やかともいえるものである。しかし、その目にはなんとも表現しようのない光が宿つてもいる。

『忘れるはずがないじやろ。あの時、僕は聖教皇と一緒にあったのじゃからな』

「そうだったよね。あの時、大神殿は本気だということを示すために使えるものは何でも使ったからね」

『お主たちの存在は脅威じゃからの。そして、犠牲はいつも力のない民衆じゃ。聖教皇が動かないはずがないじやろ』

神竜の言葉にシュルツの瞳がそれだけではないだろうと言いたげに光っている。

「我々は静かに暮らしたいだけだよ。それも許されない？」

『じゃが、それでは満足できないものもおったのじやろ。そやつらがジェリータを動かしたのじゃ』

「たしかにそうだったね。あの子は優しすぎる。だからこそ、なんとかできると思ってしまったんだ」

シュルツの言葉に信じられないという顔をしているカルロス。そして、シュルツの言葉を肯定するような神竜の声。

『そうじゃの。あれは優しすぎたのじやろうな』

「どういうわけですか？」

シュルツと神竜の話に不思議そうな声をあげているウイア。そんな彼をみながら、神竜はゆっくりと口を開いていた。

『あの時、僕は聖教皇とともにジェリータと戦ったのじゃ。能力はやつらの方が上じゃが、人数は僕らの方が遥かに多かったじやろ。かの。聖教皇が声をかけたのじゃ。それも仕方ないじやろうな』

神竜の言葉にウイアはうなずいている。千年前でも今でも、アンデッドに対する恐怖心は変わっていないだろう。ならば、聖教皇が己の威信をかけておこなう聖戦に人々が参加しないはずがない。個々の能力ではアンデッドにかないかけてもしない人間だが、数を集めることで勝利したのだと歴史は伝えている。

「歴史の話を聞きたいんじゃないの。どうして、アルデイス様とジェリータがそっくりなの」

苛ついたようなセシリアの声。そして、カルロスも感情を押し殺

したような低い声で詰め寄っている。

「話をそらしているのか？ それとも、教えるつもりがなくなったのか？」

そんな彼の声を耳にしたウィアは顔をひきつらせている。カルロスがこんな口調になった時は暴走するよりも恐ろしい。なぜなら、こんな状態の彼にいつもの殺し文句はきかないのだ。そんなそれぞれの思惑など関係ないように話し続けるシュルツ。

「このあたりのことを知っておかないと話にならないんだよ」

「そうなの？」

かなり苛立つてきているセシリア。その声と表情には『早く教える』という思いが見え隠れしている。

「そんなに焦らなくてもいいのに。知らない方がよかったと思うことかもしれないんだよ」

「教えるつもりがあるなら、勿体ぶらずに教えろ」

「仕方がないよ。あの二人は似ていて当然なんだから」

「その理由を教えると言っている！」

そう叫んだカルロスの瞳には、どこか剣呑な光が浮かんでいない。シュルツを正面から睨みつけたその顔は、彼の返事だけをまっている。

「簡単だよ。二人は同一人物なのだから」

「そんなはずないわ！」

信じられないことを耳にしたセシリアの体が小刻みに震えている。それでも、言わなければならないことがある。真っ青な顔色ではあるが、セシリアはシュルツの顔をじっとみているのだった。

「そんなこと、あるわけがない！ アルデイス様がお生まれになった時、国中が祝福したのよ。聖戦の時にいられるはずがないでしょう」

そんなセシリアの声を無視するかのように、シュルツは話し続けている。

「同一人物といったのは、その方がわかりやすいと思ったからだよ」

「余計、わからない。だって、あんたの妹でしょう？ あんたは忘れてるかもしれないけど、お姫様は十九歳よ」

ミステリーナの声にシュルツはため息をついている。

「人間というものは、自分の信じたいようにしか物事をみないのかな？」

シュルツの言葉に反論しようとするカルロス。その彼を押さえ付けているウイア。

「あなたがいつていることの方がわけがわかりません」

ウイアの声にシュルツは驚いている。そんな彼をみながらウイアは喋り続けていた。

「だって、そうでしょう？ アルデイス姫は十九歳です。その姫君とあなたの妹が同一人物？ ありえませんよ」

一気にそう言うと、ウイアは言葉を切っている。そんな彼の顔をじつとみているだけのシュルツ。

「あなた方はヴァンパイアです。だからこそ、独特の気配がある。私は何度か姫君にお会いしたことがありますが、そのような気配は感じませんでした」

自信ありげな顔でそう告げるウイア。その彼にシュルツは参ったという顔をみせているのだった。

「気がついていたんですね」

「ということは、さっきの話は嘘か！」

シュルツに気色ばんで詰め寄るカルロス。そんな彼をウイアは必死で押さええている。

「言ったことは嘘じゃないよ」

シュルツの言葉は穏やかであるが力を感じさせる。その言葉に逆らえる者はいないともいえるのだった。

「千年前の聖戦。それがすべての始まりだった。あの時に我々が望んだのは、ほんのささやかなこと。『人間に邪魔されない場所が欲しい』それだけだった」

『じゃが、それは不可能じゃったな。人がその望みをきくことはあ

りえぬことじゃった」

神竜の言葉にシュルツはかすかにうなずいている。

「だから、ジェリータは動いた。あの子は、仲間が狩られることが耐えられなかったんだよ」

広間に響く淡々とした声。その語られる内容は軽いものではないが、彼の語り口のために昔話のように聞こえる。

「あの子は我々だけで暮らせる土地が欲しかった。しかし、人間。特に聖教皇を中心とした勢力は、それさえも許さなかった」

そう言うなり、キツと神竜を睨みつけるシュルツ。彼の表情が急に険しいものになったことに、セシリアたちはすっかり驚いていた。そんな中、シュルツの話は続いている。

「そして、あの子は覚悟を決めた。だからこそ、一人でお前たちと対決する道を選んだ」

『そうじゃ。あの時のジェリータはよく覚えておる。まるで、何もかもを破壊するような勢いじゃった』

「そう。でも、あの子は最後にためらったんだ。そのために肉体と魂を分けられてしまった。そして、神殿は聖教皇とジェリータは共に死亡したと発表した。しかし、それは真実ではない。聖教皇は死亡せず、ジェリータの肉体と魂を別々に封印した」

「そんなことができるの？」

ポツリと呟いているセシリア。その顔には信じられないという表情がある。そんな彼女をみたシュルツは静かにこたえていた。

「普通では不可能だね。でも、この世界を創った存在が手を出した。そして、ジェリータの魂だけが転生を繰り返したんだ」

物音一つしない空間に響いているのはシュルツの声だけ。誰も何もいえない状態ではあるが、セシリアは氣力を振り絞るようにしてたずねていた。

「アルデイス様とジェリータが同一人物ってそういう意味なの？ アルデイス様はあなたの妹の魂が転生した姿だというの？」

「そうだよ。聖王女とジェリータは鏡の表と裏。だからこそ、あの

二人は似ているし結界も彼女の侵入を防げない」

「じゃあ、あんたはどうして入れるのよ。あんたの妹はそういう理由があるからわかるけどね」

『それも仕方がないことじゃ。こやつたちの力は創世神に通じるものがあるからな』

神竜の言葉にセシリアたちは驚いている。創世神という世界を創り上げた存在とアンデッドに通じるものがあるというのは、簡単に信じられるものではなかったのだろう。しかし、シュルツがここにいるのは事実。それならば、そういうこともあるのかもしれないとセシリアたちは思っているのだった。

「その気楽な神竜の言うことを信用するとして、あんたは妹の肉体と魂が別々に封印されたっていつてたわよね」

シュルツがここにいられる理由を追及する時間が勿体ないと思ったミステイリーナはそう言っている。その彼女をじっとみているシュルツ。

「魂は転生し、肉体は封印した。それなら、どうしてジェリータがあたしたちの前に出てくるの」

ミステイリーナのそんな疑問にシュルツはあっさりとこたえている。

「ジェリータの肉体はここに封印されていたんだよ」

彼の言葉に驚いた顔をしているセシリア。そして、シュルツは歴史の闇に隠されていた真実を語っている。

「ジェリータを封じた聖教皇は自分を死んだということにしてその任をおりた。そして彼は当時のグローリア王家の姫を妻とし、王家の中に入った。その時にこの場所を作りジェリータを封印したんだよ」

シュルツの言葉は信じられないものである。しかし、それを聞いていた神竜が否定しないということが、それは真実だということでもある。そんな中、シュルツは語り続けていた。

「聖戦も終わり、落ち着きを取り戻した頃だ。あいつが動いた。あ

いつは封印されていたジェリータの肉体を奪い、仮初の意識を与えた。今のあの子は単なる操り人形。それでも、あいつのそばに限りどうすることもできない」

シュルツの声には悔しさが滲んでいるようだった。それは自分の妹を好き勝手にされているということもあるからだろう。そして、セシリアは彼の話の中にでてきた『あいつ』というのが気になっていた。

「いろいろとたずねるけど、『あいつ』って誰なの？」

セシリアの言葉にフツと顔を曇らせているシュルツ。しかし、最後まで話さなければいけないのはわかっているのだらう。彼は覚悟を決めたように口を開いている。

「君たちは知らないだらうね。邪霊王だよ」

シュルツの告げた名前はセシリアたちには何の意味もない。しかし、一人だけその名前に敏感に反応している者があつたのだ。

「ウィア、どうかしたのか？」

シュルツが邪霊王といった瞬間から顔色が青ざめ、苦しそうにしているウィア。そんな彼の様子をみたカルロスはすっかり驚いてしまっていた。

「だ、大丈夫です。よもや、このような場所で聞くとはおもっていませんでしたので……」

「君は知っているんだね。あいつのことを」

「ええ、あまり詳しくは知りませんが。会いたくない存在ではありませんね」

「しかし、そうは言っていられないよ。今のジェリータを影で操っているのはそいつだから」

「あなたが私たちにいろいろ教えてくれる理由は何」

シュルツの様子に何かがあると思ったセシリアはそうたずねていた。そんなセシリアを見るシュルツの表情には妹のことを心配する兄の表情しか浮かんでいない。

「あの子を解放したい」

『お主はそう言うが、それはあれの消滅を意味しておるのだぞ』
そんな神竜の声にもシュルツが心を動かされた様子はないようだった。

「今のあの子でいるくらいなら、そうなた方がいい」

「でも、あんたの妹でしょう」

驚いたようにそう言っているミスティーナ。そんな彼女を見ながらシュルツは覚悟といえるものを口に出しているのだった。

「だからだよ。だからこそ、僕はあの子を救いたい。あの子の救いは今となつてはこの方法しかないだろう。それでも、人形のままでいるよりはよほどいい」

「だから、あたしたちを何度も助けてくれたわけ？ 妹に人を殺させないために」

「それもあるだろうね」

そう言つて微笑を浮かべているシュルツ。それはあまりにも痛ましい感じを与えるものである。しかし、彼自身がそれしかないと思つている。それをとやかく言う権利はセシリアたちにはないとも言えることだったのかもしれない。

そんなどこか重苦しい雰囲気の中。ウイアは自分に託された秘文書に目をやっているのだった。すると、先ほどまでは書かれていたはずの文字がすべて消えてしまつてゐる。そのことに驚いた彼は大声を出しているのだった。

「どうしたんだ、ウイア」

いつもの彼には似合わないことだけに、カルロスがすっかり慌てている。そんな彼の前にウイアは秘文書を広げているのだった。

「これをみてください。先ほどまでは文字があつたのですが……」

「僕とジェリータの力がぶつかったからね。おそらく、秘文書が何かを感じて記録を消してしまつたんだろう」

「そんなことができるの」

「できるさ。これを作つたのは創世神だろう。だったら普通では考えられないこともありえるものさ」

そう言ったシュルツは神竜の方をみている。そんな視線を無視するかのようにしている神竜。それは、彼が言っていることが正しいのだと答えているのと同じことだった。

「僕は君たちの知りたいことには答えたよ。違つかい」

「そうね。もつとも、知りたくないことまで教えてくれたけど」

シュルツの言葉にいくばくかの嫌味ものせて答えているミスティリーナ。そんな彼女の様子を彼が気にした様子もない。

「そちらが知りたいといったんだよ。僕はちゃんと警告したんだからね。それよりも、僕はこれで帰るよ。さすがに創世神の結界の中に長くは居たくないからね」

「二度とあんたには会いたくないわね」

シュルツというつかみどころのない者の相手をするのがこりこりだという顔をしているミスティリーナ。そんな彼女に意味ありげな微笑を浮かべて彼は姿を消している。

「それはそうと、秘書書が真つ白になったのよね」

ミスティリーナのその言葉にウィアがうなずきながらページをめくっている。

「リア、どうすればいいと思う？」

「どうするもこうするも、陛下には申し上げないわけにはいかないわね。後はこれと同じものがあるかどうか……」

『おそらく聖教皇ならもっておるじやろう。これは、代々の聖教皇に秘密裏に伝えられていることと同じはずじゃからの』

そう言いながらポリポリと顎をかいている神竜。その姿をみたミスティリーナはどうみてもこれが聖なるものだとは思えないようだった。

「あんたがもつとしっかりしていればよかったんじゃないの」

『僕が神竜と呼ばれておったのは千年から前の話じゃ。今の僕はただの番人じゃ』

「でも、その番をしていたものはなくなっただけでしょう。番人さんはこれからどうするの」

『そうじゃのう。何もすることがなくなつたしお主たちと一緒に行くことにしようかの』

「何ですって!」

神竜の言葉に思わず大声を上げているミステリーナ。いくらなんでも、こんなでかい竜と一緒に来られては困るといわんばかりの顔をしているのだつた。

『心配することはない。小さくなれるんじゃないかな』

そういうなり神竜は白い蛇にその姿を変えている。この調子だについてくるのは間違いないと思つたセシリアは思わず頭が痛くなるのを感じていた。

「お断りするというのも失礼ですので一緒にと申しますが、邪魔をなさるとその場で捨てていきますからね」

『この罰当たりが』

神竜の叫びは誰も気にしてはいない。それはセシリアの言葉が、その場の全員の気持ちを代弁しているものだったからだ。

コツ、コツ、コツ――

足音がその場に響き渡っていた。床は大理石、壁に使われているのは黒御影。真夜中を思わせる黒一色に支配された中を歩いている少女。

彼女はゆつたりとした足取りで奥へと進んでいる。やがて彼女は黒一色で埋め尽くされたような広間に来ていた。そこには大きな玉座がしつらえられ、男が座っている。彼は少女が入っていたのに気がつくとしつとその姿を見ている。そして少女は声をかけられるのを待っているかのように、頭をスツと下げている。

「どうして、そんなに畏まっているの?」

柔らかな優しいげな声が少女にかけられている。それを耳にした瞬間、彼女はますます緊張したようだった。そんな少女をじつと見守

るような態度の男。

「そんなに緊張しなくてもいいんだよ。別に怒ったりしていないんだから」

「でも……わたくしは、おいつけを守ることができませんでした」「いいつけたこと？ ああ、秘文書のことだね」

こともなげにそういつている男。それは彼にとつてはあまり意味がないということである。しかし、少女にとつてそれは気になって仕方がないことであるのだった。

「わたくしは、あれ持つてくることができませんでした」

「仕方なかったよ。あそこで彼が出てくるなんて思ってもいなかったんだから」

「マスター？」

どうしてそのことを知っているのだろうかという思いが少女の顔に浮かんでいる。それに対して、男は穏やかな表情を変えることなく話していた。

「これがあるからね。あそこであったことは全部わかってるよ」

玉座の傍らにある水鏡をさしながらそう言う男。そこに浮かぶ微笑は見るものを魅了する力があるのだろう。少女はうつとりとした顔で相手をみつめている。

「マスター。わたくしのことを怒っていらっしやいませんか？」

「誰が怒っていると思ったんだい、ジェリータ」

そう、この少女はグローリア王宮の宝物庫からシユルツの手で弾かれたジェリータだった。兄であるシユルツに弾き飛ばされた彼女は、今の居場所に戻るしかなかったのだ。もともと、彼女自身はそのことを当然と思っている。彼女が気にしているのは『目的を果たせなかった』それだけだった。

「本当に怒っていらっしやいませんか？ あの秘文書は必ず手に入るようにとおっしゃいましたのに」

「そのかわりにお前が怪我でもしたら大変だからね。お前がこうやって帰ってきてくれたことの方が嬉しいよ」

男のその言葉にジェリータはすっかり嬉しそうな顔をしている。

彼女は無能という烙印を押されることを恐れていたのだ。だが、それは彼女の杞憂に過ぎなかった。マスターは彼女が怪我をせずに帰ってきたことを喜んでいいる。そのことはジェリータにとっては何物にも代えがたいことであるのだった。

「マスター、そんなにわたくしのことを心配してくださいましたの？」

「当たり前だよ。お前は私の宝物なんだから。もっとも、それと言うと煩いのがいるけれどね」

「お兄様ですわね」

そう呟くとジェリータは表情を曇らせている。兄であるシウルツの思いを知っても、彼女はマスターのそばにいたいという思いがある。

「マスター、わたくしは本当に感謝しておりますわ」

「どうしたんだい。改まって」

「マスターはわたくしに自由をくださいましたわ。あの時、聖教皇に封じられたわたくしを助けてくださったのはマスターです。それなのに、お兄様は……」

「彼には彼の考えがあるんだよ。そのことは、わかってあげないからね」

「はい。それはわかっておりますわ。でも、この頃のお兄様をみているとわからないのですわ」

「考えの違いかな。彼がもう少しお前の気持ちをわかってくれるといいのにね。お前は仲間を守りたいだけなのにな」

「そうですね。わたくしは誰にも邪魔されずに暮らせる場所が欲しいだけです。それさえ手に入るのでしたら、人間に害を与える必要はありませんわ」

「お前は本当に可愛いね。こっちにおいで。そして、その顔をよく見せて」

男の言葉にジェリータは迷うことなく近づいている。そんな彼女

の頬に手をやり、その髪を指に絡ませている男。

「きいてもいいかい、ジェリータ」

「なんでしようか、マスター」

「お前は私とシルツが対立したとき、どうする？」

その質問に顔色を変えているジェリータ。それは、ありえない話ではない。しかし、たとえそうだったとしても彼女の中では結論はでている。ジェリータはうつむきかけた顔を上げると、まっすぐに相手の顔をみている。

「マスター、わたくしの答えは決まっておりますわ」

少し震えているような声。しかし、その言葉が途切れるということはない。

「わたくしはマスターに従います。それとも、それを信じてはいただけなのでしょうか」

そう言うジェリータの胸のうちは千路に乱れている。マスターは自分を必要ないものとみなしているのではないだろうか。そんな不安が胸をよぎっている。そして、彼女はその思いを押し隠すかのように懸命になっている。

「マスター、信じてくださいますか？ わたくしにはマスターだけが頼りなのです」

今にも泣き出しそうな顔になっているジェリータ。その彼女をスツと抱き寄せている相手。

「わかつているよ。お前を試すようなことを言って悪かったね。私はお前のことを信用しているんだよ。そうだろう。信用しているから秘文書のことを教えたんだよ。あれは、存在自体が隠されているもの。誰にでも教えられるものじゃない。それはわかるよね」

「わかつておりますわ、マスター」

彼の言葉に表情が明るくなっていくジェリータ。あふれかけた涙をぬぐうと精一杯の笑顔を浮かべている。

「そうだよ、お前のその顔がみたいんだ。いつみても美しいね」

そう言われて、思わず恥らうように目を伏せるジェリータ。その

彼女にかけられる優しい言葉。

「シウルツにグローリアから弾き飛ばされたんだ。疲れただろう。今日はゆっくりとお休み」

その言葉が合図となったかのように、ジェリータはその場を離れている。それを見送っている男の口元には冷笑が浮かんでいるようにもみえる。

「ゆっくりお休み、ジェリータ。お前は本当に可愛いよ。私の思ったおりに動いてくれる可愛いお人形だよ」

そう呟くと、彼はクツクと喉の奥で笑っている。それは先ほどまでジェリータに見せていたものとはまるで違う表情。しかし、冷酷ともいえそうなその表情はこの黒い空間にピッタリと似合っている。

「邪霊王様、ジェリータは？」

男は自分の背後から聞こえてきた女の声に、振り向くことなく答えている。

「今、帰ってきた。だが用心しろ。シウルツが接触してきた」

「あの方は本当に妹思いですから。でも、それは無駄な努力ですわ。ジェリータは王の人形にいるしか生きられないのに」

そう言いながら姿をみせた女。彼女の大きくウェーブのかかった黒髪と真っ黒な瞳。それはこの場の色彩にこれ以上はないほどに似合っている。そして、身にまとう黒のドレスは胸を大きく開き、太腿の半分近くまでスリットが入った大胆なもの。彼女をみると『妖艶』という言葉しか浮かんでこないだろう。彼女は自分が邪霊王と呼んだ男にしかだれかかるようにしているのだった。

「マレーネ、もう一つの人形はどこに行ったのかわかったか？」

「わかりましたわ。でも、厄介な場所」

そう。ジェリータがマスターと呼んでいたこの男が、シウルツのいていた邪霊王だったのだ。そして、ジェリータに見せていた顔が仮面だともいうように、今の彼はいきいきとした表情になっている。

「厄介？ どこだ」

「大神殿ですわ。聖水晶がここまで姿をみせないのは不思議だと思つて調べてきましたの」

「大神殿ということは、聖教皇が絡んだな。だが、あいつの好きにはさせ。あれは私が手にして左右に並べる人形なのだから」

邪霊王の言葉にマレーネはニヤリと笑っている。

「それは見応えがあることでしょう。ジェリータと聖王女。正反対の二人ですが、鏡に映したようにそっくりですからね」

そう言うとな彼女は自信ありげな表情で邪霊王をみているのだった。「わたくしにお任せくださいますか」

そう告げるマレーネの顔を不思議そうに見ている邪霊王。

「お前とて大神殿の結界は破れないだろう」

「聖王女を捜している者たちがおりますわ。その者たちに情報をやれば、喜んで動きますわ」

ニツコリと笑つてそう告げるマレーネ。その笑みはどこことなく毒を含んだものであるが、あまりにも彼女に似合っている。

「ハートヴィル侯爵令嬢。彼女は何があつても動きますわ。あの兄王子とは別の意味で彼女は聖王女が大切ですもの」

そう言つて笑い出すマレーネ。その高笑いはどこか狂つたものもあるようだが、邪霊王はそのことを気にもとめていないようだった。「お前のいう者なら、たしかに何とでもするだろう。そいつには神竜がついたからな。ただの老いぼれの竜だが、こういう時には役に立つ」

「では、わたくしは彼らに情報を。王には吉報を近日中にお届けいたしますわ」

マレーネは艶然とした笑みを浮かべ、そう言っているのだった。

〔八〕

グローリアの王都。そこには似合わない『うらぶれた』という表現が似合う場所。そこにはいつ建てられたのか誰も知らないような建物があるのだった。それはちよつと見た感じではお化け屋敷といつても過言ではない。しかし、生活している人物がいるのも間違いないことだった。

この場所にハートヴィル侯爵令嬢であるセシリアが出入りしているのは有名な話である。だからこそ、ここの住人は『お化け屋敷』という評判を気にする必要はない。もっとも、その人物自身がある意味での有名人であるのだからこの屋敷の風評は関係ないともいえるのだった。近隣の人々からは『占いのババ』、セシリアのように懇意にしている相手からは『グラン・マ』と呼ばれている相手。その占いのうでは確実であり、彼女が占えないことはまず無いと信頼もされている相手。その彼女は部屋の中で水晶玉をみながら、浮かない顔をしているのだった。

「この分だと、何かが起きるんだろうね……リアも帰ってきているんなら、こつちに顔を出せばいいのに……」

そう呟いた彼女は商売道具でもある水晶玉を大切そうにしまうと、ゆつくりと立ち上がった。彼女がここに住み始めてからどれくらいの時間がたっているのか。誰もそのことを知ってはいない。いつの間にか彼女はここに住み着き、偶然のことからセシリアという後ろ盾を手に入れたのだった。もっとも、彼女の占いの腕を疑うものなど王都にはいない。セシリアという保護者がいなくても彼女は十分に生きていけるだろう。それにもかかわらず、彼女は何くれとなくセシリアに気を配っているのだった。

そんな彼女の滅多に変えられることのない表情。それが今はどこか不安げな色を浮かべている。彼女は古いタンスの扉をあけると、中に入っているものを大切そうに取り出しているのだった。

「これを着ることになるとは思ってもいなかった……でも、そうしなきゃいけないようだ。もっとも、今のあたしがこれを着るのが相応しいかどうか、わかったものじゃないけどね」

その彼女の手にあるものは、どうみても巫女の装束でしかない。占い師である彼女がどうしてそれを持っているのか。その場に誰かがいればきくことも可能だったろう。しかし、そこにいるのは彼女だけである。そして、グラン・マは同じダンスの中に入っている箱の中からロザリオも取り出していた。

「創世神様、聖教皇様。再び、これを身につける日がくるとは思ってもおりませんでした。しかし、今はその時であると思います。あの時、惨めに生きながらえてしまった私ではあります。しかし、それもあなた様の思し召しでありましょう」

それは、セシリアや町の人々が知っているグラン・マの姿ではない。真摯に祈りを捧げる姿は、神々しささえ感じさせていた。

「これに相応しい自分であるとは思っておりません。しかし、お許しください。そして、私にすべてを語る勇気を与えてください。それこそが、この長い時を生かされた理由だと思っておりますから」

深々と頭を下げ、彼女は祈り続けている。

そんな時、外では人々が何かに驚いたように大声を張り上げているようだった。急いで窓に駆け寄り、外の様子をみた彼女は驚きの色を隠すことができなかった。

「……………」

思わず声をなくし、立ち尽くしている彼女。そして、何かを決めたような顔で巫女装束を身につけると首からロザリオをかけると、外へと飛び出しているのだった。

彼女が外で目にしたもの。それは、人がここまで暴力に訴えるのか、という光景でもあった。お互いの顔がわからないかのように罵りあう人々。店の扉や窓を破り、中の商品を根こそぎもっていく不埒な輩。そして、互いの意見を押し付けようとするかのように暴力に訴える人々。

それは、人間の弱さをさらけ出したあまりにも惨めな光景であつたのだらう。グラン・マは痛ましいものをみたかのように目を背けている。しかし、いつまでもそんなことをするわけにはいかないことも彼女にはわかっている。

「ばあさん、こんなところをうるちよろすんじゃないぞ。目障りなんだ！」

自分につつかかってくる相手の手首をグイツと握っているグラン・マ。その目に浮かんでいる光は巫女の装束には似合わない物騒なものともいえる。

「ばあさんはないだらう。それに、あたしにはあんたみたいな極道は身内にはいないよ」

「ばあさんだと思っていたら好きなこと言いやがって！」

そんな相手の手首をグラン・マは簡単に捻りあげている。

「ばあさん、やるじゃないか」

ニヤリ、と笑う男たちの視線に怯えるようなところはグラン・マからは感じることができない。彼女はどこか憐れみのこもった声で呟いているだけだった。

「まったく、人間はここまで墮落できるんだね。見限りたくなるって言う気持ちかわからないでもないんだがね」

「ばあさん、そういうあんただって人間じゃないか」

そう言う男たちは格拉格拉と笑い出している。それをみたグラン・マはため息をつくことしかできないようだった。

「好きに言っているがいいさ。あたしはこの先に用があるんだよ」
「そうはいかないって」

あくまでも彼女の邪魔をしようとする男たち。そんな相手をグラン・マは姿勢を低くしてやりすごすと膝を払っている。相手の勢いというものも利用したその効果は計り知れないだらう。無惨にも地面に叩きつけられた格好になって呻いている相手には目もくれず、グラン・マは進んでいるのだった。その姿はまるで何かに導かれているようにもみえる。そうやって先を急ぐ彼女の邪魔をする者はな

くならない。だが、そのすべてを適当にあしらいながら進んでいく姿。それは、どうみても老婆とはいえないものだった。

「創世神様。どうか、この者たちにご慈悲を。これも彼らのうちにある感情でしょうが、これが人間の本质ではないのです。あなた様の大いなる自愛の御心をおみせくださいませ。心より伏してお願いたします」

首から下げているロザリオを繰りながら祈りの言葉を捧げているグラン・マ。そうやって進んでいる彼女の目の前から人々の影がなくなっている。そのかわりのように立っている影。

「やっぱり、お前だったね」

その影が誰なのか、グラン・マにはよくわかっているのだろう。

思わず憎々しげな響きがその口からもれていた。

「それはこちらのセリフだわ。本当によく生きていたこと。てつきり、どこかで野垂れ死にしていると思っていたのに」

そう言うなり高笑いをする相手。ウェーブのきいた黒髪、黒い瞳、身体にピツタリとした黒のスリッドドレス。その相手はマレーネでしかありえない。彼女はグラン・マの顔をまっすぐにみたまま、これ以上の楽しみはないという表情も浮かべている。

「どんな気持ちかしら。狩る者が狩られる側になったんですものね。でも、その格好ってことはまだ諦めていないのかしら？」

そう言うなり、再び笑っているマレーネ。その彼女はグラン・マの後ろからやってきている人影に気がついてるのだろう。ますます楽しみが増えたという表情を浮かべている。

「いいところに来たわ。あなた方も真実を知るべきよ」

都は騒然とした空気に包まれている。しかし、それは王宮にまでは届いていない。だが、穏やかな朝の雰囲気というものを味わっていない人物がいるというのも間違いない。その一人であるウィアは、

不機嫌そうな顔色を隠そうとはしていなかった。一緒にいるカルロスはそのことに気がついていないが無視を決め込んでいる。それがますますウィアの苛立ちを助長するのだろう。彼はチラチラとカルロスの様子を伺っているのだった。

「ウィア、何か言いたいことでもあるのか」

「いえ、感心しているんですよ」

その一言はウィアの今の気持ちを代弁するもの。しかし、カルロスにはそれがわからないのだろう。彼はキョトンとしたような顔でウィアをみているのだった。

「言いたいことがあるなら、ハッキリ言え。俺が回りくどい喋り方が嫌いなのは知っているだろう」

「単なる直情馬鹿」

「何か言ったか」

この反応はいつもと同じだとウィアは思っている。しかし、彼が勘づいていることにカルロスは気がついていない可能性もある。いや、十中八九そうなのだろうという確信がウィアの中にはある。それを思った時、彼の口からは盛大なため息がもれているのだった。

「本当に、こんな直情馬鹿のどこがいいんでしょうかね」

「いつものお前らしくないぞ。何が言いたいんだ」

やるせなさしか感じさせないウィアの声にそう言っているカルロス。この調子では、ちゃんと言葉にしないとわからないのだろうと思うと、ますますため息は深くなるようだった。

「この頃のセシリア殿をどう思われます」

「セシリアか？」

何を言い出すのだというような顔でウィアをみているカルロス。そんな彼の様子に、ウィアは再び最大のため息でこたえていた。それをみたカルロスはわけがわからないという顔で叫んでいる。

「お前は何か言いたいんだ。そりゃ、この頃のあいつはちよつと変わったかとは思ってたがな」

カルロスの言葉にウィアは疲れた表情を浮かべている。そこには、

この人は何をみているのだと言いたげな表情が浮かんでいた。

「わからないんですか、本当に？」

この鈍感になんと言えはいいのだろうとウィアは思案していた。しかし、それを口にしようとした時、慌てたような声が聞こえてきたのだった。

「セシリア、セシリアはいるか！」

その声に聞き覚えのあるウィアは、ヒョイとその方をみている。するとそこには、すっかり慌てた顔のジャスティンがいるのだった。「どうかされましたか？」

「セシリアは？」

「こちらにはおられませんよ」

その言葉にチツと舌打ちをするジャスティン。そんな彼をウィアは興味深そうにみている。

「どのあたりにいられるか見当はつきます。ご案内しましょうか」それに慌ただしくうなずいているジャスティン。その頃、セシリアはミスティリーナと庭の一角にいたのだった。もともと、ミスティリーナの表情は先ほどのウィアに似ていなくもない。つまり、彼女も彼と同じような思いを抱いているのだった。

「リア、きいてもいい？」

ミスティリーナの声に何をきいてくるのだというような顔をしているセシリア。

「リアって、好きな人とかいないの？」

ミスティリーナは自分が社交辞令といわれる物が苦手なのをよくわかっている。そして、セシリアがそういうものに通じているのは間違いない。それならば、単刀直入に質問する方がいいと思っているのだった。そして、それは間違っていなかった。ミスティリーナの質問に見る間に顔を赤くし、ドギマギして言葉の出せないセシリアがそこにはいる。

「そんな人、いるはずないじゃない」

強がった様子でそう言うセシリアだが、それが本心であるとはミ

ステイリーナは思ってもいない。

「じゃあ、このままお姫様がみつかったもかまわないのね」

「どういうこと。まるで、私がアルデイスを捜すつもりがないみたいな言い方しないで」

ミステイリーナに詰め寄っているセシリア。そんな彼女の顔をじつとみているミステイリーナ。

「だって、あんたをみてたら気になるのよ。自分の気持ちを殺しているんじゃないの」

ミステイリーナのそれに、セシリアは俯きながらこたえるしかできないようだった。

「そんなことはないわ。私は……」

そう言いかけたセシリアの声がつまり、涙が浮かびかけている。それをみたミステイリーナはため息をついているのだった。

「自分の気持ちに正直になりなさいよ。あんたは恋をしてるって認めたくないの？」

「そんなことわからないわ。この気持ちのことをなんて言えばいいのか、私にもわからないもの」

セシリアの声にミステイリーナはお手上げというような表情を浮かべていた。

「だから、貴族のお嬢様ってなんにもわかってないっていうのよ」

ミステイリーナの言葉にセシリアが反論しようとした時、ウィアに案内された格好のジャステインが二人のそばに来たのだった。

「セシリア、こんなところにいたのか」

ジャステインの声にミステイリーナの質問に答えずにすむとホッとした表情を浮かべているセシリア。しかし、彼の顔色は普段とは違う。彼がこんなに慌てているところなどみたこともないのだ。

「ジャステイン、どうかしたの？」

確認するために発せられる声は緊張感のあるピンとしたもの。彼女はジャステインがあまりいい知らせをもってきていないと本能的に気付いているのだろう。

「信じられないんだがな」

「だから、何だっというの。あなたがそんな顔してるところ、みたこともないのよ！」

そう。いつもは人を食ったような印象のある彼が真剣な表情を浮かべている。そして、彼は舌で唇を湿らすようにすると、大きく息をはいていた。

「都が大変なんだ。みんな、何かに操られたみたいに暴れまくっている。このままだと都は無茶苦茶になるぞ」

「都が？ わかったわ。リーナも手伝って」

「当然。アンデッドが絡んでいるなら大変だし」

「それなら私も。除霊はできませんが、役に立てることもあるでしょう」

『そうじゃのう。儂も行くからの。何かあれば被ってやろう』

ウィアの声にかぶさるように聞こえる神竜の声にセシリアとミスティリーナも脱力感を覚えている。しかし、今はそのことをとやかく言えない。セシリアたちは城下に入っているのだった。

しかし、そこはいつもの活気に満ちた町ではない。怒号と暴力がその場を支配している。荒々しい怒鳴り声、ものがぶつかり壊れる音。そして、女子供の泣き叫ぶ声。

「どうなっているの……」

思った以上に荒廃している町の様子にセシリアは呆然としてしまっている。

「リア、ボツとしていたら危ないわよ」

「ウィア、こいつらを操っている奴は？」

ミスティリーナの注意を促す声とカルロスがウィアに問いかける声。それらが町に渦巻いている阿鼻叫喚と混じりあっている。

「どっちにいけないのよ」

ちやっかりとウィアの服の中を居場所に決めた神竜にたずねているミスティリーナ。この場合は神竜が一番当てになると判断したのだった。そして、それは間違いではない。

『こちらじゃの。ついてくるがいい』

そう言うなりウィアに方向を指し示す神竜。それに遅れないようについていくセシリアたち。

彼女たちが進む道にも暴徒はいるが、それをミステイリーナは手当たり次第に投げ飛ばしている。

「リーナ、魔法を使つた方が早くない？」

「ダメ。操られているだけだもん。魔法は楽だけと殺しかねない」

ミステイリーナの返事に押し黙っているセシリア。そして、彼女とカルロスは剣を鞘から抜くことなく、かかってくる相手を打ちのめしている。

そんな中、まるで導かれでもするかのようにセシリアたちは都の中心ともいえる広場に近付いていた。そして、その場はまるで台風の目のように静まり返り、二人の人影が対峙しているだけのようだった。

「あの二人のうちのどちらかなの？」

人影に気がついたミステイリーナがそう言っている。

『そうじゃのう。じゃが、一人は巫女のようなう』

相変わらず緊張感を削ぐような神竜の声だが、言っていることは重大ともいえること。それがわかつている一同は、その場で足を止めているのだった。

「じゃあ、あたしたちの味方なの？」

安心したようにミステイリーナは呟いているが、セシリアは自分たちの方をみている相手の顔にすっかり驚いていた。

「お、お前は……」

セシリアのその声が聞こえたのだろう。相手は彼女たちをみるとニヤリと笑ったようだった。

「ここでお目にかかれて本当によかったですわ」

「お前はたしか……」

記憶の中にある雰囲気とはまるで違う。それでも、この容姿にあてはまる相手をセシリアは一人しか知らない。

「マレーネ。そうよね、間違いないわね」

呟くようなセシリアの声を間違いない聞き取ったのだろう。相手は極上の笑顔を浮かべている。

「わかってくださいましたのね。ええ、わたくしはマレーネですわ」
その声が聞こえたのだろう。ウィアの服の中にいた神竜が首を出している。神竜はマレーネの姿を認めると、啞然としたようだった。

『お主はマレーネ！ どうして、お主がここにいるのじゃ！』

「その声は神竜ですわね。本当にお久し振りですこと。でも、そのお姿も可愛いものですわね」

どうみても、白蛇にしかみえない神竜を見てクスクス笑っているマレーネ。そして、彼女の言葉に振り向いた巫女の姿をみた時、セシリアは言葉をなくしているのだった。

「グラン・マ！ グラン・マは巫女でしたの？」

「そいつは巫女だけれど巫女じゃないのよ」

セシリアの声にこたえられないグラン・マにかわるかのように、マレーネが勝ち誇ってそう言っている。

「どうして」

セシリアの呟きに答えるものはない。そして、グラン・マは神竜の姿をみるとどこか安心したような表情を浮かべているのだった。しかし、神竜の方はそうではないようだった。蛇であるために表情をうかがうことはできない。それでも、驚いているような気配は感じることができる。

『お主、シンシアじゃのう。聖戦の折に姿がみえなくなったという報告を受けて、死んだものと思っておったのじゃが。どうして、ここにおるといふのじゃ』

「簡単よ。その巫女はあの時、盟主様の洗礼をうけたわ。つまり、わたくしたちの仲間というわけ」

マレーネの言葉にグラン・マは何も言うことができないようである。まるで黙っていることが彼女にできる唯一のことだといっているようにもみえる態度。

「つまり、あんたはあたしたちを騙していたわけ？ あんたは占い師じゃなくて、アンデッドの仲間だったわけだ。だから、ルディアであたしたちを襲うことができたんだ」

グラン・マが何も言おうとしないことに苛立ったミスティリーナがそう決め付けるように言っている。しかし、そこまで言われてもグラン・マは黙ったままにいる。

『シンシア、お主はどうなのじゃ。その姿でいるということは、巫女を捨てたわけではないのじゃろう』

神竜のその言葉に、ようやくグラン・マは顔を上げている。今まで生きてきたことは、彼女にとって苦痛以外の何物でもなかったのだろう。それを語るかのように刻まれている深い皺。

「私もこのように長い時を生きなければならぬとは思ってもおりませんでした」

グラン・マの喋り方はいつもの彼女とは違う。そのことに不思議な感覚を覚えたセシリアが何かを言おうとした時、マレーネの声がそれをさえぎっていた。

「わたくし、あまり時間がないのよ。楽しませてくれるのはありがたいけど、遊んではかりだと用事が終わらないわ」

「どうして、アンデッドの仲間がアルデイス様のお世話をすることができたの」

これだけは確かめておかねばいけないと思っているセシリアはマレーネを睨みながらそう言っている。そんな彼女に楽しげな表情を浮かべているマレーネ。

「そんなのいくらかでも方法はあるわ」

そう言い切って微笑むマレーネ。その微笑は清楚であり妖艶。二つの相反する要素でありながら、それが違和感をもつことがない。

『なんといつてもこの女は妖花ともいわれておった女じゃ。ただの人間なら、たらしこんでしまうくらいいけないことじゃ』

「ずいぶん言い方ですわね。でも、それはその方の責任でもありますわ。そうそう、わたくしセシリア様に御用がありましたのよ」

「今さら何を言い出すの」

自分たちと敵対する立場にあると公言しているようなマレーネ。それにも関わらず、まだ用があるのかとセシリアは不信感を抱いている。

「わたくしはセシリア様のお役にたとと申しているんですよ」

「だったらさつさとおっしゃい。私もあなたの相手ばかりしていたくないのよ」

苛々した表情でそう言っているセシリア。そんな彼女の様子をいかにも楽しんでいたマレーネだが、そろそろ潮時だと思ったのだろう。彼女は舌なめずりをするといかにも重大なことを告げるような顔をしている。

「いいことを教えて差し上げますわ。セシリア様がお捜しの聖王女はフェーベの大神殿におりましてよ」

マレーネのその言葉に誰も声を出すことができない。それくらい、その場所は信じられない場所でもあるのだった。『平和の象徴』ともいわれる場所。そんなところにアルデイスがいるのなら、どうして連絡をくれないのだろうというセシリアの疑問。しかし、それでも解消するつもりはマレーネにはさらさらなかった。彼女は自分の仕事は終わったとばかりにその場から姿を消そうとしている。

「待ちなさいよ。どうして、あんたはそんなことを教えてくれるのよ」

ミステイリーナの怒鳴り声も彼女には効果はないようだった。薄笑いを浮かべながらその場を去ろうとしている。そんなマレーネにグラン・マが静かに声をかけているのだった。

「こいつが教えるのは当然だよ。こいつらは大神殿には入れないからね」

グラン・マの言葉をきいたとたん、マレーネの態度が変わっている。それまでの自信に満ちたものが焦りに変わっているかのようでもあった。

「あなたと甘くみていたわね、シンシア」

「お前たちの考えていることを理解するくらいの時間は生きているよ。それはあたしが自分から望んだものじゃなかったけどね」

グラン・マのその言葉を馬鹿にしたような表情できいているマレーネ。理由はどうあれ、お前は長寿を得たのだろうといわんばかりの色が浮かんでいる。

「これ以上、ここにいても無駄ね。セシリア様、わたくしの言ったことは嘘ではありませんわよ。聖王女は大神殿、聖水晶の結界の中におられますわ。もっとも、そこから彼女を解放できるかはわかりませんけれどもね」

そう言うなり、その場から姿を消しているマレーネ。彼女が消えた後には荒廃した都と暴れまわる人々だけが残されているともいえるのだった。それをみてため息をついているウィアと神竜。

「ここまでですと浄化が必要ですね」

『そうじゃのう。ここまで人心を操られておつてはな』

そう言った神竜は何かに気がついたようにじっとグラン・マの顔をみている。そのグラン・マは静かに神竜に語りかけている。

「神竜様、私のことでしたらご心配にはおよびません。それが私の望みでもありますから」

『シンシア、お主はそれでもかまわぬのか』

その声と態度は蛇のままの姿であっても神竜は神竜だと思わせるような威厳がある。そんな中、ミステリーナは気になることがあったのか、真剣な顔で神竜をみつめている。

「都がアンデッドに蹂躪されないために浄化しないといけないのはわかる。でも、あたしにはそれをするのをためらっているようにもみえる。でも、浄化はしなきゃいけないことなんでしょう」

「神竜様、気になさらずにやってください。そうしないとこの都は滅茶苦茶になってしまいます」

「グラン・マ、浄化っていうのはアンデットたちの気を正常なものに戻すことよね。そうになると、ヴァンパイアの洗礼を受けたってい

「うあなたはどうなるの」

グラン・マに問いかけるセシリアの声は震えている。彼女はグラン・マがどうなるのかということにうすうす気がついてしまったのだった。そのことを否定して欲しいと願うセシリア。しかし、その望みはかなえられるものではない。

「リア、あたしの存在もたしかになくなってしまふ。でも、それでもいいんだ。あたしは長いこと生きてきた。そろそろ楽にさせてくれないかい」

「グラン・マ、それがあなたの望みであつたとしても、私は納得いかないわ」

思いつめたようなセシリアの声。そんな彼女を諭すようなグラン・マの声が響いている。

「あたしは十分に生きてきた。たくさんのもも見だし、いろいろと楽しみもした。でも、この身体は自分から死ぬことはできないんだよ」

彼女のその言葉にセシリアのみならずミステリーナもハツとなっている。ヴァンパイアの洗礼をうけたグラン・マが彼らと同じように『不老不死』になっているのは間違いないのだろう。そうなる、自分から死を選ぶということができないのも道理というもの。

「リア、あたしからあんに最後の助言をあげようね」

グラン・マのその言葉に思わず目をつぶってしまうセシリア。そんな彼女を見ながら、グラン・マは優しい声で話し続けている。

「あんたの思い。それがすべての鍵になるよ。聖王女は聖水晶の中で眠っている。その彼女を目覚めさせるんだよ。彼女を大事に思う気持ちの強い者の呼びかけは必ず聞こえるからね。そして、目覚めさえすれば大丈夫。聖水晶は自然にその姿を消すからね」

グラン・マのその言葉にセシリアはコクリとうなずいている。それを確かめた彼女は真剣な顔で神竜に向き直っているのだった。

「神竜様、お願いいたします。この地の浄化と私の解放を！」

その言葉に神竜は本来の竜の姿に戻っている。もう一度たしかめ

るようにグラン・マの顔をみた神竜はおもむろに大きく息を吐いていた。

あたりに響く地響きともなんともいえぬもの。それだけではなく、柔らかな七色の光が都を覆いつくそうとしている。その光は滅こそ持っていないが、眩しく目を開けていることができなかった。

そして――。

『終わったぞ』

神の託宣を告げるかのような重々しい神竜の声。そして、目を開けた一同の前にグラン・マの姿は残されていなかった。ただ、彼女が着ていた巫女の装束とロザリオが残されているだけ。そのロザリオを拾い上げたセシリアの瞳からは涙がとめどなく零れ落ちている。

『これがシンシアの望みじゃった』

神竜のその言葉もセシリアの耳には入っていない。それでも、彼女は自分が前に進まなければいけないことを感じているのだった。

〔九〕

高い天井に響く祈りと讃美の声。太い柱が支えるアーチ状の天井。そのいたるところに描かれている神の栄光と創世の神話。供物を捧げる煙。回廊のあちらこちらをゆったりと歩いている神官。ロザリオを繰りながら祈りを捧げている巫女。そこは祈りの場であり、信仰の中心地。東の宗教国家と呼ばれるフェーベの大神殿だった。

そして、その大神殿の奥深くに創世神の代理人といわれる聖教皇の暮らす場所があった。聖教皇という宗教界の最高権威者の暮らす場所は、王候貴族のそれとは変わらぬ華やかな部分も持っていた。飾られている見事な絵画、どっしりとしたドレープのカーテン、細かな細工の施された家具。どれもが見事なものばかりである。そんな中、聖教皇ベネディクトゥス8世は難しい顔をして、一通の書状に目を通してのだった。

「聖教皇様、いかがなさいましたか」

「心配するな。少々、厄介な書状を目にしたただけだ」

「厄介な？ 本日はそのようなものはなかったと思いましたが」

聖教皇に届けられる書状の数は少なくはない。そのすべての差出人をチェックするのが役目でもある司祭は不思議そうな顔をしている。

「それはグローリアの国王陛下からの書状でしたね」

聖教皇の持っている書状をみた司祭はそう言っていた。グローリアという国は穏やかで創世神への信仰も篤い国である。その国王の書状が厄介だという意味が司祭にはわかっていなかった。

「厄介とはどういう意味で？ よろしければ、おきかせ願えませんか
でしょうか」

その言葉に聖教皇は読んでいた書状を司祭に渡していた。

「近々、国王の名代が来るそうだ」

聖教皇の言葉に司祭はいつものことだろうという顔をしている。

その彼は聖教皇の次の言葉に絶句してしまっていた。

「グローリアは聖水晶について知りたいと言ってきたのだぞ」

その声に司祭は返事をする事ができない。そんな相手をさらに驚かせることを聖教皇は口に行っているのだった。

「実は聖水晶はここにあるのだ」

「しかし、聖教皇様。聖水晶というのは……」

さすがにそれ以上のことを口にするのはできなかったのだろう。

思わず、聖教皇を非難するような視線を浮かべている。

「聖水晶というものがどのようなものかはわかっているだろう」

「それはそうでございますが……」

聖教皇に詰め寄せられた司祭はしどろもどろになっていた。聖水晶というものがその術者を封じるものだということは知っている。そして、大神殿にはそれ以外にも秘密にしている事実というものがあるのだった。

大神殿というよりは聖教皇個人に伝えられている秘文書。それには、歴史では語られることのない話が綴られている。聖教皇に倒されたとなっているアンデッドの盟主が実は封じられただけということ。そして、その盟主の影に隠れていた創世神とは対極をなす存在そして、何よりも秘すべきことは、封じられた者の魂が転生を繰り返しているということ。

「聖教皇様はアルデイス姫のことを気にかけておいででしたが、その理由は？」

司祭の問いかけに聖教皇はため息をつきながらこたえていた。

「アルデイス姫は聖歴千年銀の月、一日の生まれだ」

「それは存じておりますが、それが何か？」

聖教皇が何を言いたいのか。司祭は聞き逃すことでわからなくなつてはいけなさと必死の形相で耳を傾けていた。

「聖歴は聖戦が終了した年から始まっているのは知っているな」

「それはもう。そのようなことは三歳の子供でも知っていること」

「そうだな。そして、聖戦が終結して千年という節目ともいう年に

生をつけたのがあの姫だ」

「そうは申されますが、銀の月一日に生まれた者は他にもおりましよう」

どうして、アルデイス姫だけを特別扱いするのかと司祭は不思議そうな顔をしている。そんな相手に聖教皇は歴史の闇に隠された事実を語っている。

「お前は どうしてグローリア王国があそこまでの繁栄を誇っているかわかるか」

聖教皇の言葉に首をかしげている司祭。なぜ急にこのようなことを聖教皇が言い出すのかわけがわからなかったのだ。

「あの王国は創世神様と神竜様の結界で守られているのだよ」

「そのようなことがございましたか。不勉強なもので、気がつきませんでした」

「隠された結界だからな。その理由がわかるか？」

聖教皇の言葉の意味がますますわからなくなっているのだろう。

司祭が浮かべている表情からは困惑したという思いしか感じられない。

「かつての聖戦で封じられたアンデッドの盟主。その魂はあの王家の中で転生を繰り返していたのだ」

思いもよらぬ聖教皇の言葉。それを耳にした司祭は信じられないという顔をしている。しかし、聖教皇はこれこそが真実だといわんばかりの顔をしているのだった。

「聖教皇様、お言葉を疑うわけではありません。では、あの姫君を大神殿におつしやっておられたのはそのせいもあつたためですか？」

「そうだ。そこに予言めたことが記してあるだろう」

そう言つて聖教皇は一冊の古文書を開いていた。古ぼけたという言葉がぴったりのそれは迂闊にふれるとボロボロになりそうだった。それを細心の注意をはらいながら、司祭はページを捲っているのだった。

「ここでしょうか。『時巡り、再び目覚める宝玉。そして、二つは一つとなる』でございますか？ 時巡り、とは転生のことでしょうが、二つは一つ？ 意味があるようなないような言葉でございますね」

「神が告げる予言とはそういうものだ。それよりも、アルデイス姫の容姿は伝えられているアンデッドの盟主と瓜二つ。彼女が転生を果たしたものだと思えることに無理があるか」

聖教皇の問いかけに司祭は考え込んでいるようだった。やがて、彼の口から出た言葉は聖教皇の言葉を肯定するものともいえるのだった。

「いえ、それでしたら納得もできましょう。しかし、そうなりますとアンデッドたちはその聖水晶を手に入れようと必死になりますでしょう」

「そうはいつでも、大神殿の結界がある。心配することはない。それよりも後で見るといい。見事としかいいようのないものだぞ」
そう言うなり笑い出している聖教皇。その姿をみて、どこか恐ろしいものを感じている司祭。なぜならば、今の聖教皇の姿は彼が知っているそれとはまるで違うのである。『何かにとりつかれている』
それが一番ピッタリの表現だろう。温和で平和を願う聖教皇の顔とはまるで違う姿がそこにはある。

「聖教皇様、どうかなされましたか」

自分たちが敬愛する聖教皇。その彼の様子が変わっていることに驚きながらも、たずねることしかできない。

「創世神様は、聖水晶を我らに委ねられた。アルデイス姫が解放される日がくることはない」

「どうなされたのですか。そのお姿はまるで何かにとりつかれてもしたかのような……」

「そなたの言いたいことはわかっている。だがな、これをみればわかる。これを側におきたいと思うのは人間の性というものだろう」

そう言うなり聖教皇は部屋の奥にかけられていた幕をさっと引い

ている。そこに隠されていたものがあらわれた時、司祭は思わず己の目を疑ってもいるのだった。

「これが聖水晶なのですか……」

司祭の声は震え、うわずっている。しかし、それも仕方のないことだろう。隠されていたものはどうみても水晶ではない。だが、その中に穏やかな表情で眠っているように見える少女がいる。見る者に守りたいと思わせてしまうような可憐な姿。

「これがアルデイス姫ですか……」

「そうだよ。これを手元においておきたいとは思わないかい？」

「思います。これを手放すなど考えることもできません。それに、アンデッドが狙っていることがわかっていのに安全だとわかっている大神殿の結界から出すなどということがどれほど無謀なことか」
呟くような司祭の言葉。そして、それを満足そうに聞いている聖
教皇。

「わかってくれたね。それにアルデイス姫は聖王女と呼ばれている。彼女が大神殿の象徴となるのは不思議なことではないからね」

「では、グローリアからの使者の用向きは私が承っておきましょう。何も最初から聖教皇様がお会いになる必要もございません」

司祭のその言葉に聖教皇はうなずいている。そして、それを見た司祭はその場から静かに去っているのだった。残された聖教皇は水晶の中に己を封じ込めたアルデイスの姿から目を離すことができないようだった。まるで魅せられたかのように彼女の姿を飽きることなくみつめている姿があるのだった。

聖教皇と司祭の間でそのような会話が交わされていた頃。グローリア王都の片付けもそこにセシリアたちは大神殿へとやってきていた。その知らせを受けた司祭は思ったよりも早く彼女たちが到着したことにビックリしていた。しかし、そのようなことを周囲に感じさせない態度で、彼はセシリアたちと会うことを取り次いだ神官に告げているのだった。

「大変、お待たせいたしました」

「いえ、そのようなことはございません。それよりも、国王陛下からの書状は届いておりますでしょうか」

それがわからなければ話を進めることができないということを知っているセシリアはそうたずねている。そして、彼女の問いかけに司祭は隠すことはない、あっさり答えているのだった。

「そちらの陛下からの書状は聖教皇様の手に届いております。後ほど会見のためのお時間もとらせていただきます」

危惧していたことがすなりと片付いたと思ったセシリアは安堵の息をもらしている。そんな彼女と一緒にいるカルロスに気がついた司祭は、わからないようにソツとため息をついているのだった。この場合はこちらから口火を切った方がいいだろうと判断した司祭は、慇懃な態度を崩そうとせず穏やかな口調でたずねているのだった。

「それはそうと、令嬢とご一緒なのは、ヴェネーレの王子殿下ではありませんか？」

司祭の言葉に『余計なことを言う』といわんばかりの顔のカルロス。その彼を牽制するかのようにウィアが脇腹を小突いていた。そして、そのカルロスはそんなことをしていたとは感じさせない様子で司祭に向いているのだった。

「たしかにそうですが、今回は個人的にということで行かせていただいていますので。ですから、仰々しくお考えになりませんように。あくまでも、カルロスという一個人という立場です」

にこやかな顔でそう言っているカルロス。しかし、彼の本意がそうではないのはセシリアたちにはよくわかつている。それでも、それを口にしないのは大袈裟にするのが得策ではないとわかっているからだったろう。そんな一行の顔をみながら、司祭も態度を変えることなく話している。

「それでは、しばらくお待ちください。聖教皇様はまもなくこちらにおみえになられます」

そう告げると、司祭は静かにその場から去っている。その姿によやくセシリアたちは息を大きくついているのだった。

「なんだか威圧的だったわね」

思わずセシリアはそう言っている。今までこのような場に出たことがないわけではない彼女がそう思ったのだ。ミステイリーナもそう思っているのは間違いないらしく、彼女は思いっきり背中を伸ばしているのだった。

「ああいう威張りくさる相手って一番、会いたくないタイプね」

うんざりしたような表情のミステイリーナ。そんな彼女をなだめるような様子のウイア。

「ここは神殿の総本山である大神殿ですからね。しかし、よく大人しくされていましたね」

彼のその声はミステイリーナをなだめているのか、カルロスの辛抱を感じているのかわからない。そんな彼をみながら、カルロスは平然とした顔でこたえている。

「ここで神殿と喧嘩しても仕方がないだろう」

「よくわかっていらっしやるようで」

カルロスに対して、いつものように辛辣な言葉のウイア。しかし、それが一同の気持ちを和らげているのは間違いなかった。

「ここまで勝手に動いたというのが親父にバレたら嫌いからな」

「でしょうね。もし、ヴェネーレの王子としてここに来ておられたら、勘当は間違いなしでしょうからね」

「お前、ここでまでそれを言うのか？」

あまりにもいつもと同じ様子のウイアに呆れ返っているカルロス。しかし、ウイア自身には気にする様子など感じられない。彼にしてみれば大神殿はあくまでも信仰の中心地。神は敬意をはらう存在ではあっても、それ以上ではないといっているような態度だった。

「私はこんな威圧的なものが嫌いなんです。だからといって、神を信じていないわけではないですよ。私の使う魔法は創世神の力の一部でもあるでしょうから」

『ほう。お主、若いのによくみえておるの。これは、創世神は偉大じゃと人々に思わせるために作られたもの。本来、このようなもの

は必要ないのじゃ」

ウィアの服の中から顔を出した神竜はそう言っている。その言葉に不思議そうな顔をしているミステリーナ。その彼女にゆっくりと教えるように喋っている神竜。

『こんなものがなくても、創世神が身近にあることは感じられるかな。それよりも、そろそろかのう』

「どうかしたの？」

神竜の言葉に首をかしげているセシリア。そんな彼女に返事をしようとしていた神竜だが、何かを感じたようにウィアの服の中に潜り込んでいるのだった。

「ちよつと待ちなさいよ！」

神竜が逃げようとしていると感じたミステリーナ。そして、彼女がウィアに詰め寄ろうとした時、部屋の扉がゆっくりと開いているのだった。

そこに入ってきた相手はゆったりとしたローブをまとった穏やかな表情を浮かべた人物。その相手はその様子に似合った落ち着いた調子でセシリアに声をかけているのだった。

「ハートヴィル侯爵令嬢、お待たせいたしました」

「お初にお目にかかります。猊下におかれましてはお健やかなこととお喜び申し上げます」

深々と頭を下げ、挨拶をするセシリア。そんな彼女をミステリーナは感心したような顔でみている。

「やつぱり、リアってお嬢様なのね。平気でこんなことができるんだもの」

「ですね。さすがは侯爵令嬢というところでしょうか」

「それだけ必死なんでしょう？ それよりも、そっちの王子様は大人身しくしてられるの？」

「してもらわないと困ります」

キッパリと言い切るウィアの様子にミステリーナはうなずいている。もっとも、セシリアもカルロスもそんな会話が交わされてい

ることを気にもしていない。二人とも聖教皇だけをじつとみている。
「猊下、国王陛下よりの書状はご覧くださいましたでしょうか」

丁重だが、簡単な挨拶をすませたセシリアは単刀直入にそう言っている。彼女の後ろにいるカルロスはどうな返事が返ってくるかと固唾をのんでいる。そんな二人に聖教皇は穏やかな表情を崩すことなく、ゆっくりとこたえている。

「拝見いたしました。しかし、おかしなことをおたずねでしたね」
「おかしなこと？」

聖教皇の言葉に反応しているセシリア。彼はそんな彼女の様子を面白がるようにしている。

「そうですよ。聖水晶についてお知りになりたいようですが、『お答えできません』としか申し上げられません」

「どうしてですか」

思わず、語気を荒げているセシリア。そして、彼女の後ろから何か言いたそうにしているカルロスを必死で押さえ付けているウィア。
「どうして、お答えいただけませんか」

「聖水晶は大神殿にとって、神聖不可侵な部分に関わっています。

国王陛下の書状だけで簡単に教えられることはありません」

そう言って、穏やかな笑みを浮かべている聖教皇。その顔には、会見はこれで終了だと言わんばかりの色が漂っている。

「これ以上、お話することもないでしょう。時間は無駄にするものではありません」
「聖教皇様！」

彼が何も話すことはない、という態度を貫き通すつもりだとセシリアは気がついていていた。どうすれば、聖教皇から何らかの返事を手に入れることができるかとセシリアは考えている。しかし、聖教皇はこれ以上は何も話すつもりもない。それを物語るように彼はその場から立ち去ろうとしている。

「侯爵令嬢。これ以上の話し合いは意味がないものだということはおわかりでしょう」

聖教皇の言葉にセシリアは何も言うことができないようだった。

そんな彼女に追い討ちをかけるような聖教皇の言葉。

「今すぐ帰るようには申しません。そちらの事情もわからないではないことですから。あなたの気持ちがおさまるまで、ここにいらっしやればいい」

それは聖教皇との会見終了の合図。セシリアは激昂したくなるのをジッと堪えているようである。そして、聖教皇がその場を離れたとたん、セシリアは自分の思いをぶちまけていた。

「納得いかないわ。あんな言い方されたくもない」

「リ、リア。落ち着いてよね」

普段であればセシリアがこう言っているのに、という思いがミステイリーナはある。しかし、セシリアの気持ちが変わらないでもないため、彼女の言葉には力がない。

「セシリア、あれは何か隠しているな」

それまで黙っていたカルロスがポツリと言っている。彼も悔しい思いをしているはずなのに、その感情を露にすることがない。そんな彼をセシリアはじっとみていることしかできないようだった。そんな時、ウィアの服の間から思い出したように神竜が顔を出していた。

『ちよつと待つておれ。聖王女の気配がないか、探つてやろう』

今まで顔を出すことのなかった神竜の姿をみたミステイリーナは、嫌味の一つや二つ言つてもバチは当たらないだろうと思つていた。

「あんたが出てきていたら、話は別になつてたんじゃないの」

『そ、そうじゃろつかのお』

「あんたは神竜とか言つてたじゃない。それくらいのことできるでしょうが」

ミステイリーナの言葉に神竜はたじたじになっている。

『それはそうかもしれんがの』

すっかり意気消沈している神竜だが、カルロスは遠慮など考えていないようだった。

「だったら、早く捜すんだな。そうしないと、本当にたたき斬るぞ」
『まったく……年寄りには敬うものじゃ。ん、微かじゃが、聖王女の気配があるの』

「本当なの？」

セシリアの声には喜びと不安が入り交じっているようだった。神竜はそんな彼女を導くように、ウィアの懷から案内している。

『ここじゃのう』

相変わらず緊張感のかけらもない神竜の声。しかし、その声で立ち止まった扉の前には司祭が立ちふさがるようにしている。

「ここまでおいでになるとは、どういうおつもりですか」

神竜の声が聞こえていなかった司祭のとがめる声。それを無視するようにセシリアは扉に手をかけていた。

「文句があるのなら後でいくらでもきくわ」

そう叫ぶなりセシリアは部屋の扉を押し開いていた。そして、その部屋の中には聖水晶に魅入られたようになってる聖教皇の姿があるのだった。

「……………」

聖水晶を前に何も言うことのできないセシリア。そんな彼女を押し退けるようにしているカルロス。

「アルデイス！」

セシリアが呼び掛ける前にためらうことのないカルロスの声が響いている。その瞬間、聖水晶の中のアルデイスの様子が明らかに変わっていた。閉じられていた瞳が開かれ、一人の相手をみつめている。そして、彼女を守るように輝いていた聖水晶はその姿を消している。残っているのは金の髪と青い瞳の少女だけ。

「カルロス様……」

鈴を転がすような声が響いている。彼女は自分を迎えてくれるように広げられている腕に飛び込むようにしているのだった。

一方、セシリアはその様子をただみているだけともいえるのだった。捜し続けていたアルデイスがみつかったことは喜ばしいことでは

あるのに、どこか晴れやかでない表情が彼女には浮かんではいるのだ。そんなセシリアの顔をみたミステイリーナは誰にもわからないようにソツとため息をついている。そして、セシリアはまずは聖教皇の言い分を聞かなければいけないと思ったようだった。彼女は聖水晶からアルデイスが解放されたことにうるたえたような聖教皇に遠慮のない追及の手を向けているのだった。

「聖教皇様、アルデイス様がこちらにおられた説明を。きちんとした説明がなければ、聖教皇様はアルデイス様を拉致したと評判がたつてもいたしかたございせんわね」

「そなたの言い様は私をひいては大神殿をも脅しているものときこえるのだが」

セシリアの言葉にたじろぎながらも聖教皇はそう言っている。その姿に舌打ちをしてはいても、彼女は敬うという姿を捨ててはいない。それは創世神は神聖なものだという思いが彼女の中にあるからでもある。それに気がついていいる聖教皇は自己弁護ととれる言葉を連ねている。

「ここにいたからこそ、姫君は無事だったのだぞ」

「それでしたら、どうしてご連絡をくださいませんでしたか」

セシリアの言葉には聖教皇以外のすべては納得している。しかし、唯一できない相手は自己弁護を続けているのだった。

「この結界があればこそ無事であったのだぞ。姫君を手にしうという不屈き者がおらぬとは言えぬだろう」

「何も教えられぬとおっしゃったことで、聖教皇様のその不屈き者にいれさせていただきますわ」

セシリアの言葉に目を白黒させている聖教皇。しかし、簡単に引き下がる相手ではない。彼は、どこか反論できるところがあるだろうといわんばかりの態度をとってもいた。

「そう言うが、この結界が最大の守護になるのはわかっているだろう。ならば、先ほどの言葉はなかったことに……」

『愚か者。これ以上、恥をさらすな』

あまりにも自己弁護ともとれる言葉を重ねる聖教皇の態度に苛ついた神竜がその姿を露にしていた。おもむろにウィアの服から出た神竜は本来の姿になると聖教皇を一喝していた。思いもしなかった神竜の出現にそれまでとは一変し、神竜の前にぬかずいている聖教皇。

「おいでになつているとは思つてもありませんでした」

『見えるものしか信じぬ、というのは創世神の代理人に相応しくないの。それはそうと、聖王女を隠しておつた理由は』

罪を断罪するような神竜の声。それでも聖教皇の態度は変わってはいなかった。彼は何とかして言い抜けることはできないかと考えているようだった。

「隠した、というのは心外でございます。私は彼女を保護したのです」

『じゃが、それだけではないじゃろう。儂らが入つた時のそなたの目はただの男じゃつたぞ』

「それでは私がただの女好きに聞こえるではありませんか」

神竜の言葉に思わず反応した聖教皇。しかし、セシリアたちもそう思っていたのだらう。彼をみる視線は冷ややかとしか言い様がない。

『そなたのしたことはそうしかとれぬな』

「このことを知れば、誰もがそう思いましよう。聖教皇様は女好きで無抵抗の少女を無理矢理に手に入れようとしたとは言われたくありませんでしょう」

「そなたは私を脅かすのか」

セシリアの言葉に聖教皇は慌てふためいている。

「なさっていることはただのエロ親父です。否定なさいますか」

『できぬじやろうな。否定しても誰も信用せぬ』

神竜とセシリアの言葉に聖教皇はどうすることもできずにうなずくしかないようだった。

半ば脅されてはあるが、聖王女たるアルデイスが大神殿にいたと

いう聖教皇の言葉でその場は大騒ぎになってしまっていた。彼女を歓待するための席が設けられ、世話をするための巫女が手配される。そんなこんなで、時間は慌ただしく過ぎていくのだった。

そして、そんな騒動も一段落ついた頃。来客用の客殿のテラスに出ている影があった。空には大きな月が浮かんでいる。

「綺麗……」

「お前の方がよほど綺麗だ」

よもや返事があるとは思っていなかったのに声が返ってくる。それに驚いて振り向くと、テラスの柱にもたれるようにしているカルロスをみつけているのだった。

「カルロス様……」

「アルデイス。お前をみつけることができ、本当によかった」

その言葉に頬を染めながら下を向いてしまうアルデイス。そんな彼女を優しいまなざしでみているカルロス。その時、彼はポケットの中で動くものがあることに気がついていた。それが何か思い出した彼はそれを彼女にみせている。

「カルロス様、これは？」

「お前のものだ。そして、これのおかげでお前に何かあったとわかった」

カルロスの言葉に首をかしげているアルデイス。どうして、これで何かがあったとわかるのだろうか。

「こういうものが片方で流れるはずはないからな。だからこそ、セシリアに連絡をとった。その後でもう一つもみつけたからな。お前の身に異変があったのは間違いないと思ったよ」

「そうだったんですね」

そう呟いた彼女はニッコリと笑うとカルロスの顔をジッとみている。

「それ、つけていただけませんか？」

そう言う彼女はスツと髪をかき上げている。彼女の形のいい小さな耳に真珠をつけるカルロスの手が震えていた。まるで、お互い

の息がふれあうような近い距離。そして、彼はそのまま彼女の頬に手をそえているのだった。

「信じてくれるか？」

「何をですの？」

「お前のことが大事だ。お前しか考えられない。それだけではダメか？ 俺はお前に相応しくないか？」

真摯な表情で問いかけるカルロスの姿。それにこたえるようにアルデイスもゆっくりと口をひらいている。

「わたくしでよろしいの？ 本当に？」

そこまで言ったアルデイスの声がフツと途切れている。しかし、彼女自身がこれは言わないといけないと思っていることだった。カルロスの顔をきちんとみながら、彼女は言葉を続けているのだった。「わたくしはお兄様の言葉を信じてしまいましたわ。そのせいで、セシリアだけでなくあなたにまで迷惑をかけてしまいました。そんなわたくしでも、本当によろしいのですか？」

「お前を責めるつもりはない。たしかにビックリしたし、あたふたもさせられた」

彼の言葉を聞いていたアルデイスの顔がフツと曇っている。だが、そんな彼女を安心させるような言葉が彼の口から出てきていた。

「だが、そのことに感謝もしている」

「えっ？」

彼の言葉が信じられないという表情。そんなアルデイスを愛しげにみつめながら、カルロスは言葉を続けている。

「あのシスコンが目を光らせているからな」

そう言った彼はそれまでとは違う改まった口調でアルデイスに向き直っている。

「初めて会った時からお前が忘れられなかった。一目惚れだと笑ってくれてもいい。だが、俺はお前が喜ぶことなら何でもしてやる。だから……」

「わたくしもですわ。わたくしも初めてお会いした時から忘れられ

ませんでした。だから、あなたからのお話は嬉しかったのに、わたくしが変な意地をはって、すぐにお返事しなかったから……」

アルデイスの言葉にカルロスはすっかり驚いている。信じられないことを耳にしたという顔をしているカルロス。しかし、真つ赤になつてそのことを告げるアルデイスの姿に嘘があるはずもない。それでも、もう一度たしかめたいと思つたのだらう。彼はアルデイスの顔をソツと両手ではさんでいた。

「本当なのか？　それがお前の本心なのか？」

「ええ、わたくしもあなたのことが忘れられませんでしたの」
「お前のことを誰よりも愛している」

アルデイスの大胆ともいえる言葉を耳にしたカルロスは彼女を抱きしめると耳元でそう囁いていた。そして、アルデイス自身もそれに酔つたようになっていく。だからこそ、二人ともここがどこかということを見事に忘れてしまつていたのだらう。ここは大神殿の一角であり、セシリアもすぐ近くの部屋にいる。そして、アルデイスのことを心配する彼女が様子をみにくるのも当然のことだったのだらう。彼女はテラスで他人の目があることも忘れたような二人の様子をみた時、どうすればいいのかわからなくなつてしまつていた。二人が自分に気がついていないと思つた彼女はそのまま、その場から離れている。しかし、彼女の様子の変化をミスティリーナが気がつかないはずがない。何かあつたのかというような顔をしていた。
「リア、どうしたの？」

ぼんやりとした様子で入ってきたセシリアはその問いかけにもこたえることができない。そんな彼女の様子にミスティリーナの遠慮のない声が浴びせられていた。

「絶対におかしい。何があつたのよ」

「別に何も無いわよ」

そう言っているセシリアだが、そんな言葉で誤魔化されるミスティリーナではない。彼女が疑っているのを察したセシリアは仕方がないというような顔をしているのだつた。

「私じゃ、ダメだつてことを思い知らされたわけ」

セシリアの言葉にミスティリーナもようやく気がついたのだろう。すっかり、慌てたような様子になっていた。

「リア、ごめん！ そんなことだとは思わなかったから」

「かまわないわよ。どうせ、ダメだと思っていたんだし」

セシリアの様子にミスティリーナはどういえないのかわからなくなっていた。アルデイスを聖水晶から解放したのはカルロスの声。それはセシリアが呼び掛けるのをためらったせいもある。そして、その理由がどこにあるのかミスティリーナにはわかつているつもりだった。こういうことは言葉にした方がいいと思っている彼女はセシリアと差し向かいで座っていた。

「あの時、お姫様に声をかけるのをためらったでしょう」

断定的な言葉にセシリアは思わずうなずいている。

「ええ、本当に大丈夫かと迷ったもの。でも、これでよかったの。

これでアルデイス様はご自分の好きな方と幸せになれる」

そのセシリアの言葉にミスティリーナは思わず肩をすくめている。それならセシリア自身の気持ちはどうなるのだろうという思い。しかし、そんなことを気にしないようにセシリアは話続けていた。

「私のことなら心配しないで。それよりも聖教皇様に馬車を用意していただかないと」

「素直に思う？」

セシリアがさり気なく話題を変えたことに気がついてはいたが、ミスティリーナは気にしないことにしたようだった。そのかわりのように、ミスティリーナの顔にはセシリアが決めたことを手伝うだけという表情が浮かんでいる。そんな彼女に感謝したような表情をみせながら、セシリアはあっさりと物騒なことを口にしていった。

「出さないなら脅かすわ」

ネタならあるだろうという顔でセシリアはミスティリーナをみている。

「エロ親父だもんね」

聖教皇の知られざる癖を知ったミスティリーナは笑いながらうなずいているのだった。

〔十〕

聖教皇を脅かすような形で馬車を手配させたセシリア。しかし、彼女はそのことを気になどしていなかった。聖教皇がアルデイスを隠すということがなければここまで来る必要はなかった、という思いがセシリアにあったせいだった。その馬車の中にはウイアの服をねぐらに決め込んだ神竜も当然の顔をして乗っている。神竜は大神殿で神竜として崇められる生活よりもグローリアでの気楽な生活を選んだのだった。

「それはそうと、このまま無事に帰れると思う？」

馬車に揺られながら、ミスティリーナは誰にともなくそう言っていた。

「このまま、何事もなく帰ることができればいいんですがね」

「あんたの口ぶりじゃ、何かあるのが当然っていう感じがするけども？」

ウイアの言葉に納得するものはある。しかし、それに素直にうなずくのが嫌なミスティリーナはそう言っていた。そんな彼女の様子にウイアは仕方がないだろうという顔をしている。そんな二人をみた神竜は、ウイアの服の中から首を出しているのだった。

『このままという方がおかしいじゃろうな。たしかにあやつのやったことは問題じゃった。じゃが、それは聖王女を守っていたとも言えることじゃったからの』

「あのエロ親父がね……」

思わずそう呟いたミスティリーナ。しかし、この場にはアルデイスもいるということに気がついたのだろう。慌てて口をおさえている。もつとも、アルデイスはミスティリーナの言葉の意味がわからないとみえて、キョトンとした顔をしていた。それでも、交わされている話の内容はわかっている。彼女自身も気にしたように呟いているのだった。

「何事もなく、グローリアに戻ることはできませんの?」

不安そうなアルデイスの声。そんな彼女の手をしっかりと握っているカルロス。

「心配するな。必ず、お前をグローリアまで連れて帰る」

力強いその言葉にアルデイスは安心した表情を浮かべている。そんな時、彼女はセシリアの様子がおかしいことに気がついていった。

「セシリア、どうかしたの? ずっと、黙ったままだけれども」

セシリアが今までに無理をしていたのは間違いない。そのことはアルデイスにも簡単にわかることだった。だからこそ、彼女はセシリアがどこか具合を悪くしているのではないかと気にしているのだった。

「アルデイス様、大丈夫です。ご心配をおかけしました」

心配をかけまいとそう言っているセシリアだが、その視線はアルデイスを正面からみることとはしていない。そんな彼女の様子に気がついたミステリーナは、アルデイスがカルロスと話し始めたのを確かめると、セシリアの脇腹をつついていいるのだった。

「リア、本当に大丈夫?」

おおっぴらにきくことはできないが、今のセシリアをほっておくこともできないとミステリーナは思っているのだった。

「大丈夫。気にしないで」

ミステリーナの心遣いがわかるセシリアは、彼女だけに聞こえるように囁いている。そんな二人の様子をみていたウィアはホッとした様子も浮かべているのだった。彼なりにセシリアのことは気になっていても何かができるわけではない。彼女にはミステリーナがついていると判断した彼は、もう一つの心配を片付けようと服の中から神竜を引っ張り出しているのだった。

「そろそろ、聖教皇の結界を抜けますよ」

『そうじゃのう。そう言うお主は結界をはれるのか?』

「仮にもリンドベルグの名をいただいています。守護の結界もはれないようなら、長から半殺しにされますよ」

神竜の問いかけにいつもの調子でこたえるウィア。そして彼は馬車の周りに守護の結界をはりめぐらせていた。

『さすがじゃのう』

ウィアのはった結界の強度をそれとなく確かめた神竜は感嘆の声をあげている。それは神竜や聖教皇が創り上げる国一つを守護できるほどのものではない。しかし、馬車はきちんと守ることができるものである。これならば、よほどのことがない限り大丈夫だと神竜は判断したのだった。

『やはり、リンドベルグの名は伊達ではないというわけじゃの』

神竜の言葉に悪びれた様子をみせていないウィア。そうやって話している間にフェーベの聖域はいつの間にか過ぎ去っている。しかし、ウィアがはった結界のおかげで安心して先を進むことができるのだった。そんな中、ずっと馬車に揺られているということにミステイリーナが音をあげかけているのだった。

「ずっと馬車に乗っているのって疲れるのね」

うんざりしたようなミステリーナの声。それもそのはずだろう。普段であれば馬車で移動するなど考えてもいないのだ。馬車はたしかに聖教皇が手配しただけのことはある。スプリングがよく効き、乗り心地はいい。座り続けることを考えて、マットもクッションも上等なものが使われている。しかし、そうはいつてもじつとしているというのは肩が凝るものだろう。それは、馬車に乗るとというのが大勢で乗る乗り合い馬車くらいしか経験がないミステリーナには当然のことだろう。そして、そんな彼女の様子に気がついたセシリアはどうしようかというような顔をしている。そのセシリアの表情にアルデイスは馬車の外をうかがうようにしているのだった。

「セシリア、泉があるみたいね。少し休みましょーう」

アルデイスの言葉に逆らえる者がその場にいるはずがない。口にすることがないだけで、みんな疲れているのだった。しかし、その中でウィアだけが表情を曇らせようとしているのだった。

『お主が気にしておるのはわかる。じゃが、休まねばならぬのもわ

かるじやろっ』

「それはそうですが……」

神竜の言葉にもどことなく歯切れの悪い調子でこたえているウィア。その話し声は小さなものであるためか、他の誰も気にしていないようにみえる。というよりは、休息できるという喜びの方が強かったのだろう。

やがて、馬車は澄み切った水をたたえた泉のそばに止まっている。そして、セシリアが馬車の扉をあけようとした時、ウィアは自分の危惧していることは伝えておかねければと思ったようだった。

「外に出るのはいいですが、馬車からあまり離れないようにしてください」

「どうしてよ」

ちよっと不満げなミスティリーナの声。そんな彼女だけでなく、セシリアたちにも聞こえるようにウィアは喋っている。

「このことは不安を与えるだけなのでいいいたくなかったです、私の一族になされている報告からも明らかなことですし……」

言葉を探すようにして喋るウィアの様子にミスティリーナは苛々したようだった。言いたいことはサッサと言え、といわんばかりの表情を彼女は浮かべているのだった。そんな彼女の様子に苦笑いしながらもウィアは自分が知っていることを話し始めていた。

「今回もそうなる可能性が高いので、聞いてください。アンデッドは自分が獲物と狙った相手をなかなか諦めないのです」

「何ですって!」

ウィアの言葉はセシリアにとっては信じられないことだったろう。彼の言葉が本当なら、一刻も早く安全な場所に移動しないといけない。しかし、そんな場所があるのかとセシリアは頭をかかえこんでいた。グローリアにある神竜の結界をシュルツとジェリータの兄妹はあっさりと破ったのだ。ならば、どこが安全な場だといえるのか。悩むセシリアの耳に聞き覚えのある声が聞こえていた。

「さすがはセシリア様ですわね。大神殿を見張っていて正解でした

わ。セシリア様は見事に聖王女を呼び戻していらつしやる」

そう言うなり笑い出すのはマレーネ。自分の正体が暴露された以上、二度と姿をみせないだろうと思っていた相手があらわれたことにセシリアは驚いているのだった。ポカンとした顔で彼女はマレーネをみているが、マレーネは気にもしていない。

「お姫様、いらつしやい。あなたを待つている方がいましてよ」

そう言いながらアルデイスを手招いている。そして、それに魅入られたようにアルデイスは引き寄せられている。

「アルデイス！」

カルロスが呼ぶ声も彼女には届いていないのだろう。アルデイスは自分を招くマレーネだけをじっとみつめている。

「やつぱり、お人形ね」

マレーネの言葉にキツと唇をかんでいるカルロス。彼は操られているようなアルデイスの腕をしつかりと掴んでいる。

「アルデイス、目を覚ませ！」

しかし、彼女の顔に浮かんでいるのはぼんやりとした空ろなもの。そんな彼女をカルロスは揺さぶっているが、何の反応もかえってこない。

「アルデイス様に何をしたの」

アルデイスの変化の原因がマレーネだと判断したセシリアは彼女に詰め寄っている。しかし、マレーネは薄笑いを浮かべているだけだった。

「面倒だわ。皆さんを招待いたしましょう。でも、その口の悪い蛇はダメだけれども」

マレーネに蛇と言われた神竜は本来の竜体に戻ろうとしている。それをみて嘲笑っているマレーネ。

「年寄りの冷や水よ。年寄りには年寄りらしく大人しくしておきなさい」

その声と同時に吹き荒れる風。それがおさまった時、その場にいるのは竜体に戻った神竜だけだった。そこに一陣の風とともに新た

な人物が姿をあらわしていた。

「しまった。間に合わなかったか！ 君がついているから大丈夫だ
と思っていたのにね」

そう言つて冷やかな目で神竜をみているシュルツ。しかし、そ
の神竜も仕方がなかったという顔をしている。

『マレーネが聖王女を操れるとは思わなんじゃでな』

神竜のその言葉にシュルツはじつと考え込んでいるようにもみえ
た。やがて、顔をあげた彼の表情がことなく寂しげなことに神竜
は訝しげな顔をしている。

『どうしたんじゃ、シュルツ』

「ジェリータが聖王女と一つになった場合、人々は受け入れるだろ
うか」

シュルツの言葉に神竜は何を言うのだといわんばかりの顔をして
いる。そんな神竜を無視するようにシュルツは言葉を続けている。

「あの子には時間がない。予言が成就する時は近いんだ。そして、
その時に消えるのはジェリータ。いや、そうならなければならない
んだ。そうならなければ、あの子は人形のまま」

悔しそうな色がその声に宿っている。彼にはこれしか妹を救う方
法がないことに空しさも感じていたのだろう。

『それでお主は心配しているわけじゃな。じゃが、元々のジェリー
タじゃったら問題はないじゃろう。儂が覚えておるジェリータは聖
王女と同じじゃ』

「カロンがそう言うなら大丈夫だろうね。それなら、僕も頑張つて
みよう。結局、これしかあの子の救いはないわけだからね」

そう言うなり、シュルツはその姿を消している。シュルツにもお
いていかれた格好になった神竜は悪態をつくしかないようだった。

『まったく、どいつもこいつも人を敬うという言葉を知らんのか！』
神竜のその声を聞くものはいない。それは、風にのって流されて
いくだけだった。

「ここ……どこ……」

荒れ狂う風が襲ってきたのは覚えている。しかし、この場所はシンと静まり返った空間である。一体、どうしたのだろうかという思いでセシリアはあたりをキョロキョロみているのだった。

彼女のすぐ横にはミステリーナが倒れている。そして、少し離れたところにはカルロスとウイアの姿もある。だが、その場にいるべきもう一人の姿がみあたらないことに、セシリアはいいような不安に襲われているのだった。

「アルデイス様！　いらつしやらないのですか？」

セシリアのその声にカルロスとウイアも目を覚ましていた。その彼らも先ほどまでいた場所との違いに驚いているのだった。

「ウイア、ここがどこかわかるか？」

「私だって、万能じゃないんです。それよりも、姫君は？」

カルロスがアルデイスの腕を掴んでいたことを知っているウイアは、そうたずねていた。しかし、カルロスからの返事がなく、アルデイスの姿がないことに彼は目敏く気がついているのだった。

「わけがわかりませんね」

そう呟いているウイア。その時、ようやく気がついたミステリーナが驚いたような声を出していた。

「ここってどうなってるのよ。魔法が使えないじゃない！」

「まさか！」

彼女の叫び声に、ウイアも思わず口の中で魔法を唱えている。しかし、呪文など間違えるはずもない簡単な回復魔法が発動する気配をみせない。

「ウイア、あんたも？」

ウイアの魔法までもが発動しないことに、ミステリーナは思わず不安を覚えているのだった。そして、その現実にはセシリアとカルロスも顔色を変えている。ここがどこかはわからない。しかし、自

分たちに好意的な場ではないだろう。そんな場所ですべての魔法が使えない。これが、どれほど不利なことかは考えるまでもないことだった。そんな中、マレーネの勝ち誇ったような声を耳にしたセシリアは嫌な予感だけがふくらむのを押さえることができないようだった。

「やつとお目覚めですのね。でも、間に合ってよかったですわ」

そう言って高笑いを響かせるマレーネをセシリアは睨みつけている。そんな彼女を哀れむような表情をマレーネは浮かべているのだった。

「そんなに怖い顔をなさらなくても教えてさしあげますわ」

そう言つとマレーネはパチンと指を鳴らしている。途端に壁が透けたかと思うと、そこには鏡に映したと思えるほどに面差しの似た少女が二人いるのだった。

「今から面白いものがみられましてよ」

そう告げるマレーネの声はいかにも楽しげに聞こえている。そんな彼女にセシリアは不安しか感じないようだった。

「一体、何が始まるっていうの。アルデイス様と一緒にいるのはジエリータでしょう」

セシリアの声にマレーネは目をみはっている。その表情には、どこでジエリータのことを知ったのだといわんばかりの表情が浮かんでいた。

「盟主様をご存知でしたのね。今から、あの二人のうち生き残る方が決まりましたよ。あの二人はお互いが半身。別々に生きることなどできませんもの」

「負けた方はどうなるのよ」

マレーネの言葉にどう反応すればいいのかわかっていないセシリア。そんな彼女にかわるかのようにミスティリーナがたずねている。それを鼻で笑っているマレーネ。

「聞くまでもないでしょう。負けた方は消えましてよ。そして、生き残るのは盟主様に決まっていますよ」

「そんなことあるはずないでしょう」

セシリアの叫び声を無視したようなマレーネの様子。彼女は薄笑いを浮かべながら振り返ることなく後ろにいる存在に声をかけていた。

「あなたも決着をつけたいわよね」

「そうですね。盟主様も再生なさいますから。その前にこの者たちとの決着はつきたいです」

マレーネの声にこたえるように聞こえた声にセシリアたちは背筋が凍る思いがしていた。その声はルディア近くで遭遇したデュラハンのものに間違いない。あの時はミスティリーナの魔法でようやく互角だったのだ。しかし、今はその魔法がない。

絶体絶命だという思いがセシリアたちにはあるのだろつ。一歩一歩近づいてくるデュラハンから逃れるかのようにギリツ、ギリツと下がっているセシリアたち。

「どこまで逃げられますかしら？ 下がることしかできませんの」

嘲笑うかのようなマレーネの声。そして、それに呼応するようにデュラハンも勝ち誇ったような声をあげている。

「あまり簡単なのは嫌いですがね。しかし、あなた方には煮え湯を飲まされたのです。遠慮はしませんよ」

セシリアたちには逃げ場がないようだった。すっかり追い詰められ背中壁にピッタリとついている。

「心配する必要はありません。盟主様が再生なされれば、あなた方も同じようになるのですから」

そう言うなり満足げな顔で舌なめずりをしているデュラハン。しかし、そこにあらわれた影が冷酷ともいえる響きをその声に宿しているのだった。

「勝手は許さないよ、ハインツ。これはジェリータの望みじゃない」「シュルツ様！」

「お前はジェリータのためと思ってているんだろつね。でも、そうじゃない。お前のやっていることはジェリータを苦しめるだけだ」

そう言いながらシウルツはデュラハンに近寄っている。彼の気迫に押されたようにデュラハンは一歩ずつ引いていつていた。

「僕を怒らせたね。お前のこれ以上の存在は認めない。永劫の闇に墜ちるがいい」

そう言ったシウルツはデュラハンの首に触れている。途端にデュラハンのかき消すようになくなっていくのだった。

「どうして邪魔をなさるのですか！」

マレーネの非難の声にも動じることなく、シウルツは冷ややかにこたえていた。

「君たちのやっていることは自然に反することだからね」

「邪霊王様の理想郷を創るのがいけないことです」

「こんなやり方でしかできないのならね。そして、ジェリータは返してもらおう」

「それは無理です。今から彼女は聖王女を支配しますわ」

マレーネの言葉をシウルツは冷静にきいている。そして、その彼の口から出た言葉にその場にいた者は凍りついたようになったのだ。つた。

「マレーネ、お前の言うとおりににはならないよ。消滅するのはジェリータの方だ」

「信じられませんわ。人間よりもわたくしたちの方が優れております。聖王女を支配できないはずがありませんわ」

シウルツの言葉が信じられないマレーネの反論。しかし、シウルツはそんなことは意にも介していないようだった。

「どちらが優れているかじゃない。ジェリータが不自然な形でいすぎただけだ」

千年という時間を肉体と魂がわけられた状態で生きてきたジェリータ。それが不自然なことであるのは間違いがない。そして、魂こそ転生を繰り返しているが、それをしていない肉体が限界まできているのを誰よりも知っているのがシウルツだったのだ。

「そのあたりで高みの見物でもしているんだらう。お前のやったこ

とを見届けるつもりはないのか」

そう言い切ったシュルツは何もない空間の一点を指差している。それはセシリアたちにしてみれば意味のないことだが、マレーネにはそうではなかったのだろう。彼女の顔色はみるみる青ざめ、自信に満ちた表情が曇っている。そんな彼女の変化をシュルツは見逃してはいなかった。

「あそこには何がある」

そう言ってマレーネに詰め寄るシュルツ。だが、彼女はこたえようとはせず、その赤い唇をギョツと噛み締めている。

「マレーネ、もういいよ。シュルツにはお見通しだったわけだし」
そんな声と共にあらわれた相手。扉も何もない空間から姿をあらわしたその相手はアルデイスとジェリータのいる空間との境に手を当てていた。すると、最初から何もなかったかのように二つの空間は一つになっている。

「マスター！」

ジェリータのどことなく喜ぶような声が響いている。それを耳にしたシュルツの嫌そうに舌打ちをする様子。

「ジェリータ、やめるんだ」

シュルツの声が聞こえたのだろう。ジェリータの表情が一瞬、曇っていた。

「お兄様……いいえ、それはできませんわ。わたくしが、どれほどこの時を待っていたのかおわかりにはなりませんの？」

シュルツの言葉に激しく反発するジェリータ。そんな彼女の前には鏡に映したようにそっくりなアルデイスがいる。

「そうだよ、ジェリータ。これで、お前は元の姿に戻るんだよ」
「はい。マスター」

そう言って笑うジェリータの顔に浮かぶ微笑。その顔はアルデイスにそっくりである。しかし、そこに浮かんでいるのは似ても似つかない表情。それは、自分の優位を確信した傲慢さを感じさせるもの。こんな顔をすることができる者とアルデイスが同じ存在だとは

セシリアは認めたくなかった。しかし、それは真実。ジェリータとアルデイスは千年という時をかけて巡り逢った二つの宝玉。しかし、お互いが互いの半身であるために、どちらかしか残ることができない。

「アルデイス様……」

セシリアの微かな声が響いている。今の状況では消滅するのはアルデイスのようにみえる。しかし、シュルツはそうには思っていない。彼は自分が引きずり出した相手だけを見据えている。

「お前がジェリータに何を言ったのかはわかっていて。しかし、彼女は返してもらおう」

「お兄様、何をおっしゃるの。マスターはわたくしのことを心配してくださっているのよ」

兄であるシュルツの言葉が信じられないというようなジェリータ。そんな彼女を痛ましのげな表情でみているシュルツ。そして、自信たっぷりの様子でジェリータに近寄ろうとしているマスターこと邪霊王。

「結論は出ているね。君がこうして非難じみたことを言っても、ジェリータは正しいことは何かを知っているよ」

そう言いながら、ジェリータに近寄ろうとする邪霊王。それをシュルツは強引に引き止めていた。

「これ以上、妹に関わるな。お前がこの世の秩序を壊そうとしているのはわかっていて。千年前もそうだったな。虫一匹、殺すことのできなかつたジェリータの手を汚させた」

「それは、君の勘違いだろう。でも、そこまで言うのならジェリータに選ばせよう」

そう言った邪霊王は、まっすぐにジェリータの顔をみている。その顔に浮かんでいるのは、とろけるような甘い表情。少女であれば、それに抵抗などできるはずがない。

「マスター……」

どこことなく、ウットリとした様子でいるジェリータ。そんな彼女

にアルデイスが近寄っていた。

「あなたは、可哀想な人だわ」

同じ顔、同じ声がその場に響いている。

「どうして、そんな言葉だけを信じようとするの？　どうして、現実をみようとししないの？　あなたのことを心配してくれているのは誰なの？　それさえ、わからなくなっているの？」

恐れた感じもみせず、ジェリータに近寄るアルデイス。そんな彼女にイヤイヤをするように首を振っているジェリータ。

「あなたの言っていることはわからない。

わたくしのことを心配してくれているのはマスターよ」

そう言っているが、ジェリータの言葉には自信がないようにも聞こえる。そんな彼女の様子に舌打ちをしている邪霊王。そして、それを見ていたマレーネは眉をひそめていた。

「邪霊王様、どうなさいますか？」

「ジェリータが揺れているな。このところ、限界が近いとは感じていたがここまでかな」

その囁きは、マレーネ以外には聞こえることはない。そして、邪霊王の言葉にマレーネは納得したようにうなずいているのだった。

「そうですね。この頃のジェリータはおかしいと思っていましたか、そういう理由だったんですね」

マレーネの言葉にうなずきながら、どうするべきかと考えているような邪霊王。その視線の先にいるのは、鏡をみるようにそっくりな二人がいた。

「もう少し、様子をみよう。上手くすれば、望みどおりの人形が二体できあがる」

そう呟く邪霊王の様子をうかがうようにしているマレーネ。もっとも、彼女にしてみればそんなことはどちらでもいいことだった。彼女は邪霊王が決めたことに従うのだ、といわんばかりの表情を浮かべている。そんな思惑を持っている二人がじっとみていることなど気がついていないように、アルデイスはジェリータに詰め寄って

いた。

「あなたは覚えていないの？ あなたのことを誰よりも心配してくれているのは、あそこにいる人じゃないでしょう」

そう言うなり、後ろを振り向き、その場にいる邪霊王を指差しているアルデイス。しかし、彼は平気な顔で、泰然とした様子を崩そうとはしていない。

「目を覚まさない。いつまでも、こんなことができるわけないでしょう」

自分の言葉くらいでは、邪霊王には何の効力もないとわかっているのだろう。アルデイスはジェリータに向き直ると、再び問いかけている。しかし、ジェリータはそれも聞きたくないというように耳を塞いでいた。その姿はいかにも頼りなげな子供のようにみえなくはない。それは、後ろでみていることしかできないセシリアたちには奇異な思いを抱かせるものだった。

「ねえ、リーナ。ジェリータってあんなに弱々しかった？」

信じられないものを目にしたかのように、セシリアの声は震えている。そんな彼女にミステリーナもどう言えばいいのかわからない。そんな彼女たちの疑問を解決するようなシュルツの声が聞こえている。

「本来のジェリータはあれなんだよ」

「だって、グローリアで会った時はあんな感じじゃなかったわ！」

一瞬ではあったが、強烈なものを感じさせたジェリータの存在感を覚えているミステリーナ。その彼女の本来の姿がこれだと言われても、納得いかないところがある。しかし、セシリアの方は逆に納得もしたようだった。

「アルデイス様と同じと言っていましたものね」

「そうだよ。あれが本来のジェリータ」

そう言うシュルツの声は、どことなく寂しげでもある。今のジェリータの状態が兄である彼にはよくわかっていているのだろう。そして、そのジェリータに恐れげもなく近寄っているアルデイス。

「わたくしの方をみて。わたくしは知っているの。あなたのことを本当に心配して、大事に思っているのは、あそこにいる人じゃないわ」

そう言い切ると邪霊王を睨みつけているアルデイス。そんな彼女の姿にセシリアは驚いたような顔をしていた。セシリアの知っているアルデイスは、あのような言い方はしない。どうしたのだろうかという不安がわいているようだった。

「眠っている間に魂が記憶を取り戻したんだよ」

「えっ？」

シュルツの言葉には驚かされるばかりだとセシリアは思っている。

「魂の記憶？」

「ジェリータとして生きていた時の記憶」

セシリアの疑問をあっさりと言で片付けているシュルツ。だが、それを聞いたセシリアは逆になんともいいようない表情を浮かべているのだった。そんなセシリアの様子にアルデイスは気がついてもない。彼女はジェリータに柔らかな笑顔を向けると、手を差し出している。

「わたくしの手をとって。そうすれば、何もかもがわかるわ。あなたのことを心配しているのが誰かはすぐにわかるのよ」

そう言いながら差し出される白い手。それをジッとみていることしかないジェリータ。

「ジェリータ、どうしたんだい？ お前の望みは何だったのかい」

邪霊王の声にジェリータの表情がまた変わる。彼女は自分がやることを思い出したというように、アルデイスをじっとみつめていた。「わたくしの望みは元に戻ることですわ。それだけしかありませんわ」

ジェリータの返事に邪霊王は満足げな表情を浮かべていた。

「そうだよな。じゃあ、君のやることはわかるよね」

そんな言葉にうなずいているジェリータの表情はそれまでのものとは違う。セシリアにしてみれば、これこそがジェリータという者

だったのだろう。しかし、シュルツは顔色が悪くなっているようだった。

「ジェリータ……」

いつもの自信ありげな顔がどこにもみられないシュルツ。それだけ、ジェリータの様子の変化はシュルツにとつて驚くものなのだろう。彼にしてみれば、この場でジェリータがこのようになるとは思ってもいなかったのだ。だが、アルデイスは動じようとはしない。彼女は穏やかな微笑をたたえ、ジェリータと向き合っている。

その表情は慈愛に満ちた聖母のようなもの。相手を慈しみ、愛おしむような表情。アルデイスにそんな表情ができるとは、セシリアには考えもつかなかったのだろう。アルデイスの顔に浮かぶのは『聖王女』といわれるに相応しいものでもある。

すべてを知っていながら、すべてを受け入れる。

そんな雰囲気なたたえているが、それはすべてを諦めているのではない。柔らかな笑顔ではあるが、その中には芯の通ったものがあるのも間違いない。アルデイスはゆっくりとジェリータに近寄るとその手をとろうとしていた。

「わたくしの手をとつて。あなたが本当に知らなければいけないことがあるわ」

そう言いながら、差し出される白い手。それをとるのを拒むかのように首を振っているジェリータ。しかし、アルデイスはあきらめようとはしていない。相変わらず、聖母のような慈愛の表情を浮かべながら、ジェリータに近寄っていく。

「来ないでよ。わたくしは、ちゃんと知っているわ。今さら、あなたに教えてもらう必要なんかないわ!」

「どうして? この手をとるだけでいいのよ? そんな簡単なこともしたくないの?」

首をかしげるようにして、たずねているアルデイス。その様子は無邪気としかいえないものだった。しかし、セシリアにはアルデイスがそんな行動をとる意味がわからない。そして、ジェリータもア

ルデイスの行動の真意がわからないために不安を覚えている。だがそうではあっても、おずおずとした感じでジェリータはゆつくりとその手をのばしていた。

「本当なの？」

怯えたような少女という感じがするジェリータ。その彼女を包み込むように近寄るアルデイス。

「怖がることはないわ。だって、わたくしたちは同じ存在じゃない。たしかに、別れてしまったわ。でも、元に戻るのがあなたの望みなんでしょう？」

「そうよ。戻るの？」

ジェリータの言葉にアルデイスは黙って微笑んでいる。それを見たジェリータは今にも泣き出しそうな顔になっていた。

「手を貸してちょうだい。わたくしは、あなたが知らないことも、たくさん知っているのよ。それを教えてあげる。それでも、あなたがあの男を信じるのかしら」

そう言ったアルデイスは、邪霊王の方を睨んでいた。聖水晶の中で眠っている間に、彼女は色々なことを知ったのだらう。そして、アルデイスのそんな気迫におされているようなジェリータ。彼女はそっと、差し出されるアルデイスの手をとっていた。

そうやってアルデイスとジェリータの手が触れたと思った瞬間。

あたりには眩しい光がいつぱいになっていた。その光に思わず目をつぶってしまうセシリアたち。その光の膜に包まれているような二人。

「どうなってるのよ」

あまりにも眩しくて目をあけることのできないミステリーナがそう言っている。しかし、それにこたえることができるものがその場にいるはずがない。

「邪霊王様、あれは？」

思いもよらぬことが起こっていることに、動転しているマレーネ。しかし、邪霊王自身も何が起ころうとしているのかわかっていなか

ったのだ。彼自身も固唾をのんだように光の膜を凝視している。

そして、その光の膜の中――。

お互いに鏡に映したかのようにそっくりな二人は正面からお互いをみているのだった。

トクン、トクン――。

互いに打つ心臓の音も、寸分のずれもない。まるで一つのものであるかのように、同調しながら脈打っている。そんな中、一つの光景が浮かんでいた。

暖かなひざしが差し込んでいる場所。銀髪青年がかたわらにいる少女を優しい顔でみつめている。それにこたえるように、同じ優しい表情で寄り添っている少女。

「お兄様……」

アルデイスの手を握っているジェリータが呟いている。それは、かつての穏やかな日の記憶なのだろう。だが、それが一変している。思い詰めたような表情のジェリータ。それを懸命に止めようとしているシュルツ。そして、お互いに言い争う兄妹の声が聞こえていた。

「お兄様、わかってください。このままでは、わたくしたちが暮らす場所がなくなりますわ」

「だからといって、創世神に逆らうことは許されない」

「わかっています！ でも、誰かがやらないといけないことですわ」
「やめるんだ、ジェリータ。今なら、まだ間に合う！」

これはいつのことだろうかとアルデイスは首をかしげていた。そうしているうちに、これは聖戦と呼ばれる戦い前夜だということに彼女は思い当たっていた。そして、それは間違っていない。同じ光景をみていたジェリータが今にも泣きそうな顔をしているのだ。

「あれしか方法がなかったわ。だから、やったのよ」

「でも、そのせいでわたくしたちは二つになったわ。そして、あなたは苦しんだまま」

ジェリータを気遣うようなアルデイスの言葉。そんな彼女にジェ

リータはイヤイヤをするように首をふっている。そんな中、アルデイスはジェリータに優しく告げている。

「わたくしたちは、元は一つだったわ」

それは、魂の持っていた記憶が戻った彼女だからこそ言えること。そんなアルデイスの言葉にどう返事をしていいのかわかっていないジェリータ。その表情は頼りなく、今にも泣き出しそうである。

「わたくしの望みは……」

「望みは何？」

優しい表情でたずねるアルデイス。

「戻りたいの。わたくしはそれしか望まないわ」

「戻りましょう。あなたの望みがそれならば」

「もどれるの？」

子供のようにそうきいてくるジェリータ。その彼女にアルデイスはニツコリ笑って、手をさしのべている。

「大丈夫。さ、手を貸して」

アルデイスのその声にジェリータは手をのばしていた。同じような白い指と指が絡み合う。お互いに肩がふれ、息がかかり、髪が絡み合う。

お互いを映したように、体格も何もかもがそっくりな二人。寸分の狂いもなく、重なっているところは、二人ではなく一人が立っているように見える。

「もどれるの？」

どこことなく、不安もあるようなジェリータの声。それに、ゆつくりとこたえているアルデイス。

「あなたは、もどりたい？」

「もどりたいわ。もう、こんなのはイヤ」

ジェリータのその言葉にアルデイスもうなずいている。お互いにどちらがどちらともわからない姿。トクン、トクンと脈打つ音は、ますます大きくなってきている。そして、その音はセシリアたちにも感じられるものだった。二人を包む光は相変わらず眩しいが、な

んとか目をあけられるようになっていたのだ。そして、そうすると膜がまるで生命を持つように脈打つ様子がみれるようになっていた。

「どうなっているの？」

呆然とした様子でそう呟いているセシリア。

「邪霊王、お前の思惑は潰れるだろうね」

シュルツは光の膜と邪霊王を交互にみながら、そう言っている。

「一体、何が起きているというんだ」

「わからないかい？ あるべき姿に戻るだけだ。それも、お前のおかげというべきかな？」

膜の光が明るくなってくるのを期待するような目でみているシュルツ。彼は、膜の中で何が起きているのかがわかっていくような目をしているのだった。そんな彼の様子に、邪霊王は何かを感じている。

「お前はこうなるといふのがわかっていたのか？」

どことなく、焦ったようなその声。それに対して、どこか余裕を感じさせるシュルツの声。

「はつきりとはわかっていたわけじゃない。でも、お前の小細工が限界までできていたのも現実だったろう」

シュルツの言葉に悔しそうな顔をしている邪霊王。そんな中でも、光の膜は徐々にその姿を変えようとしているようにも見える。

「お前は何が言いたい」

「それくらい、わかっているだろう。それとも、言わないとわからないかい？」

どことなく小馬鹿にしたようなシュルツの態度。それに対して、邪霊王は苛立ちを隠すことができないようだった。

「貴様は……」

そう言いかけた彼の言葉は最後まで紡がれることはなかった。今まで以上の光がきらめき、空間が光で埋め尽くされる。そして、その光の中央にある人影は一人だけのもの。その姿は誰のものなのか

とその場にいる誰もが固唾をのんでいる。

「あれはどちらなの？」

セシリアの震えるような声。その声にこたえるようにその顔がまっすぐにあげられていた。しかし、アルデイスとジェリータは瓜二つ。残った一つの影がどちらかはすぐに答えが出ない。しかし、シユルツにはどちらかというのわかっていているだろう。彼の顔には寂しげな表情が浮かんでいる。

「うまく、いったようだね……」

彼のその声を聞いたセシリア。そして、残っている相手が着ているものは、アルデイスのドレスであるようにみえる。ということは、残ったのはアルデイスと置いていいのだろう。

「シユルツ、あれはアルデイス様なの？」

どうという答えが返ってきてても受け止める、という覚悟でセシリアはそうたずねていた。

そんな彼女にシユルツは哀しみと喜びの入り交じった表情でこたえている。

「あれは、ジェリータじゃない。その身のうちにジェリータを受け入れた聖王女」

「お前はそう言うが、あれはアルデイスだな」

それまで黙って様子を見ていたカルロスがそうたずねていた。

「そうだね。彼女は聖王女に間違いない。少しは、ジェリータの影響があるかもしれないけど。でも、君はそんな彼女は受け入れられないかい？」

シユルツの言葉にカルロスは肩をすくめていた。彼にとっては、そんなことは関係ないのだろう。カルロスにとって大切なのは、自分が納得できるかどうか。そして、彼の出した結論は、ジェリータを身のうちに持つていようとアルデイスはアルデイスということだったのだ。

「アルデイスはアルデイスだろう。俺にとって、あいつはアルデイスでしかないな」

そんなカルロスの言葉にホツとしたようなシュルツ。そして、光の膜から姿をあらわしたアルデイスは、邪霊王をキツと睨みつけていた。

「わたくしは、あなたの道具にはならないわ。そんなことをジェリータも望んでいなかったわ」

キツパリと言い切るアルデイス。その言葉に、邪霊王はどうしようかと考えているようだった。

「こっちの思惑をこえたか……まさか、こうなるなんてね。今の君は人形じゃないな」

「わたくしは、人形になんかならないわ！ そんなことになるなんて、考えたくもない！」

アルデイスの声に邪霊王は思わずたじろいでいる。そして、そのまま彼はその場から姿を消そうともしているのだった。

「待ちなさいよ！」

そんな邪霊王の様子に目ざとく気がついたミステリーナは引き止めようとしていた。このまま、逃がすことがあつてはまた同じことが起こるかもしれぬという危惧を彼女は抱いているのだった。しかし、そんなミステリーナの言葉を笑い飛ばしている邪霊王。

「ここは魔法が使えないんだよ。君がいくら頑張っても無理じゃないかな」

そう言うなり、邪霊王はマレーネをうながすようにして、その場から消えていた。それを止められるであろう唯一の存在はシュルツであつたろうが、彼はあえて止めようとはしていなかった。

そして、邪霊王が姿を消したことで重苦しかった雰囲気が消えた空間。その中でジェリータと融合したアルデイスは華やかな笑顔を浮かべているのだった。今までの彼女には感じられない雰囲気もあるようにもみえる姿。しかし、彼女がアルデイスであることには間違いない。カルロスは迷うことなく駆け寄っていた。

「アルデイス」

人目も何も気にしないように彼女を抱きしめているカルロス。そ

れを見るセシリアの思いは複雑なものでもあった。しかし、彼女は何も言うことはできない。

「カルロス様」

ようやく、帰ってくるのができたというように、アルデイスはそう呟いている。彼女にしてみれば、あまりにもいろいろなことがあったのだろう。それでも、ここにいるのだと言っているような表情。そんな彼女をみつめているシュルツ。彼にしてみたら彼女は妹と同じ存在なのだろう。それを証明するかのような暖かいまなざし。セシリアが複雑な表情をしているのが気にならないわけではない。しかし、空間は希望と光がきらめいているようにも感じられている。そして、それを彩るのがアルデイスの笑顔だったのだ。

「エピソード」

穏やかな光が差し込んできている。グローリアの王城は王女であるアルデイスがみつかったことで、喜びに沸き返っているのだった。そんな、城内の一室。そこでぼんやりとしたような表情でいるのは、今回の件での最大の功労者ともいわれているセシリアだった。そんな彼女のかたわらに近寄っているミスティリーナ。

「リア、ぼんやりしてどうしたのよ」

彼女がそうなる理由はわかつている。それでも、それではいけないと彼女は思っているのだった。

「リーナ……」

「そりゃ、あんたの気持ちもわからないことはないけれどもね」

セシリアがカルロスに対して抱いていた思いをミスティリーナは知っている。そして、それが叶うことがないことも。

グローリアに無事に帰還したアルデイス。その彼女のそばに寄り添っているカルロス。周囲の思惑もあるだろうが、二人の気持ちが通じ合っているのも間違いない。この二人の婚約が正式のものとして発表される日が近いのも間違いないことだった。

「カルロス様に何も言わなくてよかった」

セシリアは思い出したようにポツリと呟いているのだった。

「あたしはそうは思わないんだけど？ あんたはスツキリしないでしょう？」

「でも、そうしていたらアルデイス様を悩ませていたわ。それくらいなら、今の方がよかったのよ」

そういうセシリアの言葉にミスティリーナはため息をついている。その顔に浮かんでいるのは、わからない、というような表情。そんな彼女にセシリアは笑っているのだった。

「リーナ。そうやって、私のことを心配してくれるあなたが好きよ。でも、いつまでも落ち込んでいられないのよね」

「そうなの？」

セシリアの様子が変わったことにミスティリーナは首をかしげていた。その彼女の目は部屋中にある花束に釘付けになっているともいえるのだった。

「リア、これは？」

「アルデイス様の婚約が決まった途端なのよね。本当になんて言ったらいいか」

セシリアの言葉にミスティリーナはどう言っているかわからないようでもある。思わず、ポカンとした顔で彼女はセシリアにたずねているのだった。

「えっと……あのシスコン、今度はリアにちよっかいかけてるの？」
呆れたようなミスティリーナの声が室内には響いていた。信じられないという顔のミスティリーナをみてセシリアは笑っているだけだった。

そして、同じ城内の別の場所。

そこで、アルデイスはカルロスと穏やかな時を過ごしていた。ようやく、自分の思いを口にすることができて幸福な思いでいるアルデイス。その彼女を暖かく見守っているカルロス。

「カルロス様、わたくしでよろしいの？」

それは、今まで何度も口にされた問いかけ。それに対するカルロスの答えも同じものだった。

「当たり前だろう。お前もいろいろなことがあったからな。心配になるのはわかる。だがな、俺がお前のことを愛しているのは間違いない」

そう言ったカルロスはその場にあらわれた影をみつけて、少し嫌そうな顔をしていた。もつとも、相手はそんなことを気にしてはいない。流れるような銀髪が日の光に輝いている。

「お兄様」

「シユルツ」

ジェリータの意識を身に受けたことで彼のことを『お兄様』と呼

ぶアルデイスの嬉しそうな声とカルロスのちよつと当惑したような声。それらを軽く流したシュルツはアルデイスのそばに近寄ると、その髪を撫でているのだった。

「調子は大丈夫かい？」

「ええ。でも、本当にあれでよろしかったの？」

シュルツの顔をジツとみているアルデイス。その彼女を彼は愛しげにみつめている。

「そうしないといけなかった。やっと、ジェリータもゆっくりと休める」

シュルツのその声にアルデイスは微かにうなずいていた。それは、すべてを知りながら受け入れたアルデイスの覚悟でもあるのだろう。「困ったことがあれば、いつでも相談おいで。僕にとって君は、ジェリータと同じだから」

そう言うシュルツの耳にはアルデイスを呼ぶアルフリートの声も聞こえているのだろう。笑いながら、その姿を消そうとしていた。「そっちの坊やは気にならないけれども、もう一人の駄々っ子は苦手だよ。また、様子をみにくるからね」

その言葉に突っ掛かろうとしているカルロス。そんな彼をたしなめているアルデイス。そして、微かに聞こえてくるアルフリートの声。それは、王国の平安を物語るものだったろう。そんな中、アルデイスはカルロスと同じくらい大切な相手の姿をみつけていた。

「セシリア、一緒にいてくれるわよね？」

アルデイスの言葉にセシリアは笑っている。それは、これから一緒にいるという、セシリアからの言葉にならない言葉だったのだろう。光は柔らかく、その場を照らし、包み込む。様々な思いを抱きながらもお互いが必要だとわかっている。だからこそその表情。そして、祝福するかのように爽やかな風がソヨソヨと流れているのだ。

—
f
i
n
—

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1539c/>

白と黒の神話

2010年10月8日15時01分発行